

【資料翻刻】

池田家文庫「備陽国学記録」(五)

倉地 克直

凡例

一 本稿は、池田家文庫資料叢書を継承する事業として、岡山大学附属図書館所蔵池田家文庫に収められている「備陽国学記録」全六九冊(総目録番号R1-1-1-69)を順次翻刻するものである。今回は(五)として、正徳元年〜同五年(R1-9)を収めた。

一 「備陽国学記録」は岡山藩学校の業務を記した日誌である。学校役人が留めたものを後に適宜一冊に綴じている。また編輯にあたっては朱筆による訂正・加筆が行われ、付紙による追加もなされている。岡山藩学校は江戸時代の藩校として最も古いものの一つであり、しかも創立から廃止まで二〇〇年余り途切れることなく活動しており、そのことは江戸時代の教育史上注目すべきことである。加えて、その全期間にわたって記録が残されているという点でも希有な事例と言える。またこの記録には、庶民のための学校として著名な閑谷学校に関する記事も含まれており、貴重である。

一 翻刻にあたっては、できるかぎり原本の体裁を再現するように努めたが、紙面の都合上、または読みやすさを考えて、変更を加えたところもある。改行はいちいち指摘せず、闕字・平出は省略した。

一 表紙は、およその形状を罫線枠で囲んで示した。朱書された貼紙の内容は、「」を付けて記し、右肩に(貼紙朱書)と注記した。
一 付紙は、およその場所に※印を付け、その付近に内容を「」を付けて示し、(付紙)と注記した。

一 本文中の朱書による訂正・挿入は、(朱書)と註記し、内容を「」を付け

て記した。

一 本文中の二行分けの割註は、へ、を付け活字を小さくして示した。

一 史料本文の字体は原則として常用漢字を用い、異体字・略字・俗字・あて字については一部を使用し、必要に応じて通用の文字を右行間に()で示した。地名などの表記が通用のものと異なる場合、適宜現行の文字を同様に()で示した。

一 史料を読みやすくするために、適宜、読点(・)、並列点(・)を付けた。
一 明らかに誤字・誤記と思われるものは、右行間に正しいものを()で示し、疑念が残る場合は(カ)とした。脱字と思われるものは(脱)(脱カ)、重複していると思われるものは(衍)(衍カ)とした。意味不明の場合合は(ママ)とした。

一 変体かなは平かなに改めたが、格助詞のうち次の文字と、接続詞の「并」は活字を小さくして使用した。

者(は) 江(え) 茂(も) 与(と) 而(て) 而已(のみ)
くりかえし記号は、原本に順って、「々」(漢字)、「ゞ」(ひらかな)、「ゝ」(かたかな)、「く」(二字以上の熟語)を用いた。

一 旧字・古字のうち、次のものは新字体に改めずそのまま使用した。

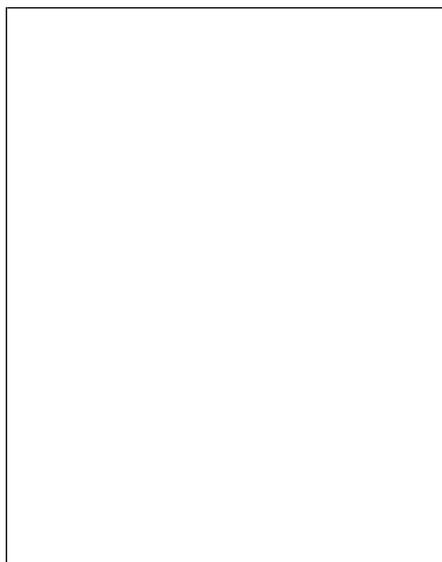
龍 瀧 籠 籠 嶋 餘 飴 亘 富 舛

一 異体字・俗字・略字・合字については、次のものを使用した。
珎(珍) 躰(体) 悴(悴) 盼(悴) 嚶(扱) 并(并) 苧(州)
吳(異) 糧(糧) 扣(控) 帑(紙) 欵(歟) 取(最) 窄(窄) 哥(歌)

磯(磯) 込(とて) ヂ(しめ) 才(等) 才(より) ヂ(して)

一 原稿作成・原本との照合・割付・校正は倉地克直(岡山大学名誉教授)、今津勝紀(岡山大学文明動態学研究所教授)・松岡弘之(岡山大学学術研究院社会文化学学域准教授)・東野将伸(岡山大学学術研究院社会文化学学域准教授)が行った。

（表紙）



（小口書）「九 正徳国学記」

正徳元辛卯年

元旦

一中室御鏡餅卯之刻居相孫八郎開中室之扉 奉之

手伝当番 古家喜右衛門

一同日未之刻孫八郎徹之 手伝 同人

一三ヶ日校厨御料理自今年如先規ニ成ル

五日

一読初之儀如例

開戸

笹岡次郎七郎
岡 助右衛門

捲簾褰帳

笹岡次郎七郎
岡 助右衛門

焚香

市浦清七郎 俯伏

堂中皆再拜

唱賛

辻本文平

下座 奥

拜 奥

拜 着座

降帳垂簾闔戸

笹岡次郎七郎
岡 助右衛門

擊柝読出五等之孝

梁川 敬中

講孝経

窪田 道和

授胙諸生

笹岡次郎七郎
岡 助右衛門

両人侍中室之左右授之、堂中之諸生左右より一人宛詣中室、頂戴之、直食堂飯台ニ着

五日

一於講堂諸生之間江出テ後見并胙頂戴差図共

市浦善藏

窪田友右衛門

横山清内

古家喜右衛門

斎藤兵次郎

長崎才次郎

江 文次郎

梁川 敬中

仁科道竹

左之五人読初之節諸生之間江出読

江田甚三郎

渋谷 文藏

古家吉之丞

草野善兵衛

同 善八郎

五日
一見台ヲ出ス
一四ツ前諸生群座
古家善之丞

左座之諸生 菊舎

後見市浦善藏
古家喜右衛門

江 文次郎

齋藤兵次郎

仁科道竹

右座之諸生 竹舎

後見不出

小原宗助

窪田友右衛門

横山清内

長崎才次郎

森本才右衛門

梁川敬中

江田甚三郎

五日
一着座肝煎
左座 古家喜右衛門

右座 梁川敬中

一火廻
安井李兵衛

人足 忝人

一校門番人
藤岡勘右衛門預
御足輕忝人

玄関
同 忝人

已上

五日

一參校諸生
左座之上 窪田道和

佃 先五郎
伊藤定之丞
野間伝吉

奥山三之進
石田六之進
梶浦伝吉

須加庄八郎
河田勝之丞
山田仁三郎

門田松之丞
加世七三郎
笹岡平次郎

大野三次郎
向井十蔵
杉山吉次郎

梶浦藤之助
渡辺十郎右衛門
西尾是庵

青地伝吉
岩田玄仲
石津次郎三郎

窪田忠助
坂野五郎吉
渡辺小八郎

岩野権之丞
安藤助九郎
馬場小三郎

今中助太郎
角南太郎吉
広内権右衛門

岡 千助
杉山市之助
駒田友省

笹岡善七郎
堀内源五兵衛
佐藤九三郎

安藤郷太夫
右座

和田鉄之助
丹羽春蔵
磯辺兵助

齋藤助之進
宝 三之助
坂井松之助

内藤栄之助
荒木助五郎
久保田虎之助

杉浦佐太郎
尾関千之丞
河原九平太

安田喜之助
森寺兵大夫
本郷五郎作

坂口楨之助
下濃徳之丞
波多野直之丞

先山権三郎
伊庭金之助
瀧 数之助

内藤万清
池田六之丞
飯田幸之丞

森 門助
日置伴内
近藤七九郎

船橋鉄之丞
野尻岩太郎
寺内円之丞

井上藤次郎
河崎定之助
長谷川又八郎

水野半之丞
千馬藤之丞

已上七十五人

五日

一槍遣初人数如左

出勤

坂口勘左衛門

荒尾紋左衛門 田中惣兵衛 尾関弥三郎
 上嶋浅右衛門 糟谷源左衛門 守田与助
 市浦善藏 荒尾源太郎 岡田勘六郎
 岩田忠作 野間三之丞 梶川孫三郎
 村上喜六郎 丸山九右衛門 生駒忠次郎
 羽山太郎左衛門 津田小源太 津田源之助
 坂井松之助 大野三次郎 門田松之丞
 笹岡平次郎 山田仁三郎 加世七三郎
 須加庄八郎 斎藤助之進 大内藤藏
 久保田虎之助 桜井八十郎 佃 先五郎
 生駒弥太郎 山田藤藏 田坂六十郎
 横山清内 和田弥兵衛 坂口楨之助
 勘左衛門弟子ニ成初而竹舎江入 同上
 森本才右衛門 杉山吉次郎 杉浦佐太郎
 岡 助右衛門 津田源六郎
 右八勘左衛門書出シ也
 已上四十一人
 五日
 一見拜
 池田 奎 丹羽小平太 加世藤三郎
 武田茂助 淵本弥平次 中村友達
 伊藤与一郎 伊藤忠五郎 山根又八郎
 大森十左衛門 則武弥七郎 石原三省
 已上十二人
 一次之子共十三人
 浅野半藏 佐藤小三郎 則武丑之助
 寺見菊次郎 市村八十郎 関 孫三郎
 高尾正之助 横山孫太郎 山本五郎七郎
 岡村寅之助 加藤熊太郎 和田市太郎

高井五三郎
 五日
 一 市浦清七郎 窪田道和 笹岡次郎七郎
 岡 助右衛門 小原宗助 津田源六郎
 居相孫八郎 安井奎兵衛 辻本文平
 横山清内 古家喜右衛門 和田弥兵衛
 森本才右衛門 江 文次郎 江田甚三郎
 梁川敬中 渋谷文藏 古家吉之丞
 福井五兵衛 三宅仁右衛門 次田忠兵衛
 草野善兵衛 草野善八 御足輕式人
 御門ノ 関右衛門 長吉 人足五人
 已上三十二人
 右御鏡餅頂戴人数都合百五十一人
 五日
 一 参校之諸生九十六人之内左之二十一人不参
 土倉定六郎 湯浅半助 神戸源太郎
 松田与三右衛門 大内藤藏 淵本八三郎
 笹谷門三郎 大久保門三郎 尾関万之丞
 鈴木虎之助 藤岡六太郎 藤岡六次郎
 村田加五郎 伊丹嘉平次 河田七助
 瀧波与兵衛 津田源之助 土倉新之丞
 田坂六十郎 小原忠三郎 西浦清之丞
 正月五日
 一 左之両人当年廿歳ニ付、御法之通除列座之札
 尾関万之丞 安宅権兵衛
 同日
 一 左之四人当年参校仕間敷断有之、除列座之札
 淵本七十郎 中村兵助 村上岡之丞

河合源五郎

同日

一 伊藤与一 郎子忠五郎初而入学、十四歳、左座

七日

一 浅野忠左衛門為年始之礼一昨五日ニ出テ、今日歸ル

同日

一 高取九大夫右同断

八日

一 奉公人之義ニ付御触有之、如左

奉公人出替ニ付御両老被仰渡候趣左ニ書付候

一下ニ奉公人当春も可為居懸事

一去春奉公人不足ニ付、在中より去年切ニ而呼出シ候奉公人も有之候、此

者共ハ当春宿人可仕候、何分ニも宿人仕候由之断申候者之儀ハ、居懸リ

ニ被召使度者ニ而も人奉行江令相尋可被任返答事

一 此度暇遣候鎗持・馬取・草履取・相之者・人足、其者之村所請人名并只

今迄遣候給米之員数共書付、正月十日より同晦日迄之内ニ御郡会所人奉

行江可被差出候、居懸ニ召使候者も村所請人之名別紙書付、是又可被差

出候、此度暇出之奉公人ニハ人奉行より給米を極、手札相渡シ申^{（マツ）}申^{（マツ）}答ニ

候而、正月十日より同晦日迄之内手札取せ可被申事

一 奉公人被抱候ハ、日数五日迄之内、如前々之抱差紙ニ先主之名書付、

人奉行へ可被差出候、延引有之候得者、奉公人不足之吟味、人奉行手前

ニ而差問申候間、遲滞有之間敷事

一 右之通暇出之奉公人并新出奉公人共ニ人奉行より給米極メ之手札出シ申

上ハ、手札所持不仕者出替時分過候共、抱被申間敷候、尤手札之外ニ増

給遣候様成儀有之候てハ、惣方不^{（マツ）}メリニ成申候間、増給堅可為無用事

一 奉公人一旦召抱出替時分過、いつニ而も又置替之儀有之共、出入之度ニ

人奉行へ付届可有之候、無左候而者奉公人之員数不^{（マツ）}メリニ罷成候事

一 出替時分過候迄、長屋^{（マツ）}支配方屋敷之内又ハ町方近在之村ニ罷有候奉

公之働不仕、出替時節を外シ、其者心俣ニ給米も相对仕者前々有之旨相

聞候、出替過候而右之通之者無之埒ニ候、町ハ町御奉行、在ハ御郡奉行より可被申付事

一 唯今迄江戸奉公人若党ハ式儀増シ、小者若儀半ましニ而候得共、向後若党ハ三儀増シ、鎗持以下式儀ましニ可被申付事

人奉行

野崎六大夫

佐藤八大夫

村上小四郎

青木又五郎

村瀬勘九郎

岡村兵左衛門

加^{（マツ）}野伝助

入江久左衛門

女奉公人之事

一 茶之間はした出替之節、前々御触之通、在之者ハ上伊福村孫兵衛、町之

者ハ鳥羽屋源四郎方江相届可被申候、在町奉公人共右兩人より之手形無

滞慥取置可被申候、并暇遣候者前ニ取置候手形早速右兩人江返シ遣可被

申候、間ニハ手形取遣シ不仕者も有之由ニ候、向後無滞様ニ可被仕候

一 例年之通惣女奉公人町在共召使候女格別之無構一等ニ付、届有之答ニ候

正月

当春奉公人出替ニ付、別紙書付之通可申触旨御両老被仰渡候間、御仲間

御支配方其外支配有之御方ハ、相移候様ニ御申達可被成候、已上

正月六日

服部図書

右之通、服部図書殿方申来候間、別紙共御覽御廻シ、御見納之御方より

御返シ被成可被下候、已上

正月六日

藤岡勘右衛門

松浦寛之丞様

門田市郎兵衛様

荒尾長兵衛様

市浦清七郎様

安田孫七郎様

八田弥惣右衛門様

正月十二日

一 勘定初有之如例、左之銘々於會計雜烹酒出之

居相孫八郎 安井李兵衛

辻本文平 古家喜右衛門

梁川敬中 福井五兵衛

三宅仁右衛門 次田忠兵衛

十六日

一 音楽稽古初

十七日

一 参校初

同日

一 市浦善藏自今参校日并内参校日讀書之師ニ出勤、且又毎日相詰候ニ付、於

学校朝晩支度仕候筈ニ申渡ス

同日

一 諸礼自今日於講堂稽古有之

同日

一 大村半平次男平三郎初而入学、十歳、左座

同日

一 沢慶閑子慶春右同断、右座

同日

一 市浦清七郎・岡助右衛門・津田源六郎、当十三日ニ閑谷江参、何哉今日帰

ル

是十五日ニ閑谷読初依有之也

〔朱書〕「今朝御兩尊堂如例年何も奉拝畢、孝経読初、日笠喜三郎講大学」

正月十八日

一 講堂之講釈初ル、窪田道和講之

同日

一 松村八郎左衛門子弥五郎講釈聴聞ニ初而出ル

十九日

一 内講習易自今晚初

吸物酒出之、如例

同日

一 安井李兵衛・古家喜右衛門当十三日ニ閑谷江参、今日帰ル

同日

一 市浦清七郎居宅之儀ニ付、旧冬笹岡次郎七郎より安田孫七郎江左之通書付

出之

校内繕覚

一 泉八右衛門居宅自今繕申候

一 岩田十大夫居宅屋根并惣囲壁学校より繕、其外ハ自今繕申候

一 市浦清七郎右十大夫跡家江罷越、右同断ニ仕候

一 小原善助客舎ハ惣繕学校より仕申候

一 窪田道和居宅屋根并惣囲壁学校より繕、其外ハ自今繕申候

一 惣長屋不残学校より繕申候

一 市浦清七郎ニ泉八右衛門跡役被仰付候ニ付、八右衛門通ニ自分繕ニ可仕

旨、清七郎より申上候処、其節猪右衛門殿御聞被成、小身之儀ニ候間、

前之通ニ可仕旨被渡候、其後只今之居宅江罷越候処、学校勝手不足仕

候ニ付、清七郎自分ニ繕仕候処、当秋大風雨家屋根大破ニ及申ニ付、自

分繕仕候処、大分物入難義仕候、右之通私承届候通書付、掛御目申候、

已上

十二月廿八日

安田孫七郎殿

笹岡次郎七郎

右之趣ニ付、兩繕ニ有之筈ニ相定、依之服部図書手紙之旨如左

市浦清七郎居宅前々ハ屋根并惣囲之堀学校より繕、其外之儀ハ自分ニ繕

候得共、近年学校作廻不足ニ付、清七郎自分ニ繕仕候、然共去秋大風雨

ニ家屋根及大破、自分ニも難繕趣御申聞ニ付、七郎兵衛・作右衛門申談、

御兩老江申達候処、前々之通此以後迄も惣屋根惣囲之分ハ学校より繕仕、

其外之儀ハ自分繕ニ仕候様ニ御兩老被仰候間、右之趣清七郎江御伝可被

成候、以上

正月十三日

服部図書 在判

安田孫七郎殿

正月廿日

一 椀方与助御切米式俵半ニ半扶持御加増、都合合七俵ニ式人扶持被下、改名野田七兵衛申付

是三宅仁右衛門・次田忠兵衛・草野善兵衛並ニ昼夜勤番可仕旨申渡ス

同日

一人足六助半俵御加増、都合四俵被遣、椀方ニ申付
是与助代り也

同日

一 合樂有之、且善太郎様被為人、樂御聴聞被成、晩樂人中江飯台出ル

廿一日

一 野田七兵衛ニ銀杵被遣之

是此度御取立ニ付、為刀代被遣也

廿三日

一 南条八郎子七郎講釈聴聞ニ初而出

正月廿三日

一 士鉄砲近藤才兵衛子源内講釈聴聞ニ初而出ル

同日

一 伊木将監殿家頼河崎儀右衛門子平作右同断

二月朔日

一 石田六之進元服仕、入大生之列

同日

一 笹谷門三郎右同断

二日

一 内参校初

同日

一 平賀安益初而來校

是備中玉嶋之医師仙安子也、岡助右衛門親類ニ付、助右衛門市浦清七郎

江申達シ、如斯

同日

一次田忠兵衛養子長太郎義ニ付、從市浦清七郎より忠兵衛本在津高郡奉行西村六之助江差紙遣シ候得共、如左六之助より先此度ハ差紙ニ不及由、其趣如左

御手紙致拜見候、然者学校御扶持人次田忠兵衛儀津高郡尾上村之者ニ而、同村人馬帳ニ付居申由、此度丹波守様御歩行柏尾喜右衛門悻長太郎ヲ養子ニ仕候由被仰下候、丹波守様御用人衆より差紙被指越候埒ニ而御座候、并尾上村より願書差出シ、其上ニ而人馬帳江書入申埒ニ御座候、貴様より御差紙被下候ニ及不申候、依之御差紙返進仕候、何分忠兵衛方より尾上村名主江申談可然候、猶期貴面委細可得御意候、以上

二月二日

西村六之助

市浦清七郎様

丹波守様御家頼片岡清右衛門指紙之写如左

丹波守殿家来柏尾喜右衛門ニ男長太郎学校御扶持人次田忠兵衛養子ニ仕度と申ニ付、勝手次第と申渡候、右長太郎真言宗御野郡南方村長泉寺旦那ニ而宗旨只今迄此方ニ而改置申候、忠兵衛儀ハ津高郡尾上村人馬帳ニ付居申由ニ御座候、自今尾上村人馬帳江書入候様ニ被仰付可被下候、為御断如斯御座候、以上

卯二月三日

片岡清右衛門在判

西村六之助様

二月五日

一 今朝御廟江弁当遣ス

是御時祭ニ付、御留守年每如斯

同日

一 市浦清七郎居宅之義ニ付、笹岡次郎七郎書出シ并安田孫七郎返書今日來ル、両通如左

市浦清七郎居宅屋根并惣囲壁者学校より繕遣可申旨被仰渡候ニ付、積せ申候処

惣屋根百八拾五坪

内 五拾五坪柿屋根 但長屋土蔵共

右念を入繕申候得ハ、凡壹貫貳百三拾匁入可申旨積り申候、依之兼而無用之間數も多御座候間、別紙絵図之通無用之間を取崩シ、座敷分を本屋江取続申様ニ仕候得ハ、此度坪數減シ、屋根繕入用壹貫目ニ而出来可申旨積り申候

一右之座敷本屋江取続申様ニ引寄申、入用凡四百五拾匁計も入可申様ニ申候、乍然無用之所を崩シ払候へハ、凡四百貳拾匁計も可仕候哉旨申候、左候へハ、引寄申入立ハ差而無御座候、其上柿屋根之分年々損シ申候間、右古瓦を以此度ならへ瓦ニ仕度奉存候、右之通宜様ニ奉頼候、已上

二月二日

笹岡次郎七郎

安田孫七郎殿

返書

頃日御書付被下候、市浦清七郎殿宅本屋座敷之間無用之所崩シ取、座敷ヲ引寄建、右崩候分払、右之古瓦柿之所置瓦ニ可被成由、右御書付之趣御小仕置衆申達候処、御年寄中江茂御尊有之、貴様御書出シ之通ニ被成候様ニ申談候様ニ御申渡シ候、左様御心得被成、清七郎殿江茂可被仰達候、貴様御書付ハ水野作右衛門殿御取置候、絵図ハ返進仕候、此度之義ハ後々迄之義ニ而無御座、当分義故御差紙も出不申候、左様ニ御心得可被成候、已上

二月五日

安田孫七郎 在判

笹岡次郎七郎様

二月八日

一豊嶋喜左衛門去月廿八日ニ從和意谷出、今日歸ル

十三日

一來ル十八日積菜被仰付ニ付、諸生中江廻状出

來ル十八日積菜ニ而御座候、麻上下御着シ、朝七ツ半ニ御揃被成候様ニ御參校可被成候、朝飯ハ於学校用意仕候、尤服御座候御方ハ御遠慮可被成候

一積菜前ニ付、參校并内參校共二十八日切ニ而止申候、廿一日之内參校よ

り初申候、已上

二月十三日

岡 助右衛門
笹岡次郎七郎

諸生中九十八人

二月十三日

一槍師匠中江廻状

來ル十八日朝六ツ時積菜ニ而御座候、被仰合麻上下御着、御勝手次第御出可被成候、朝飯ハ於学校用意仕候、小生衆之外每竹舎江御出之方へも御伝可被下候、尤服御座候御方ハ御遠慮可被成候、已上

二月十三日

岡 助右衛門
笹岡次郎七郎

坂口勘左衛門

荒尾紋左衛門

田中惣兵衛

尾関弥三郎

上嶋浅右衛門

糟谷源左衛門

守田与助

平井安兵衛

十四日

一内參校今日迄ニ而止

同日

一奉行中参会有之、晚飯台出ル

是積菜前ニ付、如斯

二月十六日

一日笠喜三郎一昨十四日ニ從閑谷出、今日歸ル

十七日

一朝飯台十五膳出来

是諸生大勢ニ付、右之通出来候而可然ニ付、如斯

同日

一筋腕平皿蓋共五十人前塗直出来

是筋腕客前只今迄百人前有之処、不足ニ付右筋腕五十人前塗直申付也

十八日

一 仲丁 釈菜有之、池田七郎兵衛御名代被仰付、為見習池田左助出座

二月 仲丁 釈菜之儀如例

唱賛

辻本文平

開戸捲簾褰帳

笹岡次郎七郎
岡助右衛門

啓積 御名代 池田七郎兵衛

市浦清七郎

参神再拜

焚香再拜

七郎兵衛

献酒

七郎兵衛

酒注 次郎七郎
俯伏 捧盞 助右衛門

告辞

七郎兵衛

俯伏

辞神再拜

清七郎

徹酒果

次郎七郎

閉積

七郎兵衛

降帳垂簾闔戸

次郎七郎
助右衛門

礼畢

音楽雙調

開戸捧簾音取

啓積 武徳楽

献酒 胡飲酒

胙頂戴 賀殿 急

笙 見垣権少輔

同 今村宇兵衛

箏 八木左衛門

同 佐々木主馬

太鼓 高原佐七郎

笛 今村和泉

同 武田太郎左衛門

同 見垣弥助

講釈 論語首章 窪田道和

講釈畢而笹岡次郎七郎・岡助右衛門詣中室之左右、授胙諸生、堂中之諸生
從左右一人宛参、頂戴仕、直ニ食堂飯台ニ着

参校之諸生

久山清八郎 伊丹喜平次

佃 先五郎

河田七助 伊藤定之丞

瀧波与兵衛

石田六之進 河田勝之丞

野間伝吉

奥山三之進 梶浦伝吉

須加庄八郎

山田仁三郎 門田松之丞

加世七三郎

笹岡平次郎 大野三次郎

向井十蔵

杉山吉次郎 梶浦藤之助

小原忠三郎

渡辺十郎右衛門 西尾是庵

青地伝吉

岩田玄仲 西浦清之丞

石津次郎三郎

伊藤忠五郎 窪田忠助

坂野五郎吉

渡辺小八郎 岩野権之丞

安藤助九郎

馬場小三郎 今中助太郎

角南太郎吉

広内権右衛門 駒田友省

笹岡善七郎

堀内源五兵衛 佐藤九三郎

安東郷大夫

大村平三郎 土倉定六郎

丹羽春蔵

和田鉄之助 磯辺兵助

安部常五郎

湯浅半助 室 三之助

坂井松之助

斎藤助之進 久保田虎之助

杉浦佐太郎

荒木助五郎 河原九平太

安田喜之助

尾関千之丞

下濃徳之丞	波多野直之丞	先山権三郎	河崎平作
伊庭金之助	瀧 数之助	池田六之丞	已上三十六人 飯台出ル
森 門助	日置伴内	近藤七九郎	かき屋 兵左衛門 つな屋 源右衛門
船橋鉄之丞	野尻岩太郎	寺内円之丞	塩浦屋 助六郎 久見屋 文五郎
井上藤次郎	河崎定之助	長谷川又八郎	内倉屋 源五郎 ふしゝ屋 庄次郎
千鳥藤之丞	沢 慶春		高田屋 藤三郎 矢坂屋 五郎七郎
已上七十五人			備中白樂市喜三郎子 半次郎
不参之諸生 廿三人			二月十八日釈菜之記
津田源六郎	同 源之助	田坂六十郎	一六ツ前講堂着座より胙頂戴之時迄後見并胙頂戴差図共
土倉新之丞	杉山市之助	岡 千助	左 江見仁兵衛 右 市浦善蔵
神戸源太郎	松田与惣右衛門	笹谷門三郎	左 小原宗助 右 窪田友右衛門
大内藤蔵	淵本八三郎	内藤栄之助	一菊舎 左座之諸生
大久保門三郎	本郷五郎作	坂口楨之助	後見 江見仁兵衛 後見 小原宗助
鈴木虎之助	森寺兵大夫	内藤万清	一竹舎 右座之諸生
飯田幸之丞	藤岡六太郎	藤岡六次郎	後見 市浦善蔵 後見 窪田友右衛門
村田加五郎	水野半之丞		着座肝煎 梁川敬中
参拜之衆			
池田左助	池田桃太郎	池田 空	一桃舎
泉 文之丞	荒尾紋左衛門	加世藤三郎	居相孫八郎 御膳肝煎 古家喜右衛門
村上喜六郎	六甘宗仙	駒田延友	通 則武丑之助 通 古家吉之丞
香西五郎太郎	岡野本之丞	守田与助	同 草野善兵衛
武田茂助	南条七郎	梶川孫三郎	御手水道具火鉢たはこ盆手燭料紙硯請込 古家吉之丞
薄田半之丞	松村弥五郎	安東半助	御茶方 丸山正悦
堀内半平	富田甚之丞	安東徳兵衛	御料理方 助九郎
岩田忠作	安宅権兵衛	蜂谷猪助	一惣通料理人
宮部庄次郎	中村友達	尾関万之丞	福井五兵衛 三宅仁右衛門
大橋与左衛門	小原善之丞	山根又八郎	とき屋町 弥兵衛 御人足 七介 同 三介
近藤源内	則武弥七郎	佐治浅右衛門	一椀方
大森勘次郎	中村随軒	松尾三益	次田忠兵衛 野田七兵衛
			御人足 六介 御廟ノ長大夫 同 六介 御門ノ関右衛門

一 食堂内之通

食次湯共 横山清内 同 富田兵内

同 齋藤兵次郎 同 長崎才次郎

同 山口平四郎 同 渋谷文蔵

同 関 孫三郎 同 寺見菊松

汁次 高尾正之助 汁次 山本五郎七郎

同 市村八十郎 同 岡村虎之助

同 和田市太郎 同 高井五三郎

一同南縁側

食次湯共 草野善八 同 泉文之丞家来 山室忠兵衛

市浦清七郎家来 小松屋

同 千原助七 同 又市

茶屋 孫四郎 同 にし屋 与兵衛

汁次 佐藤小三郎 汁次 三好聴節

同 加藤熊太郎

一内外膳肝煎酌共

市浦善蔵 小原宗助 窪田友右衛門

山田藤蔵 水野伝五郎 江田甚三郎

梁川敬中

一 飲室

草野善兵衛

一 酒方

横山玄立 御人足 仁科道竹 五介

一 蠟燭方

次田忠兵衛 佐治浅右衛門 富田兵内

一 燭煎并徹燭共

山口平四郎 渋谷文蔵

一刀番

食堂 食堂

若林猪兵衛 渋谷千右衛門

校本 山本又兵衛 御足軽式人

一火廻り 新庄作大夫

一見台ヲ出 古屋吉之丞

一御門 御足軽式人

一校門 同 式人

一玄闕 同 式人

梶浦丈右衛門預り小頭 安田市兵衛

已上

池田七郎兵衛家来 三人

大工 弥三郎 壱人 壱人 壱人

魚屋 八百屋 日雇

一左座着座肝煎内外膳肝煎酌共 和田弥兵衛

一内外膳肝煎酌共 森本才右衛門 江 文次郎

惣人数合百九十六人 平賀安益

二月十八日

一河田勝之丞元服仕、入大生之列

十九日

一 参校并内講習共二止

是諸道具才取置、且掃除依有之也

廿日

一 合衆初り并音楽稽古所壁書如左

每日廿日合衆可令聴聞候間、何茂無懈怠様ニ御揃可有之候

二月廿一日

一 内参校初

同日

一内匠頭様御家頼神野次郎兵衛三男乙弥初而入学、十四歳、左座

廿二日

一浅野忠左衛門用事有之由二付、当十七日出、今日閑谷江歸ル

同日

一平賀安益自今日学房江来居

是附食飯料壹人半扶持也

廿三日

一小松原貞仙弟子勝山貞節講釈聴聞二初而出ル

廿四日

一竹舎ノ西目庇出来

廿七日

一大沼伝右衛門子弥太郎初而入学、十五歳、右座

廿八日

一紙屋町之医師中山道益子道寿講釈聴聞二初而出ル

二月廿八日

一門田松之丞元服仕、入大生之列

同日

一木下平二郎殿舎弟佐右衛門観学、且賦詩

過吉備前州岡山謁州学

聖廟

晩学木房祥拝稿

吉備前州地

繫船陟彼岡

殿堂極輪煥

日月照文章

每聴絃誦響

時羞醯醢香

創基

先太守 餘慶到無疆

廿九日

一賄方物置狭二付、東江間半庇仕、今日出来

二月廿九日

一次田忠兵衛養子之義二付、御郡奉行江遣差紙

学校御扶持人次田忠兵衛養子長太郎、宗門改八忠兵衛一所二学校二而相

改申候間、本在津高郡尾上村頭改御除キ、名歳帳二八其俣御付置可被下

候、已上

二月廿九日

西村六之助様

三月朔日

一右之返書来、如左

学校御扶持人次田忠兵衛養子長太郎、本在津高郡尾上村人馬帳二其俣付

置、宗門頭改八忠兵衛一所二学校二而御改可被成之旨、御紙面之通致承

知候、尤村方亦願書指出シ、願之通申付候、已上

三月朔日 西村六之助

市浦清七郎様

三月朔日

一参校止、如例

四日

一自今日諸生中其外不残昼飯出ル、如例

六日

一辻本文平見届メ判当分申付ル

是居相孫八郎煩引込罷在候二付、同人出勤仕候内可相勤旨如斯

八日

一町医武井養貞次男養益講釈聴聞二初而出ル

同日

一鎗稽古之諸生江自今日昼飯出ル

十一日

一文庫柱立并上棟

同日

一長崎才次郎自今日学房江来居

是於校厨朝夕喰捨被下之筈ニ申渡ス

同日

一和意谷御墓祭ニ付、市浦清七郎・笹岡次郎七郎・津田源六郎、附安井李兵衛・古家喜右衛門・渋谷文蔵・古家吉之丞、当七日和意谷江参、何も今日帰ル
但市浦清七郎儀作湯ノ郷湯湯治ニ参、古家喜右衛門ハ閑谷ニ逗留仕

三月十二日

一文庫上棟之祝儀有之、晚大工四人料理被下

十三日

一諸見届メ判自今日安井李兵衛仕

同日

一児嶋惣次郎子長右衛門講釈聴聞ニ初而出ル

同日

一豊次郎様御医者坂口見立弟道悦右同断

同日

一古家喜右衛門從閑谷今日帰ル

廿一日

一福山江之上使御通ニ付、御触状如左

大嶋因幡守殿・石丸数馬殿就御用備後福山江御越、来ル廿四日当町御通り被成候、自分ハ不申及、家来未々ニ至迄、右之時節御通り筋往来仕間敷候、御道筋見通シ之所ハ、一人念を入、差扣候様ニ御両老被仰候間、被得其意、右之趣御仲間支配方其外支配有之御方江戸留守へも相移候様
ニ御達可被成候、已上

三月廿一日

服部図書

三月廿四日

一校内為火用心下番廻之、且詩会止

是大嶋因幡守殿・石丸数馬殿今夜当町依御泊也

廿六日

一備中玉嶋之出家安婦寺ノ弟子坊主明鏡并平賀文治兵衛兩人観学

是平賀安益此旨岡助右衛門申談、拜見依可仕也

廿七日

一市浦清七郎從作州湯郷今日帰ル

三月廿九日

一上使兩人今夜又当町御泊リニ付、詩会止

四月朔日

一居相孫八郎快氣ニ付、自今日出勤

同日

一当秋朝鮮人来聘ニ付、於牛窓御饗応七五三・五三・三并菓子折之箔置絵彩色
於菊舎近日より出来、依之為見分御用人如左菊舎江参会仕

裏判 大橋茂右衛門

絵方奉行 河村小四郎

諸色請込 吉田市大夫

町買 大森定兵衛

四日

一今西勘助次男槌之助初而入学、十四歳、右座

五日

一七五三絵方自今日於菊舎初ル、左之人数文庫ノ東口より出入仕ル、且此度

ハ賄從学校不仕、從御郡会所弁当来ル

見届

河村小四郎 吉川甚大夫 狩野幽知

手代

荒井永喜 狩野自得 御足輕一人

箔置栄町仏師米倉屋

小人式人 源兵衛

四月六日

一原彦八子久之丞初而入学、十二歳、左座

九日

一上嶋彦次郎孫吉次郎右同断、右座

十日

一安井李兵衛見届自今日又仕

是居相孫八郎氣色差起候二付、如斯

十一日

一食堂江出置候字書品々就紛乱、壁書出来如左

此所二有之字書文字之考濟候者、早速元之所二揃置、他江変易不可有之候

宝永八年四月十一日

四月十二日

一斎藤新助末男五郎助初而入学、十一歳、左座

十七日

一野々村平太左衛門子辰之助右同断、十二歳、右座

同日

一仙石久右衛門子文右衛門右同断、十二歳、右座

十八日

一左之參校之小生八人五経・左伝・周礼素読仕二付、為励何も申合、今晚料

理出之

津田源之助 須加庄八郎

大野三次郎 向井十蔵 杉山吉次郎

河原九平太 内藤万清

師匠

市浦善蔵 小原宗助 和田弥兵衛

已上麻上下づ着、於食堂料理出ル

四月廿六日

一左之御用人菊舎御絵方為見分夕飯後より参会有之、於桃舎餅菓子烹染酒出之

池田七郎兵衛 藤岡勘右衛門 小堀彦左衛門

宮部清四郎 大橋茂右衛門 安田孫七郎

同日

一福井五兵衛養子仕度旨奉行中江願候、其通何茂僉議之上二而申付ル

是松田七兵衛家頼水子佐次兵衛忩紋之進、廿二歳

同日

一福井紋之進初而罷出、奉行中令対面、自今校内通之子共並二相勤候様二奉

行中福井五兵衛二申渡ス

四月廿九日

一中室御掃除笹岡次郎七郎出勤

是居相孫八郎依病中也

五月四日

一參校并内講習共二止、如例

同日

一左之御用人中昼過より参会、於松舎料理出之

池田七郎兵衛 藤岡勘右衛門 小堀彦左衛門

宮部清四郎 安田孫七郎 大橋茂右衛門

勝手

河村小四郎 江見仁兵衛 佐藤弥助

吉川甚大夫 清水甚兵衛 此五人於竹舎料理出

夕飯後五々三引替給仕稽古於講堂有之

一三使 土肥右近

式御膳引渡五々三台押、吸物引替、御膳三汁十五菜吸物肴三種

御通衆 古田番右衛門 龜嶋安之助

蒔田平七郎 高桑又之進

山下文左衛門 下方武助

林 安兵衛 薄田清八郎

倉 沢之助

一上々官 池田左助

御通衆 柏尾猪兵衛 奥山清九郎

松本庄八郎 前田平之丞

津田小源太 勝原半之丞

塩川段兵衛 伴 半蔵

岡野本之丞 塩川源之丞
尾関万之丞 野間三之丞

五月四日

一 菊舎薄置并絵彩色共今日迄止

是七五三之箔置御膳止、五三之杉之白木具ニ從公儀依被仰出也

五月十日

一 松山江之上使御通ニ付、御触状如左

宮崎七郎左衛門殿・安西弥十郎殿備中松山江御越、来ル十二日此表御通

り被成候、家来末々ニ至迄御通筋江往来仕間敷候、御道筋見通之所一入

念を入差扣候様ニと御両老被仰候、已上

五月十日

市浦清七郎

十四日

一 昨今講釈并参校内講習共止

今日少将様御帰城依被遊也

五月十五日

一 明十六日御上使御通ニ付、御触如前

同日

一 野間伝吉元服仕、入大生之列

十六日

一 内参校初ル

廿日

一 改元之御触有之、如左

正徳五月朔日改元、此度從公儀年号改元之儀被仰出ニ付、右之書付隼人

殿御渡被成、御近習中江可申伝旨、尤支配有之御方八組支配江相移候様

ニ被仰渡候、以上

五月廿日

藤岡勘左衛門

小堀彦左衛門

同日

一 晩合衆有之

同日

一 芸州之城主御通ニ付、御触如左

明後廿二日安芸守様藤井御休ニ而此表御通被遊候、先日之通御自分下々

共御心得尤候、御年寄中仰にて候、以上

五月廿日

市浦清七郎

五月廿一日

一 三宅仁右衛門病死

同日

一 菊舎ニ有之七五三御膳品々河村小四郎より吉田市大夫江今日引渡之

是七五三箔置彩色依相止候也

同日

一 河村小四郎見届御徒吉川甚大夫手代御足輕老人小人四人今日退出

是右同断

廿二日

一 参校并内講習共止、如例

是故少将君依御忌日也

廿五日

一 左之御筥五管損候ニ付、京都樂人辻伯耆守方江市浦清七郎より頼直シニ上

之

一 壹管 御城之卷籠

一 貳管 学校之筥

一 参管 御城黒塗ノ筥

一 肆管 閑谷筥

五月廿五日

一 主膳様御姫様并御女中觀学

廿七日

一 阿部忠左衛門子伝之助初而入学、九歳、右座

同日

一 御穩便之御触有之、如左

知恩院宮様去ル十八日御薨去被遊候ニ付、今日より廿九日迄鳴物相止可申候、普請作事ハ不苦候旨被仰出候、可被得其意候、已上

五月廿七日 市浦清七郎

廿八日

一講釈并槍稽古止

是依御穩便也

同日

一參校之小生中江廻状出

知恩院宮様御薨去被遊御穩便ニ付、明廿九日之參校止申候、明後晦日

之内參校より御出可被成候、已上

五月廿八日 岡助右衛門 笹岡次郎七郎

五月廿八日

一神小左衛門組内藤数右衛門次男内藤万清、毎日參校朝夕相詰、讀書之師仕、

致勤学候旨申渡

是数右衛門義勝手逼迫ニ付、御番頭神小左衛門より朝夕養候儀被相頼候、

於学校逼迫之衆養候義、外二例ニも成候得ハ、如何候得共、万清事ハ文

学精出シ、其上器用ニ付、此段市浦清七郎笹岡次郎七郎・岡助右衛門与

令相談、於学校朝夕飯台被下、且暮相詰、夜帰宿仕、讀書之師被雇之、

且ツ市浦清七郎手紙并小左衛門返書之趣如左

先日者得貴意申候、弥御無事珍重奉存候、然者内藤万清事物読器用ニ早

行も參候之間、学校ニ而讀書之師ニ雇可申与笹岡次郎七郎・岡助右衛門

と申談候、左様ニ御座候ハ、朝夕学校飯台之用相詰、夜ハ帰宅被致候

様ニとは又申談候、先日被仰聞候之趣ニ付、如斯御座候、尤屹と図書殿

江も不申達候、私も内所ニ而申談、雇申儀ニ御座候、其元様より内藤数

右へ被仰聞可被下候、已上

五月廿七日 市浦清七郎

神小左衛門様

返書

御手紙致拜見候、弥御無事之由珍重存候、然者内藤万清事物読器用ニ候故、学校江讀書之師御雇可被成旨、笹岡次郎七郎殿・岡助右衛門殿被仰談、

朝夕学校飯台被下相詰、夜ハ帰宅可仕旨御申談被成候由、先日御尊申ニ

付、右之趣ニ御座候由、於拙者大慶存候、数右衛門江御紙面之趣早々申

聞候、已上

五月廿七日

市浦清七郎様

五月廿八日

一内藤数右衛門口上書

同姓万清儀、願之通学校ニ被召置被下候旨、神小左衛門殿迄御通シ承知

仕、有難仕合奉存候、世悴召連御礼ニ伺候仕候、已上

五月廿八日

内藤数右衛門 同 万清

五月廿八日 一内藤万清除列座之札

是右之趣ニ付依学房同事也

同日

一御書物長久手合戦記写物成就上下志册

是長崎才次郎当十二日より今日迄ニ写之

同日

一市浦清七郎作事座敷并台所上下屋根葺直共今日迄ニ出来

六月朔日

一斎藤助之進元服仕、入大生之列

二日

一浅野定之助參校日ニハ自今食堂江相詰管ニ申談

是定之助只今迄勤来り之御用大方出来、且病氣ニ付為養生、參校并内參

校之節食堂江被相詰候様ニ何茂役人中令相談、今日より出勤

同日

一山根又八郎梅舎之内講習近思録今朝初講之、但為学類ノ未

講者

市浦善藏 小原宗助 山根又八郎
和田弥兵衛

六月二日

一 福井紋之進改名弥四郎、今日より喰捨被下、通之子共ニ申付、勤番仕

洪谷文又藏 古家吉之丞 草野善八郎

福井弥四郎

四日

一 三宅仁右衛門先日病死仕ニ付、御郡奉行江差紙如左

以手紙得御意候、然者学校御扶持人三宅仁右衛門与申者、御野郡浜村之
者ニ而御座候、宝永四年亥ノ二月柏尾猪兵衛殿江相断、宗門改此方ニ而

仕候、右之仁右衛門先月廿一日致死去候、依之仁右衛門妻子以上四人此

度浜村江返シ遣申候間、前廉出シ置候指紙御返シ可被下候、已上

卯六月四日

市浦清七郎 在判

村上藤助様

六月四日

一 村上藤助返書并差紙両通返ル

御手紙致拜見候、然者学校御扶持人三宅仁右衛門与申者、御野郡浜村之
者ニ而、宝永四年亥二月先奉行柏尾猪兵衛へ被仰達、同人妻并娘三人以

上四人学校御長屋ニ御指置、年々宗門御改置候之処、右仁右衛門先月廿

一日致死去候ニ付、妻子四人此度浜村江御戻シ被成候由、致承知候、村

方よりも書付指出シ候ニ付、御紙面之通申渡候、前廉柏尾猪兵衛・木戸

彦次郎兩人江御出置候御指紙式通致返進候、已上

六月五日

村上藤助 在判

市浦清七郎様

六月五日

一 土用ニ入、参校并講堂之講釈止、如例

六日

一 内参校初ル

是例年土用中さらへ才内参校之望諸生中より有之ニ付、任其意、且四ツ
時より小学四書之文字札出之、其取候面ニ依札数之多少、着座仕次第ニ
退出也、并諸生如左

津田源之助 須加庄八郎 田坂六十郎

笹岡平次郎 大野三次郎 向井十蔵

杉山吉次郎 小原忠三郎 西尾是庵

青地伝吉 岩田玄仲 西浦清之丞

石津次郎三郎 伊藤忠五郎 神野乙弥

窪田忠助 坂野五郎吉 渡辺小八郎

岩野権之丞 馬場小三郎 今中助太郎

角南太郎吉 広内権右衛門 岡 千助

原 久之丞 駒田友省 斎藤五郎助

笹岡善七郎 安藤郷大夫 大村平三郎

右座

荒木助五郎 内藤栄之助 河原九平太

安田喜之助 本郷五郎作 下濃徳之丞

大沼弥太郎 先山権三郎 今西槌之助

池田六之丞 近藤七九郎 寺内円之丞

仙石文右衛門 井上藤次郎 河崎定之助

長谷川又八郎 上嶋吉次郎 阿部伝之助

沢 慶春

六月九日

一 野田七兵衛御米蔵出入仕候様ニ申付ル

是三宅仁右衛門死後福井五兵衛御蔵御賄方相兼之候処、如斯

十日

一晚蜂谷猪助参

是御用之義有之ニ付、市浦清七郎・笹岡次郎七郎・岡助右衛門参会仕

於桃舎飯台出ル

六月十一日

一大野吉右衛門參

是江見仁兵衛・辻本文平五々三之儀可申談旨有之ニ付、如斯、晚飯台出

十二日

一閑谷御掃除之者昨日參、自今日勤

是学校人足不足之処、尔今就不召抱、從閑谷呼寄使候而可然旨令如斯

同日

一文庫今日迄ニ委成就

同日

一今日諸生中江瓜出、如例

十九日

一御書物虫干有之、昼茶漬并朝晩せんしちや出之

市浦善蔵

小原宗助

内藤万清

水野伝五郎

横山清内

古家喜右衛門

和田弥兵衛

森本才右衛門

長崎才次郎

江 文次郎

平加安益

斎藤兵次郎

梁川敬中

右十三人八市浦清七郎申渡ス

渋谷文蔵

古家吉之丞

草野善兵衛

草野善八

福井弥四郎

六月十九日

一東ノ井上ニ致掛出、薪部屋広ク成ル

廿日

一今日中御穩便

是松平陸奥守様御隠居嘉心様御逝去ニ付、当日一日御穩便依有之也

同日

一明日虫干有之ニ付、内參校止候、廻状出ル

学校土用干未済ニ付、内參校廿二日迄相止申候間、廿四日之内參校より

御出可被成候、已上

六月廿日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

六月廿一日

一虫干有之

同日

一文庫棚并戸前才今日成就

廿二日

一御書物改内所ニ而仕、如例

辻本文平

江田甚三郎

手伝衆

横山清内

古家喜右衛門

斎藤兵次郎

長崎才次郎

梁川敬中

次之子四人

草野善兵衛

廿三日

一御書物今朝納新文庫

六月廿三日

一講堂論語講釈初ル

是土用昨日依明候也

廿四日

一參校初ル

右同断

同日

一丹羽久左衛門子初而入学

長子八十郎、十六歳、左座

次男与一郎、十三歳、左座

同日

一広田与五郎子右同断、万次郎、十一歳、右座

同日

一校内鉄砲稽古搏初可然候処、御屋敷当年為御搏無之ニ付、從市浦清七郎馬

場氏・土倉氏江手紙遣之、如左返書来

御手紙致拜見候、如仰甚敷暑氣ニ御座候得共、弥御堅固御勤之由目出度奉存候、然者例年之通鉄砲稽古被仰付候之由、只今御機嫌茂能御座候間、可被仰付候、若御持病差出候者、自是御案内可申候、已上

六月廿四日

土倉 弥兵衛

馬場十郎右衛門

市浦清七郎様

六月廿五日

一坂井松之助元服仕、入大生之列

同日

一校内鉄砲稽古初

横山清内

古家吉之丞

野田七兵衛

福井弥四郎

右四人当年初而稽古申付ニ付、此旨従市浦清七郎・藤岡六左衛門江申談之処、辻本文平当テニ為致誓紙、文平指南仕、以後学校并閑谷之鉄砲稽古仕候者、文平為致誓紙可然旨、六左衛門申ニ付、如斯

六月廿六日

一小学生巡講先暫止之

是梁川敬中残暑就未甚敷、暫相止之申度旨奉行中江申ニ付、其通成ル

七月朔日

一山田仁三郎・富田甚之丞養子ニ參、改名富田仁三郎

同日

一大野三次郎元服仕、入大生之列

二日

一西浦清之丞坂口勘左衛門弟子ニ成、自今日坂口流槍稽古仕

三日

一淡川友古弟子河崎友順講釈聴聞ニ初而出ル

(朱書)

「七月三日

丹木市大夫事父仁蔵、故少将様御逝去已後、和意谷御墓所御用被仰付、

小頭格ニ而相勤、御切米式拾三俵式人扶持、其後三俵御加増被下、岡田久大夫跡役相勤、廿一年御奉公相勤、当正月元日病死仕候ニ付、市大夫義御切米式拾俵式人御扶持ニて被召出之旨去ル朔日日置隼人殿被仰渡、同五日名ヲも仁蔵ト相改候様池田主殿殿被仰渡」

六日

一内參校止、如例

是明日依節句也

七月八日

一今明講釈并參校止

是伯州君御卒去被遊、昨今明三日御穩便之御触依有之也

諸生中江廻状出ル

松平伯耆守様御卒去被遊、御穩便ニ付、明九日之參校止申候、十七日之參校より御出可被成候、已上

七月八日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

十一日

一従公儀被仰出御書付之趣御触如左

覚

一朝鮮信使海路經過の時、津々湊々船かゝりの場并迎送之船水夫薪水才往來の煩なきやうに沙汰有へき事

附、番船援船才其用意有へき事

一信使の船かゝり候所々米穀魚菜才事かけさるやうに支度し、凡飲食の料其味そこねたる物才用へからさる事

一信使の船かゝり候所々失火地震暴風高潮才非常之変事兼而其備を設け、時に於てしとけなき挙動有へからさる事

附、旅泊之津湊ハいふに及ハす、御領私領人民之居諸寺諸社才火の用心猶更油断有間敷事

一信使旅泊の所々、対馬守家来諸大名迎送の船才人多集る上ハ、各互に相

戒め慎しミ、下部才至迄喧嘩争論ハいふに及ず、聊も無礼之義有へからざる事

一 異国の風俗不案内によりて無礼之儀あり共、あなちち咎るにたらず、雖然捨置難き事に至てハ対馬守役人に達して、其沙汰に任すへき事

一 津湊におゐて信使の従者私に売買の事を相かたらふ共、一切に取合へからず、たとひ後日に及ひて事あらハれ候といふ共、物の多少、価の高下によらず厳科に処せらるへき事

一 信使往来の間、見物の場におゐて男女僧尼才雜り居へからず、簾幕屏風の類を以其座を隔つへし、或ハ飲食の物を取ちらし、或ハ醉任高声無行儀成躰有へからず、旅行の人と、まり見、旅泊の舟集り見る共、其道をひらき見物の場を妨へからざる事

附、色絹段子の幕金銀之屏風才を以て見物の場を飭る事禁制に及間敷事

右之條々海陸御馳走人御賄方者いふに及はず、御料私領津々浦々町屋在家寺社才各其支配く、江急度可被相触候、以上

卯四月

七月十二日

一 左之通今日被仰出

惣而家中風義不宜、酒食遊山衣類才召使男女諸事万端無用之物入有之由、左様之族於有之者急度可被仰付様も有之、思召之御尊二候

同日

一 市浦清七郎・笹岡次郎七郎・岡助右衛門於学校相談任、申渡候寛

一 安井李兵衛

一 只今迄之通校尉之見届其外御勝手勤方如前勤候様ニ申渡

一 古家喜右衛門

居相孫八郎病氣ニ付、校内諸法式見届并通之子共引廻行儀作法差図其外勤方如前相勤候様ニ申渡

一 江田甚三郎

一 辻本文平文庫御書籍講堂諸礼事多ニ付、学校留帳ニ相加り、御廟御祭御

役付相勤、且又文庫御書籍之御用手伝仕候様ニ申渡

一 森本才右衛門

一 同人預り之武具馬具帳面之通預ケ候様ニ申渡

一 同人

一 御雇ニ而槍之師精ニ入相勤、其上武道具預り旁ニ付、喰捨之外ニ式人扶持被下之候旨申渡

一 梁川敬中

一 参校衆行儀才之事精ニ入相勤宜ク候、依之前々被下来り之扶持之外ニ喰捨被下候事、前々被下来ル銀四枚式人扶持被下之旨申渡

一 江 文次郎

一 読書之師外ニ写シ物相勤候ニ付、毎年銀子六拾匁宛被下之旨申渡

一 長崎才次郎

一 右同断申渡

一 次田忠兵衛

一 平生老母孝行、忠兵衛妻も姑ニ睦敷、夫婦共寄特成ル者ニ候、其上忠兵衛御用能相勤候ニ付、旁以学校より御褒美被下候様ニ申度由、居相孫八郎前々より申ニ付、何茂相談之上御切米壹俵御加増、都合拾俵被下之旨申渡

七月十三日

一 左之人数参会ノ読史記、且校外之衆江朝飯台出ル

市浦善藏 津田源六郎 南条七郎

宮部庄次郎 武田茂助 梶川孫三郎

江 文次郎

同日

一 表門之より如昨年常式之通四ツ切ニ申渡、但四ツ過歸校仕候者ヲハ御門番関右衛門其刻限古家喜右衛門ニ申達、喜右衛門手前にて帳ニ記候様ニと市浦清七郎申渡

十六日

一 辻本文平より武具馬具今日森本才右衛門江相改渡之、見届安井李兵衛

七月十七日

一 参校初ル

十八日

一 室三之助從丹州君御召ニ付、江戸下向、依之断有之、除列座之礼

同日

一 講堂講釈初ル

同日

一 百々玄順・同仁右衛門講釈聴聞ニ初而出ル

廿日

一 梁川敬中宗門改之義ニ付、市浦清七郎より御町奉行松浦覚之丞江遣候差紙并返書如左

以手紙致啓上候、然者富田町兒玉又兵衛借屋梁川敬中并母家内式人宗旨真言宗御野郡三野村法界院旦那二而、富田町名歳帳ニ付相改申者二而御座候、敬中義学校御扶持人二而御座候間、此已後ハ学校ニ而宗門相改申度候、其段富田町ニ住居仕候間、名歳帳ニ付置、五人組頭改共ニ差除候様ニ被仰付可被下候、已上

卯七月廿日

市浦清七郎 在判

松浦覚之丞様

富田町兒玉又兵衛借屋梁川敬中并母家内式人、宗旨真言宗御野郡三野村法界院檀那二而、敬中儀学校御扶持人二而御座候、此已後者学校にて宗門御改候、其ま、富田町住居仕候間、名歳帳ニハ付置、五人組頭改共ニ差除候様ニ可申付旨御紙面之通致承知候、町方よりも申出、其通申付候、已上

卯七月廿日

松浦覚之丞

市浦清七郎様

七月廿二日

一 市浦善蔵三男三郎病死仕

廿三日

一片瀬町之医者岡本玄仙子玄意講釈聴聞ニ初而出ル

七月廿七日

一 京極壹岐守殿御医者村井一東觀字

是南条七郎達奉行中、如斯

廿八日

一 校内鉄砲稽古搏昨廿七日迄ニ而止

是辻本文平依煩候也

廿九日

一 今晩易内講習止

是近日閑谷積菜ニ付、奉行中何茂彼地江依参候也

八月朔日

一 朝鮮人近日海上通申ニ付、御触有之、如左

朝鮮人来聘帰帆共船ニ而見物仕間敷由、御年寄中被仰聞候間、此段御近習中御支配方へも可被仰聞候

八月朔日

同日

一 奥山三之進致元服、入大生之列

同日

一 津田源之助右同断

同日

一 河田勝之丞玉虫孫九郎養子ニ参、改名玉虫勝之丞

六日

一 長崎才次郎閑谷積菜見拜ニ当三日ニ参、今日歸

八日

一 岡助右衛門・津田源六郎当三日閑谷江参、今日歸

是依積菜也

八月八日

一 市浦善蔵・和田弥兵衛・平賀安益積菜見拜ニ当三日ニ参、今日歸

九日

一 森本才右衛門右同断、今日歸

是辻本文平毎年參、閑谷并和意谷御番人共鉄砲稽古搏為致候得とも、同人煩二付、於閑谷才右衛門為搏之候様に市浦清七郎申渡、逗留仕、如斯
同日

一 渋谷文蔵当三日閑谷江參、今日歸

是釈菜二付為通參、如斯

同日

一 易内講習初ル

同日

一 三宅仁右衛門後家仁王町乗物屋助大夫方江引取申二付、今日校内退出仕

十四日

一 山根又八郎再讀書之師ニ被履、自今日出勤、於学校致支度候様ニ申渡

八月十四日

一 福井五兵衛改家名秋田申度旨御断申二付、任其意、自今改秋田五兵衛

十五日

一 中秋月之詩会有之、如例

十六日

一 音楽下稽古有之、如左楽人中江晚飯台出

是明後十八日依御廟祭有之也

見垣近江守

大守対馬

高原佐七郎

佐々木主馬

武田太郎右衛門

見垣弥助

武田内記

同日

一 御筥五管今日從京都辻右近將監下ル

是御筥卷龍并黒塗沓管・学校筥式管・閑谷筥沓管以上五管、当五月廿五日

日ニ京都辻伯耆守方江直せ給候様ニと市浦清七郎より頼遣候処、伯州閑

東下向之由ニ而、右近將監より下之、今十三日到着、依之今日見垣近江

守吹見申候処、御筥式管八直り候得共、残ル三管直り不申二付、追而伯

州歸京之時分、又上シ可申旨、市浦清七郎辻本文平ニ申渡

八月十八日

一 今朝御城江楽器參二付、草野善兵衛為持參ル
是今朝御廟祭二付、於御城依音楽有之也
廿一日

一 養林寺并客僧弟子坊主共以上五人觀学

是養林寺より市浦清七郎江相達、如斯

八月廿六日

一 從町会所通鑑綱目沓部并句会沓部学校文庫ニ納ル

是自先年町会所ニ有之二付、御町奉行松浦覺之丞文庫江可納旨市浦清七

郎江申二付、辻本文平請取切手ニ清七郎奥書ニ而今日請取之

廿七日

一 校内宗門御改今日有之、并下役人書上差出シ連判仕ル

同日

一 安井弁兵衛和氣郡学校領江当廿四日ニ參、今日歸ル

是竹伐御用依有之也

同日

一 浅野忠左衛門廿四日ニ出、今日歸ル

是宗門御改二付、如斯

廿八日

一 次田忠兵衛和氣郡学校領江当廿二日ニ參、今日歸ル

是竹伐御用依有之也

九月二日

一 丹木仁蔵去廿九日從和意谷出、今日歸ル

是宗門御改二付、如斯

三日

一 日笠喜三郎去廿八日ニ出、今日歸ル

右同断

八日

一 講堂講釈止、如例

十日

一市浦清七郎有馬江今日発足

是腰痛二付為人湯、如斯

同日

一梁川敬中有馬江今日発足

是近年痔痛申処、今度清七郎湯治二付一所二入湯仕度旨二付、任其意、
如斯

十一日

一森本才右衛門食堂札割勤之

是敬中有馬留守中相勤之候様ニ申渡入、但同人不案内ニ付、辻本文平相
添可申旨、是又申渡入、且才右衛門義ハ二七之日ハ四ツ時より槍稽古場
江詰申二付、其節ハ文平相勤之、其外ハ諸札指南可仕旨申渡入

九月十一日

一左之新樂人三人今度御雇ニ而出ル

笙

杉村若狭

箏築

中山定之進

笛

高須助之丞

十五日

一三宅仁右衛門後家ニ御銀被遣之

是仁右衛門病中医者衆数人ニ相掛り申候処、死後礼物得不遣二付、御銀
百三拾目夫々江安井兵衛割符仕遣之也

十六日

一内参校止、如例

同日

一樂器明十七日御旅所江参二付、富田助六郎請取之参、如例

九月十八日

一木崎九右衛門坂口流槍稽古二付、自今日初テ竹舎江参云

十九日

一淵本八三郎元服二付、口上書ニ而左之通申来ル

口上

久々得貴意不申候、弥御堅固被成御座珍重奉存候、然者私儀前髪取申候

間、参校仕間敷候、為御断伺公仕候、槍稽古ニハ罷出可申候間、左様ニ

御心得被遊可被下候、已上

九月十九日

市浦清七郎様

淵本八三郎

廿日

一居相孫八郎遠慮之義有之、口上書如左

入江勘六郎御改易二付、主膳様ニ罷在候勘六郎弟入江清大夫遠慮仕候、
清大夫儀私智ニ而御座候、依之私儀指扣居申候、已上

九月廿日

居相孫八郎

病中二付印判

笹岡次郎七郎様

九月廿四日

一今度朝鮮人御饗応之五々三組立於菊舎仕之候故、左之役目今日参会、但朝
夕支度ハ從御郡会所弁当取寄候二付、学校より賄無之

但於牛窓御饗応不濟申内ハ他見仕間敷旨被仰渡由ニ而菊舎張紙

一此内江御用無之者一切不可入

御料理人

見届御徒

御料理人

大野吉右衛門

古沢忠右衛門

杉野源四郎

大野三次郎

秋山市大夫

丹木助七郎

御本段方折々出

岡村勘助

黒谷権七郎

狩野自得

吉右衛門手代

同 八十郎

御足輕一人

小人式人

九月廿四日

一食堂四九之内講習易经今日講シ終ル、吸物酒出之、如例

是宝永五年八月十二日河内洛書ヨリ講シ初ル

講者 市浦善藏

小原宗助

和田弥兵衛

廿六日

一今日菊花御後園江上ル

十月朔日

一菊之詩会有之、如例

十月三日

一講堂之講釈論語今日講シ終ル

講者 市浦善蔵

四日

一食堂之内講習自今晚詩經講シ初ル

四九 講者 市浦善蔵

小原宗助

山根又八郎

和田弥兵衛

十月四日

一梧舎之炬今日開之

七日

一自今虎ノ字改可申旨御触有之

是江府若君様御誕生、御名虎吉様と御付就被遊、虎ノ字遠慮仕、虎ノ字

付居申者相改之候様ニ御触有之

同日

一備中下道郡嵯峨野村之白神見俊學校江出入仕、平賀安益學房江參、讀書仕

度旨願申由、安益奉行中就相達候、任意、自今日參校仕ル

十月八日

一講堂之講釈自今日孟子講初ル

講者 窪田道和

是窪田道和・市浦善蔵・小原宗助三人更々篇切ニ講之候筈ニ相定

十日

一伊藤播磨殿御家来仙石勘左衛門子兄弟十大夫・七郎次郎兩人觀學

是平賀安益笹岡次郎七郎江相達、如斯

十一日

一市浦清七郎從有馬今日歸ル

同日

一梁川敬中右同断

同日

一諸生之内野間伝吉齋藤助之進御履、児小性ニ被召出

十三日

一土倉新之丞除列座之札

是兄百助御改易依被仰付也

十七日

一食堂并舎々江自今日火鉢出

是漸依冷申候也

廿一日

一居相孫八郎今朝病死仕ル

廿八日

一市浦清七郎左之三人江申渡

覚

一安井弁兵衛學校御勝手方諸縮見届之御用居相孫八郎病中当分相勤候様ニ

申渡処、孫八郎死去仕ニ付、自今已後茂可相勤之旨申渡又

一古家喜右衛門學校諸式御法度見届之御用孫八郎病中当分相勤候様ニ申渡

候処、孫八郎死去仕候ニ付、自今已後茂可相勤之旨申渡候、右之御用ニ

而古家喜右衛門儀手透無之ニ付

秋田弥四郎通ひノ子共手本ヲ書、手習指南讀書茂指南仕、只今迄之通

ひも相勤候様ニ弥四郎江申渡

十月廿八日

十月廿八日

一朝鮮人帰帆御馳走土肥右近手之三使御饗応五々三給仕稽古於學校仕候様ニ

日置隼人殿被仰渡、自今日初ル

是食堂ヲ以屏風三拾壹疊之御座敷ニ囲之、左八正使・副使・従事、右八

宗对馬守殿・緑長老・集長老、已上六人各錦之褥ニ付、絵筵ヲ以設之、客ヲ立之、如左給仕初、何茂長上下着之

出座 肝煎 肝煎

土肥右近 小川郷大夫 佐々市左衛門

瀧 権平 古田番右衛門 舟戸弾之進

山田弥左衛門

御給仕之次第

一御長熨斗

薄田清八郎

御饗応之間南御障子之際ニ置之、御勝手江退キ又罷出引之

土肥右近御饗応之間より見へ申所迄可罷出居申、御給仕之見繕仕、

右御のしも引候様ニと右近可申事

一御引渡

正使 亀嶋安之助

对馬守殿 奥山清九郎

副使 野間三之丞

緑長老 瀧波与兵衛

従事 安東半助

集長老 村井伝右衛門

御銘ミノ前江出シ、御勝手口迄退キ、又罷出引之

此節茂見合引候様ニ右近可申聞候

一本御膳

正使 柏尾猪兵衛

对馬守殿 江見平兵衛

副使 山下文左衛門

緑長老 林 安兵衛

従事 梶田半兵衛

集長老 小泉清右衛門

此出シ様御六人前一度ニ出候てハ御給仕指支申ニ付、兩人宛出シ、此

兩人御勝手口迄退キ候節、次之兩人罷出候様ニ可仕候

一二之御膳

亀嶋安之助 今西千之助

野間三之丞 瀧波与兵衛

出シ様右同断

一三ノ御膳

安東半助 村井伝右衛門

柏尾猪兵衛 奥山清九郎

山下文左衛門 林 安兵衛

梶田半兵衛 小泉清右衛門

一御食鉢

薄田清八郎 古田権三郎

御饗応之間御敷居ノ際迄罷出居申、御土器出ル与引之

一御土器 亀嶋安之助 江見平兵衛

野間三之丞 瀧波与兵衛

安東半助 村井伝右衛門

一御捨土器 村^(ツ) 今西千之助

山下文左衛門 林 安兵衛

梶田半兵衛 小泉清右衛門

一御吸物 亀嶋安之助 奥山清九郎

野間三之丞 瀧波与兵衛

安東半助 村井伝右衛門

初献 真野権八郎

一御銚子 古田権三郎

初献 对馬守殿 正使

御酌之次第 緑長老 副使

集長老 従事

二献 飯田伝右衛門

一御銚子 同

一御加 真野権八郎

此御銚子江戸御書付ニ此所ニ有之、御酌之次第ハ御吸物出候次ニ有之

同

此御銚子江戸御書付ニ此所ニ有之、御酌之次第ハ御吸物出候次ニ有之

	候、御銚子加へ御座敷迄罷出居申、御吸物出候迄二而御酌相勤候儀二	一台之物	柏尾猪兵衛	江見平兵衛
	而可有之哉、此段ハ对馬守殿御役人江承合候筈		山下文左衛門	林 安兵衛
一御吸物	柏尾猪兵衛	一御吸物	梶田半兵衛	小泉清右衛門
	山下文左衛門		龜嶋安之助	今西千之助
	梶田半兵衛		野間三之丞	瀧波与兵衛
	小泉清右衛門		安東半助	村井伝右衛門
前之御吸物と引替之		一御捨土器	柏尾猪兵衛	奥山清九郎
御酌之次第	緑長老		山下文左衛門	林 安兵衛
	对馬守殿		梶田半兵衛	小泉清右衛門
	集長老	一御蓋	龜嶋安之助	江見平兵衛
一御銚子	薄田清八郎		野間三之丞	瀧波与兵衛
一御加	古田権三郎		安東半助	村井伝右衛門
一御蓋台	龜嶋安之助	一三ノ御膳	柏尾猪兵衛	今西千之助
	野間三之丞		山下文左衛門	林 安兵衛
一御押	安東半助		梶田半兵衛	小泉清右衛門
	柏尾猪兵衛	一二ノ御膳	龜嶋安之助	奥山清九郎
	山下文左衛門		野間三之丞	瀧波与兵衛
	梶田半兵衛		安東半助	村井伝右衛門
一星之物	飯田伝右衛門	一本御膳	柏尾猪兵衛	江見平兵衛
	此星之物吉人二而可濟哉之趣二候、其段ハ其節承合申筈		山下文左衛門	林 安兵衛
御酌之次第	集長老		梶田半兵衛	小泉清右衛門
	对馬守殿	一御菓子	龜嶋安之助	今西千之助
	緑長老		野間三之丞	瀧波与兵衛
一御湯	真野権八郎		安東半助	村井伝右衛門
	御饗応之間御敷居際迄罷出、早速引之	一同引	安東半助	村井伝右衛門
御膳具引候次第		一御茶菓子	右同断	
一星之物	飯田伝右衛門		柏尾猪兵衛	奥山清九郎
一押	龜嶋安之助		山下文左衛門	林 安兵衛
	野間三之丞		梶田半兵衛	小泉清右衛門
	安東半助	一同引	右同断	
	村井伝右衛門			

此御茶菓子入申間敷哉、其節承合候筈

一 御茶 龜嶋安之助 江見平兵衛

野間三之丞 瀧波与兵衛

安東半助 村井伝右衛門

一同引 右同断

十月廿九日

一晚詩経内講習止

是給仕稽古依有之也

十一月朔日

一 瀧孫十郎弟数之助自今參校仕間敷断有之、除列座之札

以手紙得御意候、其以来久敷得御意不申候、弥御無事御勤珍重奉存候、

然者私義先月十四日豊次郎様江被召出候二付、此以後ハ參校難仕存候、

掛札御除被成可被下候、以来得御意申度候へ共、毎日罷出相勤候故、乍

自由以書中申達候、猶期後音之時候、恐惶謹言

十一月朔日

市浦清七郎様

瀧 数之助

十一月朔日

一 池田左助手之上々官參人御饗応五々三稽古自今晚初

是食堂ヲ屏風ニ而十八疊敷上々官之御座敷二囲之、同所十五疊敷上判事・

学士・医官五人之御座敷二囲之、給仕稽古有之、給仕之銘々不殘長上下

着之

出座

肝煎

池田左助 瀬崎六兵衛 安田市左衛門

岡田源八郎 梶川佐二兵衛 村瀬久大夫

須加小八郎

上々官給仕之次第

一 御長熨斗 松本庄八郎

一 御引渡 塩川段兵衛 伴 半蔵

松田与三右衛門

一本御膳 岡野本之丞 尾関万之丞

二ノ御膳 塩川源之丞 伴 半蔵

松田与三右衛門

一三ノ御膳 岡野本之丞 尾関万之丞

塩川源之丞

窪田友右衛門

一 御食鉢 塩川段兵衛 伴 半蔵

一 御土器 塩川源之丞

一 御捨土器 岡野本之丞 尾関万之丞

一 御吸物 塩川源之丞

一 御吸物 塩川段兵衛 伴 半蔵

松田与三右衛門

初献 松本庄八郎

一 御銚子 長谷川伝之丞

同 一 御加

二献 前田平之丞

一 御銚子 同 窪田友右衛門

同 一 御加 岡野本之丞 尾関万之丞

一 御銚子 前田平之丞

同 一 御加 窪田友右衛門

一 御吸物 岡野本之丞

一 御吸物 塩川源之丞

一 御銚子 松本庄八郎

一 御加 長谷川伝之丞

一 御湯 前田平之丞

御膳具引次第

一 吸物 塩川段兵衛 伴 半蔵

松田与三右衛門

御膳具引候次第

- 一 御吸物 辻 勘助 村上喜六郎
- 木全兵左衛門 青地小兵衛
- 齋藤太郎助
- 一 御捨土器 塩川段兵衛 岡田源大夫
- 高橋長大夫 秋田十左衛門
- 立野友之丞
- 一三ノ御膳 辻 勘助 村上喜六郎
- 木全兵左衛門 青地小兵衛
- 齋藤太郎助
- 一 御土器 塩川段兵衛 岡田源大夫
- 高橋長大夫 秋田十左衛門
- 立野友右衛門
- 一二ノ御膳 辻 勘助 村上喜六郎
- 木全兵左衛門 青地小兵衛
- 齋藤太郎助
- 一本御膳 塩川段兵衛 岡田源大夫
- 高橋長大夫 秋田十左衛門
- 立野友之丞
- 一 御菓子 辻 勘助 村上喜六郎
- 木全兵左衛門 青地小兵衛
- 齋藤太郎助
- 一 同引 右同断
- 一 御茶菓子 塩川段兵衛 岡田源大夫
- 高橋長大夫 秋田十左衛門
- 立野友之助
- 一 同引 右同断
- 一 御茶 辻 勘助 村上喜六郎
- 木全兵左衛門 青地小兵衛

齋藤太郎助

一同引 右同断

已上

十一月二日

一 山根又八郎講堂之小学講釈自今日相勤之

同日

一 梁川敬中木村休伯ヲ引請申度旨願申ニ付、任其意、且敬中口上書如左

口上

石川石之助殿御領分備中浅口郡玉嶋村ニ居申候医者木村東庵と申者悴休伯、爰元江罷出、私方へ当分旅宿仕、学文仕度旨頼申ニ付、宗門寺請状并親類諸式之請状取申候而、私方へ引請申度奉存候、右休伯宗旨天台宗玉嶋村清瀧寺宗門請状指越申答ニ御座候、不苦候ハ、手前ニ滞留仕らせ度奉存候、追而罷歸候節ハ又御案内可申上候、右之通市浦清七郎殿江可然様ニ被仰上可被下候、奉頼存候、以上

卯十一月二日

梁川敬中在判

安井杢兵衛殿

古家喜右衛門殿

十一月七日

一 江文次郎講堂之小学講釈自今日相勤之

九日

一 自四日今晚ニ至迄詩経之内講習止

是毎日五ノ三稽古依有之也

十一月十日

一 明十一日置隼人殿給仕為見分御出ニ付、内参校止申廻状出

明日牛窓御用人中学校江参会有之ニ付、明十一日之内参校止申候間、左様ニ御心得可被成候、已上

十一月十日

十一月十日

岡 助右衛門
笹岡次郎七郎

十一日

一日置隼人殿御出ニ付、左之御用人中参会有之、且烹染餅菓子出

かまぼこ

杉のしかミ、しい茸

小盒

くりの子

にしめ 山のいも

餅

あつき

くわひ

焼まんちう

かんひやう

香の物

こいちや 但吸物并酒ハ不出

日置隼人殿 土肥右近

池田七郎兵衛

池田左助

右四人於松舎出ル

藤岡勘右衛門 小堀彦左衛門

森 半右衛門

尾関弥五左衛門 安田孫七郎

右五人於竹舎出ル

右之外給仕稽古之衆中并御用ニ付出勤之面々不残餅菓子烹染出之

十一月十二日

一木村休伯自今日平賀安益学房江出入仕

十五日

一豊次郎様朝飯後被為入、於松舎五々三御膳部被成御覽

同日

一左之諸生三人今日元服仕、入大生之列

須加庄八郎

加世七三郎

笹岡平次郎

十一月十七日

一江文次郎梅舎之内講習近思録自今日講之

同日

一若殿様朝飯後被為入、於松舎五々三御膳部被成御覽、且御供中赤飯烹染酒

出ル、参校諸生并校内之面々ハ茶漬出ル

十八日

一市浦清七郎老病ニ付、御評定所出勤仕候義蒙御免度旨奉願候処、今日其通

被仰付

同日

一左之三人御取立并御加増被仰付

一江田甚三郎義讀書之師相勤、諸事実貞ニ相勤候ニ付、五俵壹人扶持御加

増被下、都合拾五俵三人扶持学校御徒格ニ被仰付

一古家喜右衛門役義実貞ニ相勤候ニ付、五俵御加増被下、都合拾五俵三人

扶持被仰付

一柳川敬中義、参校子共行儀其外師匠役相勤候ニ付、学校御徒格ニ被仰付、

御切米拾五俵三人扶持被下

十一月廿日

一左之見習新樂人三人共合樂日ニ罷出、音楽聴聞可仕旨市浦清七郎申渡

中山定之進

杉村若狭

高須助之丞

右三人ハ於梧舎飯台出

同日

一筒井久米初而参校

是兒嶋郡小串村之祠官筒井治部子也、為讀書并講釈聴聞参校仕度旨和田

弥兵衛願申ニ付、任其意、則同人学房へ出入之義も同時ニ令免許

十一月廿日

一豊嶋喜左衛門・浅野忠左衛門・日笠喜三郎来校

是三人共今度土鉄砲格ニ被仰付候之旨、市浦清七郎依申渡也

（朱書）「両谷留帳ニ如左、十一月十八日、和意谷豊嶋喜左衛門・閑谷浅野忠

左衛門・日笠喜三郎三人来正月御目見被仰付之由、今日被仰出候由、

是者与国学記異、恐此説是ナラン」

廿一日

一大野吉右衛門見届御徒古沢忠右衛門今日菊舎退出仕ル

是五々三御膳部魚類精進共三十六人前昨日迄ニ而盛形依出来也

廿二日

一自今日於菊舎習礼初ル

是春来於講堂習礼有之候処、漸向寒氣諸生手足冷依難歩達仕也

同日

一 浅野忠左衛門今日閑谷江帰ル

同日

一 江田甚三郎自今日勤番仕ル

廿三日

一 柳川敬中自今日勤番仕ル

勤番之序

安井李兵衛

辻本文平

横山清内

古家喜右衛門

江田甚三郎

柳川敬中

十一月廿四日

一 日笠喜三郎今日閑谷江帰ル

廿六日

一 豊嶋喜左衛門今日和意谷帰ル

廿七日

一 主膳様御家来伴文右衛門子市之助初而入学、九歳、右座

同日

一 人足浜村之五介宿入仕度旨暇ヲ乞申ニ付、任其意、今日帰ル

廿八日

一 右五介替りニ御野郡西野殿村五介人足ニ被召抱、切米弐俵半

同日

一 自今晚粥出、如例

是今日依入寒候也

十一月廿九日

一 中室御掃除、笹岡次郎七郎出勤并左之六人不残出勤仕

安井李兵衛

辻本文平

横山清内

古家喜右衛門

江田甚三郎

柳川敬中

十二月朔日

一 小原忠三郎元服仕、入大生之列

改名善大夫

二日

一 椀方六介校厨寝番申付ル

同日

是次田忠兵衛煩申ニ付、草野善兵衛・野田七兵衛兩人ニ而相勤候故、為加番如斯

同日

一 伊丹久八郎自今日槍為打太刀竹舎江出勤

是久八郎梶川孫三郎今度坂口流槍得免許候ニ付、八人之免之弟子衆ト一

等ニ自今竹舎江出勤有之旨ニ付、如斯、且其列如左

荒尾紋左衛門

田中惣兵衛

尾関弥三郎

上嶋浅右衛門

市浦善蔵

糟谷源左衛門

守田与助

平井安兵衛

伊丹久八郎

梶川孫三郎

十二月二日

一去秋より於桃舎詩会有之処、当十月十九日之夜迄ニ而先止

三日

一 鈴木五左衛門子万次郎講堂講釈聴聞初而出ル

同日

一 竹内辰之助今日初而參、自今晚於校厨飯台被下、校内通之子共並ニ出勤可

仕旨ヲ市浦清七郎申渡ヌ

是辰之助義今枝忠左衛門役介人ニ而有之、且又安井李兵衛ニ由緒有之ニ

付、李兵衛右之旨御奉行中江左之通願候之処、任其意、如斯

口上

私不通者竹内辰之助今年十二歳罷成申候、次之參校江罷出御用之節ハ

通子同前ニ被召使被下候様ニ仕度奉願候、已上

十二月廿九日

安井李兵衛

古家喜右衛門殿

十二月三日

一通書之講習自今日於桃舎左之人数更ニ講初之、笹岡次郎七郎出座

市浦善蔵

小原宗助

山根又八郎

和田弥兵衛
右八三八屋

十二月三日

一夜会読書初ル、三八之夕

是校内之諸生之為メ和田弥兵衛初申度旨何茂奉行中江相達、可然ニ付、
如斯

六日

一御野郡西長瀬村之与介人足ニ被召抱、切米式俵半

同日

一閑谷御掃除之者今日閑谷江歸ル

是学校人足去暮相応之者無之故、只今迄一人不足有之ニ付、自当春閑谷
御掃除之者廿日替りニ一人宛呼よせ、校厨ニ而使申候処、人足与介召抱
候故、如斯

十二月六日

一人足三介切米壹俵御加増、都合三俵被遣、自今水汲ニ申付ル

是只今迄食たき役勤候処、水汲役勤申度旨願申ニ付、如斯、但今食たき
申義八人足四人打込ニ而更々相勤申度旨申ニ付、是又其通ニ申付ル

同日

一江田甚三郎義自今売上切手奥書并請判可仕之旨申渡

是只今迄辻本文平為手伝御書物出シ入仕候処、甚三郎義今度御取立被成、
文平同格ニ付、右兩人可相勤之旨申渡ス

同日

一本多山城守様御卒去ニ付御触状如左

本多山城守様御卒去ニ付、今日より三日之内謡鳴物才御停止御穩便ニ而
御座候、其通御心得可有候、已上

十二月六日

市浦清七郎

十二月八日

一昨今參校并講釈内講習止

是依右御穩便也

同日

一諸生中江廻状出ル

本多山城守様御卒去被成、御穩便今日迄ニ御座候間、明九日より御參校
可被成候、已上

十二月八日

岡 助右衛門
笹岡次郎七郎

九日

一參校初ル

同日

一諸生中江廻状出ル

是例年中旬頃ニ出之候得共、当暮ハ朝鮮人帰帆ニ付、諸生中之内或ハ
御用、或ハ見物として多ク牛窓江被參、中旬頃ニハ何茂就可為留守、
今日出候而可然由ニ付、如斯

各様来年も御參校可被成と思召候御方ハ、御名之下ニ御書付可被下候、
若来年ハ御休可被成と思召候御方ハ、是又同前ニ御書付可被下候

一来年御參校可被成と思召候御方ハ、正月五日読初ニ而御座候、四ツニ初
り申候間、其前ニ御參校可被成候、尤毎之通孝経御持參可被成候

一忌服御座候御方ハ読初ニハ御遠慮可被成候、槍御遣初ニハ御勝手次第不
苦候、已上

十二月九日

岡 助右衛門
笹岡次郎七郎

右ハ諸生中九拾三人

十二月九日

一左之諸生十三人来年廿歳、手紙遣如例

久山清八郎 伊丹加平次 津田源六郎

佃 先五郎 河田七助 伊藤定之丞

瀧波与兵衛 和田鉄之助 土倉定六郎

丹羽春蔵 湯浅半助 磯辺兵助

神戸源太郎

来年廿歳ニ御成被成候間、御法之通列座之札ヲ除申候、講釈御聴聞ニハ御勝手次第御参校可被成候、已上

十二月九日

同日

一野間伝吉・斎藤助之進御雇児小性ニ被召出、依之遣状如左

貴様御儀先頃より御城詰被仰付候ニ付、自今御参校被成間敷哉、左候ハ、列座之札ヲ除可申候、御報ニ可被仰聞候、已上

十二月九日

十二月九日

一槍師匠中江廻状如左

来年正月五日学校例年之通説初二而、槍遣初是又例之通御座候間、朝四
以前ニ被仰合、御参校可被成候、小生衆之外毎御稽古ニ御出被成候御方
へも御伝可被下候、已上

十二月九日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

坂口勘左衛門 荒尾紋左衛門

田中惣兵衛

尾関弥三郎 上嶋浅右衛門

糟谷源左衛門

守田与助

平井安兵衛

伊丹久八郎

梶川孫三郎

右十人、但市浦善蔵ハ廻状ニ除

十二月九日

一梶浦伝吉元服仕、大生之列ニ入

同日

一同藤之助安東平左衛門養子ニ付、改名安東藤之助御断有之

同日

一秋田弥四郎御切米六俵被下之旨申渡又

是次田忠兵衛・草野善兵衛・野田七兵衛同格ニ申付、校尉勤番并時之太鼓打候義申渡又

十日

一朝鮮人帰帆近日ニ付、牛窓到着之節為見物彼地へ参候義、御停止之旨御触有之

十三日

一和田弥兵衛義自今講堂孟子之講釈可講之旨申渡又

是只今迄市浦善蔵・小原宗助兩人窪田道和ニ相加り、右三人更ニ相勤候
処、自今者弥兵衛も相加り、四人更ニ可相勤之旨申渡

十二月十三日

一講堂講釈今日迄ニ而止、如例

同日

一竹舎槍稽古之諸生江昼ほた餅出ル

是稽古今日迄ニ付、如斯

同日

一合衆今日有之并音楽稽古今日迄ニ而止、且ツ衆人中稽古出勤日数如左

是毎歳銀拾枚一ヶ月十五日出勤仕候処、安井全兵衛日数相改、市浦清七郎
郎奥書ニ而御勘定所江差出之

音楽稽古出勤日数

一七拾七日

見垣権少輔

一七拾九日

大守対馬

一六拾三日

八木左衛門

一貳百拾六日

武田太郎右衛門

一一百三拾六日

今村和泉

一貳百四拾八日

高原宇兵衛

一一百三拾九日

佐々木主馬

一五拾六日

見垣弥助

一一百三拾三日

今村河内

右之日数相改申候、以上

正徳元年十二月十三日
右之通相違無御座候、以上

安井全兵衛

市浦清七郎

十二月十三日

一草野善兵衛御切米壹俵御加増、都合拾俵被下之旨申渡ス

十二月十四日

一參校今日迄ニ而止、如例

諸生中江昼ほた餅出ル

同日

一笹岡次郎七郎於講堂諸生中江申談候条、如左

只今迄御穩便之御触有之節ハ、參校も相止申候段、廻状ニ而申進候得共、

急ニ御座候節者各廻状之御取あつかいも察存候まゝ、自今ハ廻状ヲハ出

不申候、且御触一等之義ニ而御座候間、御聞合候て參校可然旨申渡ス

同日

一詩経之内講習今晚迄ニ而止、如例

吸物酒出ル

同日

一当年未師匠振舞無之ニ付、来ル十八日之晚有之可然旨奉行中相議、依之如

左切紙出ル

来ル十八日之晚御隙ニ御座候ハ、学校江御出奉待候、例之通飯台申付

候、已上

十二月十四日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

坂口勘左衛門

同 榎之助

荒尾紋左衛門

田中惣兵衛

尾関弥三郎

上嶋浅右衛門

糟谷源左衛門

守田与助

平井安兵衛

伊丹久八郎

梶川孫三郎

右之外へハ笹岡次郎七郎口上ニ而申談

十二月十四日

一当年參校之諸生凡百一十一人

内

初而入学十六人

正月五日

与一 郎子

伊藤忠五郎

十四

同 十七日

半平次男

大村平三郎

十

正月十七日

慶閑子

沢 慶春

八

二月廿一日

内匠頭様御家来次郎兵衛三男

神野乙弥

十四

同 廿七日

伝右衛門子

大沼弥太郎

十五

同 廿七日

勘助次男

今西槌之助

十四

同 六日

彦八郎子

原 久之丞

十二

同 九日

彦次郎孫

上嶋吉次郎

十一

同 十二日

新助四男

斎藤五郎助

十一

同 十七日

平太左衛門子

野々村辰之助

十二

同日

久右衛門子

仙石文右衛門

十二

同日

忠左衛門子

阿部伝之助

九

五月廿七日

久左衛門長子

丹羽八十郎

十六

六月廿四日

同次男

同 与一郎

十三

同日

与五郎子

広田万次郎

十一

同日

主膳様御家来文右衛門子

伴 市之助

十一

十一月廿七日

辞校之諸生六人、但百一十一人之内

室 三之助

三

野間伝吉

学房ノ列ニ入

斎藤助之進

三

瀧 数之助

内藤万清

土倉新之丞

三

一当年參校日数凡百八十四日

内

參校 百六十一日

左座 杉山吉次郎

同 百五十九日

同

石津次郎三郎

同

同 百五十八日

右座

下濃徳之丞

同

同 百五十五日

左

窪田忠助

同

同 百五十三日

同

今中助太郎

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

参校	二十八日	右	安東藤之助	一当年師匠并通之子共被遣候物如左
同	二十七日	同	渡辺十郎右衛門	一銀三枚 読書之師 和田弥兵衛
同	十八日	同	坂口楨之助	一同八拾六匁 諸生芸割 柳川敬中
同	十六日	同	河崎定之助	是每歳銀四枚被下候処、当十一月被召出、切米三成り候故、如斯
同	十四日	同	尾関千之丞	一壹歩弐切 洪谷文蔵
同	九日	同	阿部伝之助	一同 三切 古家吉之丞
同	八日	同	森 門助	一同 壹切 安井甚之助
同	同日	同	加世七三郎	是弐切宛被下候処、当秋より退校仕候故、如斯
同	同日	同	伴 市之助	一同 三切 草野善八郎
同	同日	同	坂井松之助	一同 三切 秋田弥四郎
同	同日	同	富田仁三郎	右五人通之子
同	同日	同	水野半之丞	一銀三枚 習字之師 斎藤兵次郎
同	同日	同	室 三之助	一同六拾目 読書之師 江 文次郎
同	同日	同	梶浦伝吉	一同六拾目 同 長崎才次郎
同	同日	同	門田松之丞	一同拾五匁 同 仁科道竹
同	同日	同	瀧 数之助	春計相勤二付、如斯
同	同日	同	笹谷弥一郎	一壹歩四切 江見仁兵衛
同	同日	同	森寺兵大夫	是每歳絹遣候処、為賄代如斯
当年中不参之諸生				一錢壹貫文 御門番 関右衛門
野間伝吉			村上定右衛門	是昼夜美貞二相勤二付、為御褒美如斯
奥山三之進			斎藤助之進	一壹歩壹切 次田忠兵衛
淵本八三郎			大久保門三郎	是病中淡河友古薬服用二付、為薬代如斯
飯田幸之丞			鈴木庄次郎	一錢四百五拾六文 次田忠兵衛
			藤岡六太郎	是病中西村一閑針ヲ立候二付、一閑二遣之也
十二月十四日			同 六次郎	十二月十六日
一当年次之小子十五人				一煤掃有之如例、御足輕四人出ル
内				十七日
辞校式人			李右衛門子 佐藤小三郎	一浅野忠左衛門当十二日出、今日歸ル
			三折子 三好幸節	十八日

一師匠振舞有之、献立

しくろ ひはる

大こん ミそ かけな

膾 くりせうか 汁 牛房

せり しい茸

けんきんかん めうと

脇付 香物 干瓜 めし

大こん

寄豆腐

引而 烹物 くつあん

くるみ

くろ胡麻

肴重引 ミそ あら

酢牛房 吸物 ゆ

酒 三献 くわし ミつかん

せんし茶

人数

不参 坂口勘左衛門 同 榎之助

荒尾紋左衛門

不参 田中惣兵衛 尾関弥三郎

上嶋浅右衛門

不参 市浦善藏 糟谷源左衛門

守田与助

平井安兵衛 伊丹久八郎

梶川孫三郎

江見仁兵衛 小原宗助

須加庄八郎 浅野定之助

山根又八郎 内藤万清

今井伝三郎

明田佐次右衛門

和田弥兵衛

森本才右衛門 斎藤兵次郎 江 文次郎

長崎才次郎 平賀安益 仁科道竹

右廿五人

市浦清七郎 窪田道和 笹岡次郎七郎

岡 助右衛門 津田源六郎

勝手

安井奎兵衛 辻本文平 横山清内

古家喜右衛門 江田甚三郎 柳川敬中

次之小子 次之小子 同

浅野半藏 寺見兼次郎 岡村猪介

同 高尾正之助 山本五郎七 和田市太郎

同 渋谷文藏 古家吉之丞 竹内辰之助

病中 秋田五兵衛 次田忠兵衛 草野善兵衛

野田七兵衛 秋田弥四郎 草野善八郎

御門ノ関右衛門 町料理人 利兵衛

人足五人 八百屋老人

已上五十八人

十二月廿二日

一土倉市正殿昨廿二日死去二付、今日二日内所ニ而穩便ニ可仕旨、浅野瀬兵

衛より申来ル由ニ付、市浦清七郎申渡、此旨校中江当番横山清内相触ル

同日

一安井甚之助退校仕ニ付、李兵衛書出如左、并差紙之趣

口上

私養子甚之助儀不相叶勝手候ニ付、実父津宇郡中田村文助方へ戻シ申度

奉存候、此段宜敷様ニ清七郎殿江被仰達可被下候、已上

正徳元年卯十二月十三日 安井奎兵衛

古家喜右衛門殿

同

同

以手紙致啓上候、然者学校役人安井李兵衛養子同甚之助、実父ハ津宇郡中田村文助与申候、甚之助儀李兵衛勝手ニ相叶不申候ニ付、此度辰申度旨願申二付、埒明申様ニ被仰付可被下候、右甚之助宗門禪宗ニ而当地東林寺檀那、只今迄者私手前ニ而相改申候、已上

十二月十三日

市浦清七郎在判

西村六之助様

御手紙致拜見候、然ハ学校御役人安井李兵衛養子同名甚之助、実父都宇郡中田村文助ニ而、此度文助方江戻シ申候由、右甚之助宗門禪宗東林寺且那ニ而、只今迄宗門御手前ニ御改置被成候由、御紙面之趣致承知候、在方よりも願書差出シ、人馬帳江書人候様ニ申渡候、已上

十二月廿二日

西村六之助在判

市浦清七郎様

十二月廿五日

一中室煤掃有之、如例、笹岡次郎七郎出勤

廿六日

一同所鏡餅春之、如例

同日

一講堂畳表替有之、都合百四畳今日迄ニ而出来

十二月晦日

一今晚校厨御料理如例、酒出ル

正徳二壬辰年

元旦

一中室御鏡餅卯之刻辻本文平開

中室之扉、奉之

手伝当番

梁川敬中

是文平可奉之旨市浦清七郎・笹岡次郎七郎申渡、如斯

同日未之刻辻本文平徹之

手伝

右同人

一三ヶ日校厨御料理自昨年如先規成ル、今年も同前也

正月二日

一豊嶋喜左衛門・日笠喜三郎・浅野忠左衛門、從和意谷并閑谷出ル是去冬士鉄砲格ニ被仰付、明三日登城仕、依御礼申上也

(朱書)「両谷留帳ニ、正月三日三人初而御礼申上ル、御三老・御小仕置江も次郎七郎召連参ル」

五日

一読初之儀如例

開戸捲簾褰帳

焚香

堂中再拜

唱贊

下座

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

奥

笹岡次郎七郎

岡 助右衛門

市浦清七郎

俯伏

辻本文平

津田源六郎

和田弥兵衛

窪田道和

笹岡次郎七郎

岡 助右衛門

窪田道和

市浦清七郎

俯伏

辻本文平

津田源六郎

和田弥兵衛

窪田道和

笹岡次郎七郎

岡 助右衛門

窪田道和

市浦清七郎

俯伏

辻本文平

津田源六郎

和田弥兵衛

窪田道和

笹岡次郎七郎

岡 助右衛門

窪田道和

不参

松村弥五郎 山根又八郎

水野伝五郎 横山清内

江田甚三郎 梁川敬中

斎藤兵次郎 仁科道竹

左之六人読初之節諸生之間江出読

不参

内藤万清 渋谷文蔵

古家吉之丞 草野善兵衛

秋田弥四郎 草野善八郎

一見台ヲ出ヌ 古家吉之丞

一四ツ前諸生群座

菊舎左座

後見

江見仁兵衛 小原宗助

山根又八郎 和田弥兵衛

江 文次郎 斎藤兵次郎

仁科道竹

竹舎右座

後見

市浦善蔵 窪田友右衛門

不参

松村弥五郎 江田甚三郎

柳川敬中 長崎才次郎

森本才右衛門

一着座肝煎

左座 和田弥兵衛
右座 柳川敬中

一飲室

秋田弥四郎
草野善八郎

一火廻

一校門番人

一玄関

已上

五日

一参校諸生 左座之上 窪田道和

左大生

奥山三之進 津田源之助

玉虫勝之丞 門田松之丞

大野三次郎 小原善大夫

田坂六十郎 向井十蔵

安東藤之助 渡辺十郎右衛門

西浦清之丞 岩田玄仲

伊藤忠五郎 窪田忠助

渡辺小八郎 丹羽与一郎

安藤助九郎 馬場小三郎

角南太郎吉 広内権右衛門

岡 千助 原 久之丞

斎藤五郎助 笹岡善七郎

佐藤九三郎 安藤郷大夫

伴 市之助

大内藤蔵 安部常五郎

久保田門右衛門 荒木助五郎

尾関千之丞 河原九平太

本郷五郎作 大沼弥太郎

下濃徳之丞 波多野直之丞

秋田五兵衛 人足壱人

御足軽壱人

同 壱人

須加庄八郎

笹岡平次郎

富田仁三郎

杉山吉次郎

青地伝吉

石津次郎三郎

坂野五郎吉

岩野権之丞

今中助太郎

杉山市之助

駒田友省

堀内弥五兵衛

大村平三郎

淵本八三郎

杉浦佐太郎

安田喜之助

坂口楨之助

伊庭金之助

小生

右大生

小生

小生

小生

小生

小生

小生

五日
 一槍遣初如例、坂口勘左衛門出勤、諸生如左
 池田六之丞 藤岡六太郎 日置伴内
 近藤七九郎 船橋鉄之丞 野尻岩太郎
 寺内内之丞 野々村辰之助 仙石文右衛門
 井上藤次郎 長谷川又八 上嶋吉次郎
 広田万次郎 藤岡六次郎 村田加五郎
 千馬藤之丞 阿部伝之助 沢 慶春
 已上七十三人

五日
 尾関弥三郎 梶川孫三郎 糟谷源左衛門
 垣見友之助 伊丹久八郎 木崎九右衛門
 野間三之丞 伊丹嘉平次 佃 先五郎
 生駒弥五右衛門 瀧波与兵衛 杉山市右衛門
 守田与助 平井安兵衛 津田源之助
 小堀彦市 杉山吉次郎 大野三次郎
 門田松之丞 田坂六十郎 笹岡平次郎
 須加庄八郎 淵本八三郎 土倉定六郎
 久保田門右衛門 桜井八十郎 大内藤蔵
 丸山九右衛門 小崎忠内 杉浦佐太郎
 西浦清之丞 山田藤蔵 市浦善蔵
 横山清内 和田弥兵衛 坂口槇之助
 森本才右衛門

右何も相濟
 岡 助右衛門 津田源六郎
 已上三十九人
 五日
 一参拝衆
 加世藤三郎 駒田延友 中村友達
 安東半助 八木左衛門 筒井久米

五日
 浅野忠左衛門 日笠喜三郎
 一次之小子九人
 浅野半蔵 則武丑之助 寺見菊次郎
 高尾正之助 和田市太郎 山本五郎七郎
 岡村猪助 加藤熊太郎 高井五三郎
 正月五日
 一当春参校之諸生八十九人

内
 今日不参十六人如左
 村上定右衛門 梶浦伝吉 加世七三郎
 神野乙弥 松田与三右衛門 笹谷門三郎
 坂井伝次郎 内藤栄之助 大久保門三郎
 森寺兵大夫 先山権三郎 飯田幸之丞
 森 門助 河崎定之助 水野半之丞
 伴 市之助
 五日
 一左之十三人当年廿歳二付、御法之通除列座
 久山清八郎 伊丹嘉平次 津田源六郎
 佃 先五郎 河田七助 伊藤定之丞
 瀧波与兵衛 西村鉄之助 土倉定六郎
 丹羽春蔵 湯浅半助 磯辺兵助
 神戸源太郎

正月五日
 一左之三人当年参校仕間敷断有之、除列座
 鈴木庄次郎 今西槌之助 丹羽八十郎
 同日
 一次之小子関孫三郎自今参校仕間敷断有之、除札
 同日

一主膳様御家来河崎源左衛門子又吉初而入学、十一歳、右座

同日

一浅野定之助只今迄御奉公書之御帳方江出勤仕候処、自今年不出

是依江戸御供被仰付也

七日

一浅野忠左衛門・日笠喜三郎今日閑谷江歸ル

十日

一おかう様御死去ニ付、自今日十二日迄三日之内穩便、但普請作事ハ不苦旨

内所ニ而之御触之由、市浦清七郎申渡ス

是依信州君之御姫土倉市正殿御内室也

正月十二日

一勘定初如例、雜烹酒出之

十四日

一豊嶋喜左衛門今日和意谷江歸ル

十六日

一音楽稽古初、如例

十七日

一参校初、如例

同日

一山田藤四郎三男三四郎初而入学、十一歳、左座

同日

一鴻池喜右衛門并悻善右衛門觀学、楠原惣九郎・村川権六郎同道仕

同日

一來四日積菜被仰出、依之御名代池田左助当番ニ付、此旨市浦清七郎左助江

申談候処、如左返書来

乍御報致拜見候、然者来四日学校積菜御名代之儀、未拙者へ被仰付無御

座候得共、昨日被仰聞候ニ付、若相勉候儀も可有之哉と前廉潔齋才之儀

も承合置度御尋申候、左様御心得可被下候、被入御念被仰聞忝存候、以

上

正月十七日 池田左助

市浦清七郎様

正月十七日

一積菜御名代之儀ニ付、左之通市浦清七郎方松原藤助江申遣ス

学校積菜来月四日上丁ニ而、池田左助殿御名代御出勤当番ニ付、各様迄

相窺候由申達候、左様被思召可被下候、已上

正月十七日 市浦清七郎

松原藤助様

十八日

一松原藤助方返書如左

夜前者預御切紙候、学校積菜御名代之儀左助殿方之御紙面佐内殿江申談、

御年寄中江茂御物語申候処、今日左助殿江可被仰談由ニ御座候、左様御

心得可被成候、以上

正月十八日 松原藤助

市浦清七郎様

正月十八日

一講堂孟子之講釈初ル

同日

一槍稽古初ル

同日

一木村休伯并白神見俊自今日来居、但桃舎之東与次郎・八十郎同居

是兩人共校内江来居仕、文学為仕度旨笹岡次郎七郎より市浦清七郎江申

達候之処、其通ニ成ル、但旧冬迄ハ見俊儀ハ柴町丁子屋九郎大夫所ニ罷

在、休伯儀ハ柳川敬中所ニ罷在、兩人共右之町宅より毎日致参校、諸講

習聴聞并讀書仕候得共、此分ニ而ハ文学之為不耳、且勝手共不作廻ニ付、

兩人共附食に願、忝人前為飯料式人扶持校厨江入レ、晝夜共文学為仕度

旨次郎七郎より清七郎江申達、如斯、可然ニ付、相定

正月十九日

一樂人装束之儀ニ付、御呉服奉行江市浦清七郎より左之通申遣ス

御慶申納候、然者来四日積菜被仰出二付、例之通音楽御座候、依之樂人
裝束拾壹人前・烏帽子掛緒布衣腰帶指貫共御借被成可被下候、尤樂人共
方々請取着仕相勤可申旨申候得共、大事之御裝束二而御座候へハ、学校
江請取、積菜之朝於学校為致着相勤候様ニ仕度故、如斯御座候、此方御
規式相濟候ハ、早々返進可仕候、已上

正月十九日

市浦清七郎

小嶋龜右衛門様

今中源助様

是去春迄ハ学校文庫ニ有之処、去夏御呉服方へ戻し候故、如斯

返書

御手紙忝拜見仕候、如仰御慶目出度奉存候、然者来月四日積菜被仰付候
二付、御樂人衆裝束之儀被仰下、得其意御尤之御儀ニ奉存候、毎日昼過
迄ハ御藏ニ罷有申、いつニ而茂御勝手次第御人可被下候、御使へ相渡可
申候、已上

正月十九日

小嶋龜右衛門

今中源助

市浦清七郎様

正月十九日

一仁科道竹自今日読書方へ出勤

廿日

一合樂初ル

廿二日

一梅舎近思録之内講習自今朝初ル

同日

一明廿三日より廿四日迄参校止

是播磨宰相君百年之御廻忌於国清寺御法事有之ニ付、講釈参校并内講習
共止、御家中廿三日より廿五日迄相話候ニ付、廿四日之参校止候旨諸生
中へ於講堂市浦清七郎申談ス

廿八日

一今日積菜之廻状出ス

来四日積菜ニ而御座候、麻上下御着シ、朝七ツ半ニ御揃被成候様ニ御参
校可被成候、朝飯ハ於学厨用意仕候、尤服御座候御方ハ御遠慮可被成候
一積菜前又ハ奉公人出替ニ付、二日ハ六日迄内参校止申候、七日之内参校
より御出可被成候、本参校ハ十七日より初申候、已上

正月廿八日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

諸生中九十式人之内八十七人江

正月廿八日

一槍師匠中江廻状、如例

来四日朝六ツ時積菜ニ而御座候、被仰合麻上下御着シ、御勝手次第御出
可被成候、朝飯ハ於学厨用意仕候、小生之外毎竹舎江御出ノ方へも御伝
可被下候、尤服御座候御方ハ御遠慮可被成候、已上

正月廿八日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

坂口勘左衛門

荒尾紋左衛門

尾関弥三郎

上嶋浅右衛門

守田与助

平井安兵衛

梶川孫三郎

伊丹久八郎

正月廿八日

一土方本之丞講釈聴聞ニ出ル

是再参校也、内匠頭様御家来土方又之丞弟也

同日

一上之町之医師岡本道意子道順講釈聴聞ニ初而出ル

同日

一斎藤五郎助改名芦屋五郎助

是依為芦屋与右衛門養子也

同日

一大沼弥太郎元服仕、入大生之列

弥太郎口上

私儀頃日前髪取申候、就夫参校之儀如何可仕候哉、伺申上度参上仕候、已上

正月廿九日

大沼弥太郎

市清七郎様

返書

今朝者御口上書致拜見候、然者貴様御儀御元服被成候旨、弥重存候、就夫御参校之義御尋被成候、御法之通大生之列ニ入申候、三八ニ御参校可被成候、尤読書御望ニ候ハ、小生日之外御勝手次第御出何レへ成り共御相对次第師匠取被成、読書可被成候、已上

正月廿九日

市浦清七郎

大沼弥太郎様

正月廿九日

一詩経内講習初ル、吸物酒出ル、如例

是毎歳十九日より初り候処、彼是差合相延也

二月朔日

一小原善大夫自今日附食ニ而兄宗助学房江日々ニ来居

同日

一予州出海村之出家当明寺観学

是坂口勘左衛門方へ之客僧森本才右衛門奉行所江相達、如斯

二日

一池田左助参校

是积菜依為御名代之見分也

四日

一上丁积菜如例

二月上丁四日积菜之儀

唱賛

辻本文平

開戸捲簾褰帳

篠岡次郎七郎

岡 助右衛門

啓積 御名代 池田左助

ヤキマンシウ

アリヘイトウ

献果 三方 カヤ

市浦清七郎

キリノシ

長ノシ

コウハン

三方 キリノシ

篠岡次郎七郎

長ノシ

参神再拜

焚香再拜

左助

献酒

左助俯伏

酒注 助右衛門 捧盞 次郎七郎

告辞

左助俯伏

備前国主左少将源綱政朝臣使臣池田信尚謹修积菜之礼敢告

辞神再拜

次郎七郎

助右衛門

津田源六郎

閉積 左助

降帳垂簾闔戸

助右衛門

源六郎

礼畢

音楽雙調

開戸

音取

捲簾

啓積

武徳榮

但御果子ヲ献シ返ル時マテ

献酒

酒胡子

但御名代御告辞ニ御詣ノ時マテ

平調音取

閉櫃 還城樂

但唐戸ヲ闔ル時マテ

胙頂戴 賀殿 急

笙 見垣権少輔

同 大守対馬

篳篥 八木左衛門

同 佐々木主馬

笛 見垣弥助

同 武田内記

前日マテ笛吹無之故雇之

太鼓 高原宇兵衛

鉦鼓 雇 中山定之進

講釈 大学 窪田道和

講釈終テ笹岡次郎七郎・岡助右衛門侍中室之左右、授胙諸生、堂中之諸生從左右一人宛詣中室、頂戴之、直ニ食堂飯台ニ着

二月四日

一 參校之諸生

奥山三之進	津田源之助	須加庄八郎
門田松之丞	笹岡平次郎	大野三次郎
小原善大夫	富田仁三郎	田坂六十郎
向井十蔵	杉山吉次郎	青地伝吉
西浦清之丞	石津次郎三郎	伊藤忠五郎
窪田忠助	坂野五郎吉	渡辺小八郎
岩野権之丞	安藤助九郎	馬場小三郎
今中助太郎	角南太郎吉	杉山市之助
岡 千助	原 久之丞	駒田友省
芦屋五郎助	笹岡善七郎	堀内源五兵衛

佐藤九三郎 大村平三郎 山田三四郎

伴 市之助

安部常五郎 坂井伝八郎 淵本八三郎

久保田郷右衛門 大沼弥太郎 荒木助五郎

内藤栄之助 杉浦佐太郎 尾関千之丞

河原九平太 安田喜之助 下濃徳之丞

先山権三郎 伊庭金之助 池田六之丞

飯田幸之丞 森 門助 近藤七九郎

野尻岩太郎 寺内円之丞 仙石文右衛門

永田善次郎 井上藤次郎 長谷川又八郎

上嶋吉次郎 広田万次郎 千馬藤之丞

河崎又吉 已上六十二人

不參校之諸生廿九人

村上定右衛門 玉虫勝之丞 梶浦伝吉

加世七三郎 安東藤之助 渡辺十郎右衛門

西尾是庵 岩田玄仲 神野乙弥

丹羽与一郎 広内権右衛門 松田与三右衛門

大内藤蔵 笹谷弥一郎 大久保門三郎

森寺兵大夫 本郷五郎作 坂口楨之助

波多野直之丞 藤岡六太郎 日置伴内

船橋鉄之丞 野々村辰之助 河崎定之助

藤岡六次郎 村田加五郎 水野半之丞

安部伝之助 沢 慶春

二月四日

一 參拜衆

池田 木工	加世藤三郎	富田甚之丞
山田藤四郎	安東半助	村上喜六郎
瀧波与兵衛	持田庄次郎	桜井夫右衛門
石田十左衛門	宮部庄次郎	西田孫左衛門

上嶋浅右衛門

駒田延友

中村友達

土方本之丞

桜井八十郎

八田彦四郎

同 庄吉

薄田半之丞

安宅権兵衛

湯浅半助

西村鉄之助

土倉定六郎

尾関万之丞

那須宗七郎

若林弥太郎

今井伝三郎

明田佐次右衛門

大森勘次郎

永田清次郎

小野田助三郎

龜山立閑

あさいや 太郎左衛門

同人 忰伊平次

しまや 源兵衛

きの国や 吉兵衛

積菜役付

一六ツ前講堂着座より胙頂戴之時迄後見并胙頂戴之差図共

左 江見仁兵衛

右 市浦善蔵

一食次肝煎

食次菓子共 横山清内

左 小原宗助

右 窪田友右衛門

一食堂内之通

同 煩 江田甚三郎

六ツ前諸生群座

左座菊舎

後見

江見仁兵衛

右座松舎

後見

小原宗助

着座肝煎

左

市浦善蔵

右

窪田友右衛門

和田弥兵衛

一見台ヲ出ス

右

柳川敬中

一桃舎

古家吉之丞

安井全兵衛

御膳肝煎

古家喜右衛門

則武丑之助

通

同

古家吉之丞

同

同

草野善八郎

同

同

古家吉之丞

御茶水道具火鉢たはこ盆手燭硯料紙請込

古家吉之丞

丸山正悦

御茶方

丸山正悦

一同南縁側

同

同

食次湯共

同

同

片岡養益

同

同

草野善八郎

同

同

千原助七郎

御料理 紺屋町助九郎

一物通料理人 秋田五兵衛

野田七兵衛

磨屋町 弥兵衛

人足三人

一椀方 次田忠兵衛

秋田弥四郎

人足老人

御廟 長大夫

御門番 関右衛門

土佐屋 六郎兵衛

食次菓子共 横山清内

同 煩 江田甚三郎

同 柳川敬中

同 斎藤兵次郎

同 長崎才次郎

同 食次菓子共 仁科道竹

同 渋谷文蔵

同 寺見菊次郎

同 岡本玄意

同 高尾正之助

同 山本五郎七

同 和田市太郎

同 岡村猪助

同 高井五三郎

同 竹内辰之助

同 片岡養益

同 食次湯共 草野善八郎

同 千原助七郎

二月六日

秋田五兵衛

以手紙得御意候、餘寒甚御座候、弥御堅固珍重奉存候、然者学校御扶持人秋田五兵衛と申者、御領分備中浅口郡六条院西村之名歳帳ニ付居申候、田地才茂無御座候ニ付、学校支配の方へ片付、右五兵衛并妻共ニ六条院西村之名歳帳外レ申候様ニ仕度旨願申候、乍御六ヶ敷埒明申様ニ被仰付可被下候、為其如斯御座候、以上

二月六日

市浦清七郎

八田与助様

二月七日

一内参校初

同日

一左之役人中朝鮮下行方勘定ニ寄合申ニ菊舎借用申度旨、日置隼人殿江尾関弥五左衛門・安田孫七郎被申達由ニ付、笹岡次郎七郎江申談、隼人殿御間被成候上ハ、御借仕勝手次第申遣也、則今日ハ初

御気色如何後座候哉、折角御保養可被成候、然者朝鮮人御用下行役人衆
三手御勘定銘々宿ニ而被致候而ハ、互ニ申談候儀難成、依之何ソ御用場一所ニ出合、帳面調申度由被申候、色々申談候得とも、外之所無御座候、御学校菊舎ニ而も取前之ことく御借被成候儀成り可申哉、何とそ左様ニ仕度存候、尤朝飯後方出、夕飯前迄之内出合仕度由被申候、先右之様子承度御内意御尋申候、依御報猶又御噂をも申上相究申度存候、已上

二月四日

尾関弥五左衛門

安田孫七郎

市浦清七郎様

大内弥五兵衛 若林弥四郎

雀部権十郎

徒目付

原田助大夫

荒木善七郎

松田勘四郎

中村彦右衛門

青地伝左衛門

岩井善内

二月七日

一市浦清七郎御廟学校奉行并御留帳御用和意谷閑谷支配共御赦免、服部図書

組ニ被仰付

是病氣ニ付右之役義御赦免奉願候之処、今日願之通被仰付也

(朱書)「随分養生仕、長命罷在候様仕候へ、重而御尋之義も可有由、御懇意之御意ニ而首尾好御免被成」

八日

一岡助右衛門・笹岡次郎七郎御近習被仰付、御廟学校奉行并御評定所詰御留帳御用、且和意谷閑谷只今迄市浦清七郎相勤候通兩人可相兼勤之旨、今日被仰付

(朱書)「尤御城江も毎日兩人合ニ登城仕候様被仰渡」

同日

一御門番関右衛門左之通願申ニ付、任其意、且又松浦覚之丞江差紙遣

口上

一私儀家内共野田屋町之帳奥ニ付居申候、家内之内老女娘せん、此度安宅権兵衛様江御請込ニ被成可被下由御座候、右之せん野田屋町帳奥ヲ外レ申様ニ市浦清七郎様江被仰上可被下候、已上

二月六日

関右衛門

古家喜右衛門殿

覚之丞江申遣状

以手紙致啓上候、餘寒甚御座候得共、弥御無事之由珍重奉存候、然者学校御門番関右衛門と申者、家内野田屋町帳奥ニ付居申者ニ御座候、関右衛門娘老女娘と申候、此度安宅権兵衛方へ引請可成由ニ付、野田屋町ノ帳奥ヲはつれ申様ニ仕度旨願申候、右之通関右衛門家内之内老女娘せん野田屋町帳奥外レ申様ニ乍御六ヶ敷被仰付可被下候、為其如斯御座候、已上

二月六日

市浦清七郎

松浦覚之丞様

返書

学校御門番関右衛門と申者、野田屋町帳面ニ附居申候由、右関右衛門娘老女此度安宅権兵衛へ引請被申候由、御紙面之通致承知候、町方方も申

出、帳面除候様ニ申付候、已上

二月八日

市浦清七郎様

松浦寛之丞

二月十一日

一左之楽人六人熨斗目破申ニ付、去月願候之趣

窺上

見垣権少輔

八木左衛門

大守对馬

今村和泉

高原宇兵衛

武田太郎右衛門

右楽人江先年被下候熨斗目所々破レ着用難仕御座候、此度被仰付被下候様ニ奉願候ニ付、見分仕相違無御座候、破レ候節願上候得共、被下来り候ニ付、御窺申上候、以上

正徳二年正月十八日

門田市郎兵衛様

見垣近江守 印判

二月十一日

一右之楽人六人之熨斗目損シ申ニ付、從閑谷料仕遣候得と上坂外記被申渡、向後者熨斗目学校ニ置、入用之節度々ニ借渡シ候様ニ可仕由被仰旨、岡助右衛門・笹岡次郎七郎・辻本文平ニ申渡ス

同日

一古沢源之丞子助右衛門初而入学、十一歳、右座

十二日

一丹波守様御家頼室市兵衛次男千次郎右同断、十四歳、左座

十五日

一学校奉行中今日屋敷替被仰出、如左

市浦清七郎家へ 笹岡次郎七郎

次郎七郎跡江 岡 助右衛門

助右衛門跡江 清七郎

二月十五日

一音楽下稽古有之、楽人中へ夕飯出ル

是明十六日依御廟御時祭也

同日

一左之通今日御触有之

内下馬御門方内其外所々御門出入、自今以後毎度何之何某家来ニ候と番人江相断可通候事

一御直参之者無僕ニ而被通候衆中、番人見不覚候へハ、誰ニ而候と可相尋候、其節とかめなく名々字可申埒ニ候事

右之通来ル廿一日より相断候様ニと主殿殿被仰候条、上坂外記殿被仰

渡候、以上

二月十七日

十八日

一講釈初ル

二月十八日

一永田軍平弟清次郎講釈聴聞ニ初而出

十九日

一左之諸生三人四九之朝参会、桃舎説史記、依之朝飯台出之、自今日初ル、引請江文次郎 須加庄八郎 笹岡平次郎 向井十蔵

廿日

一式日合楽有之

廿六日

一毎月三日殺生禁断之旨被仰出候条、笹岡次郎七郎申渡ス

同日

一安東藤之助江戸江下向、除列座之札

是安東平左衛門方ニ依養子ニ参候也

廿七日

一 笹岡次郎七郎今日三宅仁兵衛跡御長屋江乍当分引越ス
是只今迄之居屋敷明候而岡助右衛門依為引越候也

二月廿七日

一 張直之時大鼓掛替、今日より打之

是破候ニ付去冬大坂江張直ニ被遣、成就仕依到着也

同日

一 此助ノ字下付申間敷依御触、小生中掛札下ノ助ノ字介ノ字ニ今日悉改之

廿八日

一 岡助右衛門今日笹岡次郎七郎跡江引越ス

廿九日

一 市浦清七郎今日岡助右衛門跡江引越ス

同日

一 次田忠兵衛御用ニ付、和氣郡学校領働江当廿四日ニ參、今日歸ル

同日

一 辻本文平引込罷在候処、自今日出勤仕

是悴当廿二日病死依仕候也

晦日

一 上道郡平井村之仁介人足ニ被抱、自今日相勤、切米三俵半

是関谷領之内方御留帳方小使ニ抱候テ可然ニ付、如斯

三月一日

一 參校并内講習共止、如例

四日

一 參校初ル、且自今日昼飯出ル、如例

同日

一 秋田五兵衛儀ニ付、去月市浦清七郎より八田与介へ書状遣候処、返書今日

来ル、如左

以手紙得貴意候、然者学校御扶持人秋田五兵衛殿浅口郡六条院西村人馬
帳ニ附居被申候処、本在ニ而八田地才も無之ニ付、向後学校御支配方へ
片付被申度就願、右五兵衛殿夫婦共村方帳面御外シ被成度旨、御紙面之

通致承知候、村方方も右之趣願書指出シ申候故、本在人馬帳指除候様ニ
申渡候、以上

三月四日

市浦清七郎様

八田与介在判

五日

一 笹岡次郎七郎奉行家市浦清七郎跡へ今日移ル

三月八日

一 市浦善蔵・小原宗介兩人共学校御雇ニ而御用可相勤旨、依之從関谷領御米
式拾俵宛被下之旨日置隼人殿被仰渡之旨、右兩人江笹岡次郎七郎申渡ス

十二日

一 横山清内自今日出勤

是去月廿一日娣病死仕、忌中ニ罷在、忌明候故出ル

同日

一 左之通三人江岡助右衛門・笹岡次郎七郎申渡ス

同日

一 山根又八郎

是只今迄読書之師相勤候処、自今弥和田弥兵衛と申合、諸生読書之師并
読書場世話やき、依之年申銀三枚被下候旨申渡ス

一

江 文次郎
長崎才次郎

右兩人共読書之師相勤候処、自今弥為読書致參校候諸生ニ精ニ入為致読
書候様ニ、依之只今迄年中銀六拾匁ツ、被下候処、自今銀三枚宛被下之
旨申渡ス

三月十三日

一 安井全兵衛妻之儀願申ニ付、其通申付ル

同日

一 松田勘四郎養母私妻ニ仕度存候、此趣御奉行中様へ可然様被仰達、願之
通被仰付被下候様頼存候、已上

同日

辰三月十三日
古家喜右衛門殿
安井全兵衛

古家喜右衛門殿

辰三月十三日

古家喜右衛門殿

安井全兵衛

十四日

一前田權之助殿御家頼中嶋小一右衛門・同嘉七郎觀字

是笹岡次郎七郎乃當番横山清内江申来り、案内仕ル

三月十八日

一渡辺十郎右衛門元服、入大生之列

廿二日

一菊舎二而有之下行方之勘定帳出来二付、大内弥五兵衛・若林弥四郎其外御徒衆今日退校仕ル

廿三日

一筒井久米自今日学房二来居

是為觀学附飯二而和田弥兵衛学房江来居仕度旨願申二付、任意、如斯

廿四日

一柴岡久知子宗伯初而入学、九歳、左座

廿六日

一上野定右衛門從江戸歸、居相吉太郎方へ到着

是吉太郎母之弟也、只今迄松平大炊守殿（今）相勤居申候処、浪人仕如斯、

尤吉太郎方より頭衆へ為致逗留度旨願差出候処、其通相叶、此段学校奉

行江茂相達、御長屋吉太郎方二同居仕ル

三月廿七日

一参校止

是今日少将様被遊御発駕二付、如斯

晦日

一中室御掃除市浦善藏出勤仕ル

四月二日

一仁科道竹自今日出、写詩経ノ点

同日

一参校止

是於養林寺御前様御法事依有之也

但自今御法事有之節ハ其御忌日二ハ参校講釈共相止候筈二相定

六日

一内参校止

是少将様・若殿様今日依被遊御発駕也

八日

一岡田玄朴子淳朴講釈聴聞二初而出ル

同日

一山中秀庵弟子佐藤順昌右同断

九日

一習字之師齋藤兵次郎退校

是御郡会所江御雇二而依出勤仕也

四月十一日

一森嶋甚左衛門子甚之介初而入学、十一才、左座

同日

一山中秀庵子順庵初而出ル

是出入仕、江文次郎・長崎才次郎二讀書仕度旨断有之、任意、如斯

十二日

一江田甚三郎自今日習字之師勤ル

是齋藤兵次郎代り也、只今迄讀書之師相勤候処、習字方可相勤旨申渡又

十五日

一坂口槇之介元服仕、入大生之列

同日

一衆人江御借候熨斗目、左之六人前今日出来、辻本文平被預之

見垣權少輔 八木左衛門 大守対馬

今村和泉 高原宇兵衛 武田太郎右衛門

十七日

一昨今参校内参校講習共止、如例

是依御祭礼也

四月十九日

一觀校札式枚出来、如左

表 正徳二年 觀校 岡山学校、焼印 二月八日	裡 岡助右衛門 印判
---------------------------------	---------------

又一枚ハ 表同前、裡篠岡次郎七郎印判

廿日

一合樂有之

廿三日

一金光市左衛門弟藤之丞講釈聴聞ニ初而出ル

同日

一津高郡辛川村之名主子甚三郎右同断

廿四日

一今日參校之諸生五ツ半時ニ令退出

是女院依薨去御穩便也

但来ル廿九日より參校初可申旨申渡ス

女院様薨去被遊候由、依之諸事可為穩便、普請作事ハ自今日三日相止、
鳴物ハ来ル廿八日迄無用之由、池田主殿殿被仰候、右之段御仲間可被仰
伝候、尤御支配有之御方ハ其面々へも移り候様ニ御伝可被成候、以上

四月廿四日

上坂外記

藤岡勘右衛門様

小堀彦左衛門様

四月廿四日

一晚内講習止

是依御穩便也

廿九日

一參校初ル

同日

一音楽稽古初ル

同日

一内講習初ル、并吹貝

同日

一青地伝吉元服仕、入大生之列

五月二日

一木村休伯・白神見俊兩人共自今日読書之師相勤

五月四日

一參校并晩内講習止、如例

八日

一講堂之孟子講釈止

是嚴有院様御法事有之、今日御忌日ニ付、如斯

九日

一御料理人堀江善五郎子庄七郎初而入学、十五歳、右座

十三日

一加世七三郎病死ニ付、除列座之札

十八日

一安井本兵衛御用ニ付、和意谷江參、依之同人留守之間校尉ノ判辻本文平可
勤之旨、笹岡次郎七郎申渡ス

同日

一合樂有之

是只今迄毎月廿日有之候処、廿日ニハ笹岡次郎七郎指合有之ニ付、自今

十八日ニ可仕旨、岡助右衛門樂人中江申談 如斯相改

五月十九日

一鎌田長栄子友栄初而入学、十三才、右座

廿二日

一參校并内講習止、如例

是故少将様依御忌日也

同日

一安井李兵衛今日帰ル

廿三日

一伊木将監殿御家頼笹岡丹内講釈聴聞ニ初而出ル

廿七日

一居相吉太郎今日江戸江発足仕ル

廿八日

一浅野忠左衛門当廿二日ニ出、今日帰ル

同日

一草加五郎右衛門家頼中田佐次兵衛子喜六郎講釈聴聞ニ初而出ル

廿九日

一加藤熊太郎朝夕喰捨被下、校内通之子渋谷文蔵・古家吉之丞・草野善八郎

並ニ相勤候様ニ申渡ス

六月朔日

一食堂之東北ニ有之會計西之方ニ四畳半敷ノ座敷出来

是積菜之節御名代御休息、次ハ奉行中参会所ニ成ル

同日

一會計ヲ転桃舎

九日

一辻本文平儀、種ヶ嶋鉄砲稽古為玉薬火繩代自今毎歳銀六拾匁宛被下之旨、

笹岡次郎七郎・岡助右衛門申渡ス

是只今迄、玉薬火繩入用次第相渡之候処、数年稽古仕候由ニ而、右之銀

ニ而搏合可申旨、且人足入用之時ハ如前々召連、并稽古ニ参候節ハ喰捨

被下候義も右之通ニ申渡ス

六月十四日

一來ル十六日土用ニ入申ニ付、土用中内参校例之通勝手次第ニ可致参校旨、

今日於講堂小原宗介諸生中江申談ス

十六日

一内参校初ル

但初りより連読ニ而旧読四ツ折文字札ヲ出シ、其取候札数之以多少令着

座、四ツ半ニ退出也、人数如左

左

田坂六十郎 向井十蔵 杉山吉次郎

西尾是庵 石津次郎三郎 神野乙弥

渡辺小八郎 岩野権之丞 馬場小八郎

今中助太郎 杉山市之介 岡 千介

原 久之丞 古沢助右衛門 安藤郷大夫

大村平三郎 山田三四郎 伴 音之介

右

内藤栄之介 安田喜之介 本郷五郎作

池田六之丞 近藤七九郎 野々村辰之介

下濃徳之丞 波多野直之丞 鎌田友栄

永田善次郎 千馬藤之丞 河崎又吉

安部伝之介 駒田友省 窪田忠介

広田万次郎

六月十六日

一渡辺助左衛門三男万三郎初而入学、九才、右座

十七日

一御徒難波吉右衛門子吉之介初而次江入学、十二歳

同日

一御徒安井源四郎子善五郎右同断

廿五日

一御書物虫干自今日初ル、手伝衆如例

但左之人数之内○ノ分ハ笹岡次郎七郎申談ス

○山根又八郎 ○内藤万清 水野伝五郎

○和田弥兵衛 ○江 文次郎 ○長崎才次郎

○平賀安益 横山清内 古家喜右衛門

柳川敬中 仁科道竹 ○筒井久米

腫物故不出 在所へ参

木村休伯 白神見俊

洪谷文蔵 古家吉之丞

秋田五兵衛 草野善兵衛

秋田弥四郎 草野善八郎

辻本文平 江田甚三郎

廿六日 森本才右衛門

一虫干御書物諸御道具共并才右衛門預り之武具馬具も今日干之

廿七日

一昨日參校止

是依虫干有之也

同日

一今日御書物改仕

但シ今年ハ見届安井李兵衛ニ辻本文平令相談、大寄帳を以為致出座相改

辻本文平 江田甚三郎 安井李兵衛

手伝

内藤万清 横山清内 柳川敬中

長崎才次郎 草野善兵衛 秋田弥四郎

洪谷文蔵 古家吉之丞

右虫干ノ今日迄兩度宛せんしちや并昼ちや漬出ル、如例

六月廿八日

一左之諸生兩人元服仕、入大生之列

田坂六十郎 内藤栄之介

七月二日 一今日大風雨ニ付、校内処々少シ宛之破損有之

同日

一御穩便之御触有之

是弥姫様去月廿一日御卒去ニ付、来ル六日迄普請作事停止之旨、御触有

之

筑州柳川之城主立花飛驒守様之奥様也

七月四日

一參校止

是依御穩便也

七日

一校内七夕之礼ニ無往来

是就御穩便國中礼依停止也

同日

一自今日普請作事初ル

同日

一小原善大夫自今日学房江来居

九日 一參校初ル

同日

一東条吉之丞諸生習字之方へ被雇之、自今日出勤

是只今迄御奉公書之方へ相調候之処、右之御用相調仕舞申ニ付、如斯

但年中銀三枚宛被下之旨、笹岡次郎七郎・岡助右衛門申渡ス

七月九日

一水野伝五郎御留帳方今井伝三郎・明田佐次右衛門ニ相加可勤之旨、右兩人

申渡ス 是只今迄御奉公書之御用相勤候之処、彼ノ御用相調候故、如斯

但御合力米被下候儀ハ、只今迄之通拾五俵閑谷領之内より被下候旨、

申渡ス

十一日

一自今日来ル十六日迄參校・内講習共止、如例

十三日

一自今夜当月中、校内亥之刻以後夜行遠慮可有之申渡ス、如例

十七日

一參校初ル

七月廿日

一校内鉄砲稽古初ル

是例年主膳様御家老土倉弥兵衛・馬場十郎右衛門へ御内証相窺申二付、当年茂岡助右衛門・笹岡次郎七郎右衛門二人へ申遣候処、不苦勝手次第と返書有之二付、如斯

廿一日

一横山清内方之南北ノ屏覆大風雨ニたおれ候ニ付、立直之

同日

一江文次郎今日撰州江参

廿七日

一下濃徳之丞断有之、除列座之札

是内匠頭様御兒小性ニ依被召出候也

同日

一甚之介儀ニ付、町奉行江申遣、如左

以手紙致啓上候、然者学校安井李兵衛養子備中都宇郡中田村文介世忤甚之介、此度実父文介方へ戻シ申候、上之町帳奥ニ附居申候間、帳奥除申候様被仰付可被下候、已上

七月廿七日

笹岡次郎七郎
岡 助右衛門

松浦寛之丞様

七月晦日

一今朝左之者共ニ料理酒出之

是昨廿九日鉄砲依搏上仕候由也

辻本文平

横山清内

古家吉之丞

草野善兵衛

野田七兵衛

秋田弥四郎

草野善八郎

八月二日

一自今日諸生中之昼食止、如例

同日

一仁科道竹写点今日出来

詩経紙數百四十六枚

書経紙數百枚

八月二日

一秋田弥四郎儀ニ付、御郡奉行江申遣、如左

以手紙得御意候、然者学校御扶持人秋田五兵衛養子弥四郎、本在加夜郡横谷村神職水子筑前家内ニ而、人馬帳ニ附居申候、向後五兵衛一所宗門御改此方ニ而可致候間、右弥四郎横谷村人馬帳外シ申様被仰付可被下候、為其如斯御座候、已上

八月二日

笹岡次郎七郎
岡 助右衛門

西村六之介様

返書

御手紙致拜見候、然者学校御扶持人秋田五兵衛養子ニ備中加夜郡横谷村神職水子筑前甥弥四郎呼取申ニ付、本在人馬帳外シ候様ニ可申付旨、御紙面之趣致承知候、右弥四郎宗旨真言宗窪屋郡古地村宝村寺旦那ニ而、只今迄宗門横谷村名主手前ニ改置申候、則在方より茂願書差出シ、願之通申付候、已上

八月二日

西村六之介

岡 助右衛門様

笹岡次郎七郎様

八月八日

一赤坂郡久々井村之医師玄日講釈聴聞ニ初而出ル

同日

一左之通御町奉行江申遣

以手紙得御意候、然者学校安井李兵衛上之町ニ住居申候、向後李兵衛家内不殘宗門御改并諸法度共ニ自学校可申付候之間、上之町五人組頭改共御除被成可被下候、以上

八月八日

笹岡次郎七郎

松浦覚之丞様

岡 助右衛門

以手紙得御意候、然者学校柳川敬中富田町ニ住居申候、向後敬中家内不
残宗門御改并諸法度共、自学校可申付候間、富田町五人組頭改共ニ御除被
成可被下候、以上

八月八日

笹岡次郎七郎

岡 助右衛門

松浦覚之丞様

八月十二日

一左之返書今日来ル

学校安井李兵衛上之町ニ致住居候、向後右李兵衛家内不残宗門御改并諸
法度共ニ学校より御申付候間、上之町五人組頭改共ニ差除候様可申付候
旨承届候、已上

八月十二日

松浦覚之丞

岡 助右衛門様

笹岡次郎七郎様

学校柳川敬中富田町ニ致住居候、向後右敬中家内不残宗門御改并諸法度
共ニ学校より御申付候間、富田町五人組頭改共ニ差除候様可申付候、已
上

八月十二日

松浦覚之丞

岡 助右衛門様

笹岡次郎七郎様

八月十五日

一今夜中秋月之詩会有之、如例

十六日

一今晚音楽下稽古有之

是明後十八日依御廟御時祭也

十八日

一今朝御廟江從校厨弁当遣之、如例

左之者共参

安井李兵衛

古家吉之丞

秋田五兵衛

次田忠兵衛

草野善八

御人足式人

八月廿一日

一笹岡次郎七郎・小原宗介今日閑谷江参

是明後廿三日依有积菜也

但宗介儀八津田源六郎依病中

同日

一古家喜右衛門・同吉之丞・加藤熊太郎、右同断

同日

一小原善大夫・長崎才次郎・平賀安益・白神見俊為积菜参拜、右同断

廿二日

一辻本文平今日閑谷江参

是両谷御番人ニ依為致鉄砲稽古也

廿四日

一平賀安益・白神見俊今日從閑谷帰ル

一笹岡次郎七郎・小原宗介・同善大夫・辻本文平・古家喜右衛門・同吉之丞・
加藤熊太郎、今日從閑谷帰ル

八月廿八日

一御廟学校和意谷閑谷下役人今日宗門判形仕

同日

一草野善兵衛御米蔵御用可相勤之旨申付ル

同日

一中嶋嘉七郎初而入学仕ル

是丹波守様御家頼遠藤弥次右衛門甥也

是折々参校依読書諸講習聴聞也

廿九日

一丹木仁蔵為宗門判形一昨廿七日ニ出テ、今日帰ル

晦日

- 一 高取九大夫右同断、一昨廿八日ニ出テ、今日帰ル
九月朔日
一 豊嶋喜左衛門右同断、去月廿七日ニ出テ、今日帰ル
同日
一 浅野忠左衛門右同断、去月廿八日ニ出テ、今日帰ル
二日
一 沢原弥右衛門孫権十郎初而入学、九才、左座
七日
一 市浦善藏忌中
是父清七郎昨六日依病死仕也
九月廿五日
一 今晩師匠振舞有之
人数并献立ハ校厨記之
廿六日
一 坂井長兵衛子右衛門八初而入学、十二歳、左座
同日
一 丹比仁兵衛子平之介右同断、十歳、右座
十月朔日
一 秋田五兵衛今日より校厨賄勤ル
同日
一 岡助右衛門今日作州湯原江参ル
三日
一 左之通子兩人ニ今日御書物被下之
四書集註 壺部 渋谷文蔵
五経白文 壺部 加藤熊太郎
七日
一 沢原権次郎病死仕、除列座之札
廿二日
一 公方様御他界ニ付、御触如左
- 公方様去ル十四日御他界被遊候由、從江戸御飛脚到来候、未々迄堅穩便
ニ可仕旨、御年寄中被仰渡候、普請作事等之儀ハ追而御触可有之候、夫
迄ハ相止可被申候、已上
十月廿二日
- 十月廿三日
一 講堂孟子之講釈止
廿四日
一 参校止
廿五日
一 梧舎之炉今日開之
是漸依寒冷趣也
廿六日
一 校厨自今日米つく
同日
一 江文次郎從撰州今日歸校
廿七日
一 御触有之如左
御他界ニ付此度小畠権内御差越、此節物毎随分静ニ仕、火之用心別而念
入可申由、御意被成下候、右之趣上坂外記殿被仰渡候、可被得其意候、
已上
十月廿七日
- 十月廿九日
一 坂井伝次郎断有之、除列座之札
是内匠頭様江御徒ニ依被召出候也
晦日
一 自今日校内之小子少シ宛之読書初ル
十一月七日
一 小原宗介忌中
是父善介昨六日依病死仕也

十四日

一丹木仁蔵当三日ニ從和意谷出、今日歸ル

是閑谷御米蔵并御賄方作事方共御勘定ニ出、昨日迄ニ依相濟候也

十五日

一御触有之、如左

今日より普請作事致候事不苦之旨、池田刑部殿被仰候由、池田七郎兵衛

殿被申渡候、已上

十一月十五日

十一月十九日

一詩經之内講習初ル、但未吹貝

廿一日

一近思録内講習初ル

是只今迄二七之朝六ツ半時有之候之処、自今一六之昼四ツ半時内参校

退出以後初候筈ニ相定

同日

一三友寺并弟子節峯、清泰院并隱居晃宗、已上四人觀学

是水野伝五郎相達奉行中、如斯

廿八日

一豊嶋喜左衛門当廿四日出、今日歸ル

廿九日

一向井十蔵元服仕、入大生之列

十二月朔日

一日笠喜三郎去月廿四日出、今日歸ル

同日

一次之小子和田市太郎改名紋七郎

五日

一御人足六介・五介・与介三人共暇遣之

是六介・五介儀ハ平生勤方悪敷、其上先日御穩便之時分両人口論依仕也

与介儀ハ耳うとき故、如斯

十二月六日

一諸生中江廻状出

明七日より参校初り候間、御勝手次第出校可被成候、已上

十二月六日

笹岡次郎七郎
岡 助右衛門

七日

一参校初ル

八日

一講堂孟子講釈初ル

同日

一竹舎檜檜古右同断

同日

一浅野忠左衛門当四日出、今日歸ル

十日

一左之読書之師四人江鼻紙被遣之

是休日諸生旧読引請依相勤也

一鼻紙五束

一鼻紙五束

一同 五束

一同 五束

十二月十日

一左之五人江御褒美并御加増被遣

一銀式拾匁

右者御勘定方手伝相勤候ニ付、被遣之

一同式拾匁

右同断

一同拾匁

右者諸礼檜檜古精入相勤候ニ付、被遣之

一同拾匁

右者暇日読書之師相勤候二付、被遣之
一米壹俵加増 御門番関右衛門

右者都合七俵被下候旨申渡又

十二月十日

一寒二入自今夕粥出ル、如例

同日

一上寺二有之佐々木之甲冑今日持参仕、文庫江預ケ納之

是神職業合豊後御用人中江申達、盗人為用心当三分文庫江御預ケ申度之旨

願候二付、如斯

十一日

一楽人音楽稽古出勤日数如左

一四拾九日

見垣権少輔

一八十九日

大守对馬

一三十二日

八木左衛門

一百九十七日

武田太郎右衛門

一五十一日

今村和泉

一貳百九日

高原宇兵衛

一百六十三日

佐々木主馬

一百日

見垣弥介

一百十四日

今村河内

右之日数相改申候、已上

正徳式年十二月十一日

安井李兵衛

右之通相違無御座候、已上

笹岡次郎七郎

岡 助右衛門

十三日

一主膳様御家頼植村清九郎講釈聴聞二初而出ル

同日

一瀧川弥右衛門家頼植村文介右同断

同日

一講堂孟子講釈今日迄二而止、如例

同日

一槍稽古右同断、竹舎江ほた餅出、如例

十四日

一参校右同断、諸生中江ほた餅出、如例

十五日

一御人足二口津高郡尾上村五介被抱之、切米三俵、自今日相勤

十二月十五日

一別所ノ椀方六介今日帰宿仕

十六日

一煤掃如例、御足輕四人出勤

昼小豆粥并酒出ル、晩料理如例

十九日

一從江戸被仰下之旨如左

被仰出候趣

上古以来我国にて金銀を生し候事、其数すくなく、天下の財用とほしく候ひしに共、世の人伝承たる所にて候、然るに東照宮御治世の始、慶長七年に及びて、天運の時至り候故か、神徳の感しいたされ候故歟、天下の宝山一時に開け始めて、金銀の生し出し事、我国の始よりこのかたにまた其例を聞ず、是よりして公私貴賤の財用ゆたかに事足り候のみにあらず、我国の外よりも金銀を求むべきために渡来候国々其数多く、是によりて又我国の資用もゆたかに事足り候て、今日に至候、皆是東照宮の神恩にあらずとハ申すへからず、宝永年中我国に渡来し事を禁せられ候国々多しといへとも、今に至て年々に渡来候所も其数猶すくならず候を以て、我国の金銀ハ万国の宝にすくれ候事世の人又推知へき所にて候、然るに又慶長より以来、或其異国の中に流れ入、或ハ火災の度に焼うせ、或ハ神社仏閣衣服器財のため費し用ひし所、凡九十余年の間我国の金銀大半を減し候故に、天下の財用相通候との事か、其始に及び難く、是に

よりに元禄年中金銀の法を改め造られ、我国通用の金銀又其数を倍し候、然れ共其金銀の品ハ東照宮の定置れし所にハ大きに及はず候によりて、工商の類あらたに造出され候金銀の價を賤しミ、各其利を失ふへからざる事を謀り、諸物の價を増し加へて商売し候に及ひて、諸物の價は年々貴く、金銀の價は年々に賤くなり来りて、ついに公私貴賤の難儀にハ至りぬ、異朝にしてハ古より其宝貨の品高下同しからざる事共にて、就中中古以来ハ宝鈔とて紙を以て金銀にかへ候て天下に通用せしめ候事今に至るのよし相聞へ候、元禄以来の金銀たとひ其品ハ下り候共、異朝の宝鈔にハくらふへからず、然れハ我国の四民各其家業を相伝て、其財用を相通し候事、東照宮より以来代々の国恩により候所を存候ハんにハ、金銀の價もさのミハ賤します、諸物の價もさのミ貴はすして、今日の難儀にも及はしむへからず、しかれ共財を重んじ利を争ひ候事は工商の類の習ひに候上ハ、あなかちに咎むへからず、只偏に其餘公私貴賤の煩となり候事、今更是非を論するに及へからず、すへて此ボの事共年久しく知召れ候御事に候を以て、御代の始より常に御心に懸られ候所ハ、金銀の品もとのことくに諸物の價も平かに、いかにもして天下の煩を際るへき御本意に候得とも、凡ハ物一たひやふれ候のちもとのことくなし返し難き事ハ定れることハりにて、中にも今日金銀の品をもとのことくなし返され候事尤以難き事に候、若然るへきいはれもなく今の金銀を以てもとのことくなし返され候ハんにハ、天下に通用し来り候金銀ハ俄に其数の半を減し、天下の人各其家財の半を失ひ、又工商の類の利を謀り、心ハもとのことくに候ハ、諸物の價ハ其半を減して商売し候事も有へからず、然らハ金銀の数は今迄の半を減し、諸物の價貴く候事ハ今迄のことくに候ハんにハ、公私貴賤の難儀只今よりハ猶甚しきに至り候へき歟、此ボの儀によりて卒爾の御沙汰にも及難く候うちに、新金の事、或ハ火にあひ候てハ流れうせ、或ハ物にぬれ候而は折損し、其宝を失ひ候輩有之由聞召及はれ、やむ事を得られず、先其品をもとのことくに改造るへき由被仰出候、其形の少しく候事ハ不可然候得共、金銀の法もとのことくなし返され候迄ハ、天下に通用候金の数其半を減すへき事尤

以て不可然事に有之候故に候ひき、然るに又新銀の法次第に其品下り候て、去年の冬に至りて銀にて通用し候国々貴賤の難儀に及ひ候由聞召され、殊に不可然事に思召され候を以て、新銀を造り出し候事をハ停止也、此上ハ猶更に金銀の品もとのことくなし返さるへき事、日々に御心を尽され候、但天下の宝ハ天下と共に宝とすへき物に候上は、思召にまかせて御決定あそはされ難き御事に候、たとひ今日金銀の品をもとのことくなし返され、其数の半減し候とも、慶長以前の代々にくらへ候ハ、天下の財用猶ゆたかなるへき事ハ万々倍し候へし、然上は天下の貴賤相共に存し候所、我国の金銀ハ万国にすくれ候て、万代の後迄の宝とすへき物に候へハ、たとひ各其財宝の半を失ひ候とも、其品をもとのことくなし返さるへき御事に候、工商の類も相共に存候所、金銀の品もとのことくなし返され候ハ、たとひ其利を失ひ候とも、諸物の價ハ其半を減して商売仕るへき事に候と存候ハ、年来の御本意のことくすミやかに金銀の品をもとのことくなし返され、天下の煩を際れ候へし、若天下の貴賤の存付る所も今日通用の金銀其数の半を減しられん事も不可然候事と存、工商の類も其利の半を失ひ候ハん事ハかなふへからずと存候におゐてハ、天下の人と共に其時を御待合せ可有之候、只いつれの道にも金銀の事ハ我国万代迄のために東照宮定置れし法のことくなし返さるへき御本意に候間、天下の貴賤よろしく此旨を存すへき由被仰出候者也

辰十月十一日

十二月十九日

一今日参校衆江例之通廻状出ル、如左

各様来年茂御参校可被成と思召候御方ハ、御名之下ニ御書付可被下候

若来年者御休可被成と思召候御方ハ、是又同前ニ御書付可被下候

一来年御参校可被成と思召候御方ハ、正月五日読初にて御座候、四ツ二初り申候間、其前ニ御参校可被成候、尤毎之通孝経御持参可被成候

一服御座候御方ハ、読初ニハ御遠慮可被成候、但槍遣初ニハ御勝手次第不苦候、已上

十二月十九日

笹岡次郎七郎
岡 助右衛門

十二月十九日

一 槍師匠衆江廻状如例

来年正月五日学校例年之通読初二而、槍遣初是又例之通御座候間、朝四
以前二被仰合御參校可被成候、小生衆之外毎御稽古三御出被成候御方へ
も御伝可被下候、以上

十二月十九日

笹岡次郎七郎
岡 助右衛門

荒尾紋左衛門

尾関弥三郎

上嶋浅右衛門

糟谷源左衛門

守田与介

平井安兵衛

伊丹久八郎

梶川孫三郎

同日

一来年廿歳四人切紙遣又、如左

来年廿歳二御成り被成候間、御法之通列座之札を除申候、講釈御聴聞二

ハ御勝手次第御參校可被成候、已上

十二月十九日

十二月十九日

一 坂口槇之介元服、父勘左衛門在宅二付、断有之、除列座之札

同日

一 御人足備中領高尾村与介被抱、切米三俵

廿日

一 御人足七介椀方二申付、半俵之加増、都合四俵被下、是別所之六介替役也

廿一日

一 同三介半俵ノ加増、都合三俵半被下

同日

一 当年坂口流槍稽古竹舎出入之諸生如左

石津次郎三郎

伊藤忠五郎

堀江庄七郎

右三人坂口勘左衛門弟子二成り稽古仕ル

久保田門右衛門 西浦清之丞

杉浦左太郎

右三人断有之

外二亀嶋市之丞断有之

廿五日

一 中室煤掃有之、如例、但龕外計也

十二月廿六日

一 中室御鏡餅舂之、如例

廿八日

一 奉行中参会有之、如例

廿九日

一 食堂東北ノ新座敷名輔仁軒今日掲額、窪田道和書之

同日

一 中室御龕中御掃除有之、津田源六郎勤之

同日

一 今晚校厨料理有之、如例

同日

一 当年参校之諸生凡百壹人

内

入学十一人

主膳様御家頼源左衛門子

河崎又吉

十一

藤四郎三男

山田三四郎

十一

源之丞子

古沢助右衛門

十一

丹波守様御家頼市兵衛次男

室 千次郎

十四

久知子

柴岡宗伯

九

甚左衛門子

森嶋甚之介

十一

長栄子

鎌田友栄

十三

助左衛門三男

渡辺万三郎

九

長兵衛子

坂井右衛門八

十二

仁兵衛子

丹比平之介

十

弥右衛門孫 沢原権次郎 九

御料理人善五郎子 堀江庄七郎 十五

右之内辞校并病死二而除列座之札五人

下濃徳之丞 坂井松之介 坂口槇之介

死 死

加世七三郎 沢原権次郎

一次之小子凡十二人

内

入学三人

松尾養伯弟子 片岡養益

吉右衛門子 難波吉之介

源四郎子 安井善五郎

正徳三癸巳年

元旦

一中室御鏡餅卯之刻辻本文平開中室之扉、奉之 手伝 横山清内

一同日未之刻同人徹之

一三ヶ日之間校厨料理如例

一御人足昨年三人暇遣候得共、今年ハ一人減シ二人被抱

五日

一読初之儀如例

開戸捲簾褰帳

岡 助右衛門 津田源六郎

焚香

笹岡次郎七郎 俯伏

堂中再拜

辻本文平

唱贊

下座 奥

拜 奥

拜 着座

降帳垂簾闔戸

岡 助右衛門

撃柝読出ス

津田源六郎

講孝経

和田弥兵衛

授肝諸生

窪田道和

二食堂飯台二着

笹岡次郎七郎

一役付

岡 助右衛門

五日

一於講堂諸生之間江出テ後見并肝頂戴差函共

江見仁兵衛

窪田友右衛門

東条吉之丞

松村弥五郎

山根又八郎

水野伝五郎

横山清内

江田甚三郎

柳川敬中

仁科道竹

江 文次郎

長崎才次郎

左之七人読初之節諸生之間江出読

内藤万清

渋谷文蔵

古家吉之丞

加藤熊太郎

草野善兵衛

秋田弥四郎

草野善八郎

古家吉之丞

一見台ヲ出ス

一四ツ前諸生群座

左座菊舎後見

江見仁兵衛

山根又八

小原宗介

仁科道竹

柳川敬中

右座松舎後見

市浦善蔵

窪田友右衛門

東条吉之丞

松村弥五郎

横山清内 江田甚三郎
 森本才右衛門
 一着座肝煎 右座 柳川敬中 左座 和田弥兵衛
 一飲室 加藤熊太郎 秋田弥四郎
 草野善八郎
 一火廻り 次田忠兵衛 御人足彦人
 一校門番人 御人足彦人
 一玄関 同 彦人
 以上
 五日
 一参校諸生 左座ノ上窪田道和
 津田源之介 須加庄八郎 富田仁三郎
 笹岡平次郎 田坂六十郎 門田松之丞
 青地伝吉 向井十蔵 杉山吉次郎
 西浦清之丞 西尾是庵 伊藤忠五郎
 窪田忠介 坂野五郎吉 渡辺小八郎
 丹羽与一郎 岩野権之丞 安藤助九郎
 馬場小三郎 今中助太郎 角南太郎吉
 広内権右衛門 駒田友省 芦屋五郎介
 古沢助右衛門 堀内源五兵衛 佐藤九三郎
 安藤郷太夫 大村平三郎 山田三四郎
 伴 市之介 柴岡宗伯
 右
 安部常五郎 淵本八三郎 内藤栄之介
 大久保門三郎 尾関千之丞 杉浦佐太郎
 河原九平太 安田喜之介 本郷五郎作
 波多野直之丞 先山権三郎 池田六之丞
 室 千次郎 森 門介 船橋鉄之丞
 野尾岩太郎 寺内円之丞 野々村辰之介

仙石文右衛門 永田善次郎 鎌田友栄
 長谷川又八郎 上嶋吉次郎 広田万次郎
 安部伝之介 丹比平之介 村田加五郎
 千馬藤之丞 河崎又吉 沢 慶春
 渡辺万三郎 已上六十三人
 一当春参校之諸生八十八人之内今日不参廿七人
 玉虫勝之丞 梶浦伝吉 大野三次郎
 小原善太夫 渡辺十郎右衛門 岩田玄仲
 石津次郎三郎 神野乙弥 杉山市之介
 岡 千介 原 久之丞 坂井右衛門八
 笹岡善七郎 森嶋甚之介 笹谷弥一郎
 久保田門右衛門 荒木助五郎 堀江勝七郎
 伊庭金之介 飯田幸之丞 藤岡六太郎
 日置伴内 近藤七九郎 井上藤次郎
 藤岡六次郎 水野半之丞
 五日
 一左之四人当年廿歳ニ付、御法之通除列座之札
 奥山三之進 村上定右衛門 松田与三右衛門
 大内藤蔵
 五日
 一左之三人当年参校仕間敷旨断有之、除列座之札
 大沼弥太郎 森寺兵大夫 河崎定之介
 同日
 一晩学校領之名主礼ニ参、料理出、如例
 十二日
 一勘定初如例、雑烹酒出ル
 十六日
 一音楽稽古初
 但笹岡次郎七郎以書付窺申処、池田七郎兵衛方左之通被仰渡

昨日御申聞候、如例年於学校音楽稽古当月十六日始、并銘々宅ニ而稽古之儀御書付奉人殿江申達候之処、其通被仰候間、左様御心得可被成候、已上

正月十四日

池田七郎兵衛

笹岡次郎七郎様

是昨年江戸依御凶変御穩便也

正月十七日

一 参校初ル、如例

同日

一 那須助右衛門子吉太郎初而次江参校

同日

一 和田藤兵衛次男三之丞右同断

十八日

一 講堂孟子之講积初ル、如例、講者窪田道和

同日

一 槍稽古初ル、如例

同日

一 合樂有之、如例

十九日

一 詩経之内講習初ル、如例、吸物酒出ル

同日

一 岡助右衛門・津田源六郎当十六日閑谷江参、今日帰ル

是閑谷読初依有之也

二月二日

一 木村休伯今日学房江移

是只今迄休伯白神見俊居申桃舎之東椀部屋ニ成ル、依之右兩人共桃舎之

学房東方三軒目江移ル

同日

一 内参校無之

是依积菜近々也

同日

一 安部常五郎病死、除列座之札

三日

一 来ル十三日迄講堂講积止、如例

四日

一 积菜来ル九日ニ被仰出、依之参校諸生中江廻状出

来ル九日积菜ニ而御座候、麻上下御着シ朝七ツ半ニ御揃被成候様ニ御参

校可被成候、朝飯ハ於学厨用意仕候、尤服御座候御方ハ御遠慮可被成候、

以上

二月四日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

諸生中

二月四日

一 槍師匠中江廻状、如例

来ル九日朝六ツ時积菜ニ而御座候、被仰合麻上下御着シ、御勝手次第御

出可被成候、朝飯ハ於学厨用意仕候、小生衆之外每竹舎江御出之方へも

御伝可被下候、尤服御座候御方ハ、御遠慮可被成候、已上

二月四日

笹岡次郎七郎

岡 助右衛門

荒尾紋左衛門

田中惣兵衛

尾関弥三郎

上嶋浅右衛門

糟谷源左衛門

守田与介

平井安兵衛

伊丹久八郎

梶川孫三郎

二月四日

一 門田市郎兵衛江左之通被申遣

以手紙得御意候、然者来ル九日积菜ニ付、例之通音楽御座候間、衆人中

江被仰談可被下候、為其如斯御座候、已上

二月四日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

門田市郎兵衛様

五日

一今日樂人装束御呉服方を請取、如左

以手紙得御意候、然者来ル九日積菜被仰付候ニ付、例年之通音楽御座候、依之樂人装束於吾人前烏帽子并掛緒布衣腰帯指貫共御借被成可被下候、尤樂人共方を請取着仕相勤可申旨何茂申候へ共、大事之御装束ニ而御座候へ者、学校へ請取、積菜之朝於学校為致着相勤候様ニ仕度、去春之通此方御規式相濟候ハ、早々返進可仕候、已上

二月五日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

小嶋龜右衛門様

今 中源介 様

八日

一坂口楨之介森本才右衛門学房江来居

是折々来居之旨願ニ付、如斯

九日

一上丁積菜如例

二月上丁積菜之儀

唱贊

辻本文平

開戸捲簾褰帳

篠岡次郎七郎
岡 助右衛門

啓積

御名代 池田吉左衛門

コウハン

三方 長ノシ

キリノシ

献果

次郎七郎
助右衛門

ヤキマンジウ

三方 アリヘイトウ

カヤ

長ノシ

キリノシ

參神再拝

焚香再拝

吉左衛門

酒注 次郎七郎

献酒

吉左衛門俯伏

捧盞 助右衛門

告辞

吉左衛門俯伏

備前国主左少将源綱政朝臣池田義陳謹修積菜之礼敢告

辞神再拝

次郎七郎

助右衛門

津田源六郎

徹酒果

閉積

吉左衛門

降帳垂簾闔戸

助右衛門

源六郎

礼畢

音楽雙調

開戸

捲簾

音取

啓積

武徳榮

献酒

酒胡子

閉積

還城樂

胙頂戴

賀殿 急

笙

大守対馬

箏

八木左衛門

同

佐々木主馬

笛

今村和泉

同 武田太郎右衛門
見垣弥介

大鼓 高原宇兵衛

鉦鼓 雇 中山定之進

上下ニテ出座見習

杉村若狭

講釈 中庸 窪田道和

講釈終テ笹岡次郎七郎・岡助右衛門侍中室之左右、授胙諸生、堂中之諸生從左右一人宛參、頂戴之、直食堂飯台ニ着

但次郎七郎儀ハ御名代方為御見繕、胙頂戴中半より津田源六郎と代り候也

二月九日

一 參校之諸生

津田源之介 須加庄八郎 梶浦伝吉

富田仁三郎 笹岡平次郎 田坂与兵衛

門田松之丞 青地伝吉 向井十蔵

杉山吉次郎 西浦清之丞 西尾是庵

石津次郎三郎 伊藤忠五郎 窪田忠介

坂野五郎吉 渡辺小八郎 丹羽与一郎

岩野権之丞 馬場小三郎 今中助太郎

角南太郎吉 広内権右衛門 駒田友省

芦屋五郎介 古沢助右衛門 坂井右衛門八

笹岡善七郎 堀内源五兵衛 佐藤九三郎

大村平三郎 山田三四郎 伴 市之介

柴岡宗伯

右座

淵本八三郎 内藤榮之介 安田源次郎

杉浦佐太郎 河原九平太 本郷五郎作

波多野直之丞 伊庭金之介 池田六之丞

室 千次郎 飯田幸之丞 森 門介

近藤七九郎 船橋鉄之丞 野尻岩太郎

寺内円之丞 野々村辰之介 仙石文右衛門

永田善次郎 鎌田友栄 長谷川又八

上嶋吉次郎 広田万次郎 村田加五郎

千馬藤之丞 河崎又吉 安部伝之介

丹比平之介 沢 慶春 已上六十三人

八十八人之内今日不參之諸生廿五人

玉虫勝之丞 大野三次郎 小原善大夫

渡辺千郎右衛門 岩田玄仲 神野乙弥

安藤助九郎 杉山市之介 岡 千介

原 久之丞 安藤郷大夫 森嶋甚之介

笹谷弥一郎 久保田門右衛門 荒木助五郎

大久保門三郎 尾関七次郎 先山権三郎

堀江勝七郎 藤岡六太郎 日置伴内

井上藤次郎 藤岡六次郎 水野半之丞

渡辺万三郎 参拜之衆

池田 木工 土方勝兵衛 同 千吉

村瀬甚之介 伊丹久八郎 守田与介

薄田半之丞 石田十左衛門 武田茂介

八田彦四郎 八田庄吉 持田庄次郎

土倉定六郎 大橋与左衛門 中村友達

駒田延友 鈴木万次郎 平井安兵衛

佃 先五郎 山中順庵 大内藤蔵

大内権蔵 山田市郎 坂口楨之介

宇治孫平 青地次郎吉 永田清次郎

大森勘次郎 安積幸右衛門 植村清九郎

高井吉大夫 龜山立閑 松崎伝治

- 河崎平作 辛川村甚三郎 大内村後藤立庵子孫十郎
- 大内村百姓多三郎 已上支度仕
- 船着町渡村彦平 油町富屋儀左衛門 皆部屋伊平次
- 積菜役付
- 一六ツ前講堂着座より胙頂戴之時迄後見并胙頂戴差図共
 - 左 江見仁兵衛 右 窪田友右衛門
 - 左 東条吉之丞 右 山根又八郎
- 一菊舎左座之諸生
 - 後見 江見仁兵衛 小原宗介
 - 東条吉之丞
- 一松舎右座之諸生
 - 後見 市浦善蔵 窪田友右衛門
 - 山根又八郎
- 一着座肝煎
 - 右座 柳川敬中 左座 和田弥兵衛
- 一見台ヲ出ス
 - 古家吉之丞
- 一輔仁軒
 - 御繕肝煎 古家喜右衛門 通 則武丑之右衛門
 - 安井李兵衛
 - 加藤熊太郎 草野善兵衛
- 一惣通料理方
 - 御手水道具火鉢たはこ盆手燭硯請込 古家吉之丞
 - 御茶方 丸山正悦 御料理 大工町庄次郎
 - 秋田五兵衛 野田七兵衛
 - 磨屋町弥兵衛 御人足三介・五介・与介
- 一椀方
 - 次田忠兵衛 秋田弥四郎
 - 御人足七介 御廟 長大夫・六介
- 一食次肝煎
 - 土佐屋六郎兵衛
- 一食堂内之通
 - 食次菓子共 辻本文平 同 横山清内
 - 同 江田甚三郎 同 柳川敬中
 - 同 斎藤兵次郎 同 渋谷文蔵
- 一菓子方付配方肝煎共
 - 手伝 和田弥兵衛 森本才右衛門
 - 木村休伯 中嶋加七郎
 - 市浦善蔵 小原宗介
- 一内外膳肝煎酌共
 - 窪田友右衛門 東条吉之丞
 - 山田藤蔵 山根又八郎
 - 内藤万清 水野伝五郎
 - 今井伝三郎 明田佐次右衛門
 - 江 文次郎
 - 仁科道竹 渋谷文蔵
 - 草野善兵衛 草野善八郎
 - 次田忠兵衛 御人足仁介
- 一飲室
 - 江 文次郎
- 一酒方
 - 次田忠兵衛
- 一蠟燭方
 - 同人
- 一燭剪并徹燭共
 - 渋谷文蔵 寺見菊次郎
 - 和田紋七郎 加藤熊太郎
- 一刀番
 - 食堂 新庄作大夫
- 一火廻り
 - 校門 渋谷千右衛門 小橋夫兵衛
 - 丸山次郎介 御足輕式人
- 一門
 - 同 洪谷文蔵 同式人

一校門 同式人
一玄關 同式人

小堀彦左衛門預小頭 壹人
関谷御掃除之者参合 壹人
魚屋八百屋日雇共 七人

右釈菜惣人数貳百貳拾貳人 未々下々迄

二月十日

一次之小子寺見菊次郎元服仕ニ付、除掛札

二月十日

一西大寺町山口屋新五郎弟山口三隆初テ出ル

是講釈内講習共聴聞ニ参校仕度ニ付、如斯

同日

一安田喜之介元服仕、入大生之列、改名ヲ源次郎

十二日

一今日音楽下吹有之

是明後十八日依御時祭也

十七日

一参校初ル

但今月只今迄ハ無内参校

十八日

一講堂之孟子初ル

同日

一今朝御廟江校厨より弁当遣入、如例

同日

一和田紋七郎文学精出シ申ニ付、左之通

是参校并内参校日ハ朝支度於校厨仕、右之外ノ日ハ朝ハ宿支度ニ而罷出、

晚於校厨支度仕候様ニ申渡ヌ

二月十九日

一冲藤大夫妻安次郎初而入学、十三歳、右座

廿四日

一和田弥兵衛銀四枚御加増、都合七枚被下之旨申渡ヌ

是校内之諸生依文学之世話仕也

三月二日

一参校止、如例

同日

一左之通去月渡辺助左衛門江申遣候処、今日返書来ル

以手紙得御意候、学校御扶持人草野善兵衛家内五人、本在邑久郡下笠加

村人馬帳付居申候、右善兵衛田地高茂無御座候ニ付、下笠加村人馬帳ヲ

外シ、学校支配之方江片付申度旨願申候、向後宗門御改并諸法度共從学

校可申付候間、下笠加村人馬帳外シ申様被仰付可被下候、為其如斯御座

候、已上

二月廿六日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

渡辺助左衛門様

返書

御手紙致拜見候、学校付御扶持人草野善兵衛家内五人内(男貳人・女三人)

邑久郡下笠加村人馬帳ニ付居申候得共、学校御支配方へ御引請可被成旨、

右善兵衛妻子共五人自今宗門御手前ニて御改可被成候間、村方人馬帳外

シ候様ニ可申付旨、御紙面之旨致承知候、已上

巳三月二日

渡辺助左衛門

岡 助右衛門様

笹岡次郎七郎様

三月四日

一参校初ル、且自今日諸生中并師匠役人勝手方迄、昼茶漬出ル、如例

同日

一御徒伊藤小八郎次江初而入学、十歳

六日

一安井杵兵衛・江田甚三郎・通古家吉之丞・草野善八郎、今朝和意谷江参

是来ル九日依御墓祭也

同日

一 樂人音楽稽古出勤日改メ判、自今辻本文平仕候様ニ申渡ス

一 笹岡次郎七郎・津田源六郎今朝和意谷江参

是明後九日依御墓祭也

三月八日

一 辰巳村之平六郎講釈聴聞ニ初而出ル

同日

一 槍稽古衆江自今日昼飯出、如例

九日

一 御徒矢牧六郎大夫子権蔵次江初而入学、十二歳

同日

一 中嶋加七郎今日方読書之師ニ出ル

同日

一 詩経之内講習止

是笹岡次郎七郎留守、窪田道和和意谷拜見ニ参、如斯

十日

一 笹岡次郎七郎・津田源六郎并安井李兵衛・江田甚三郎・古家吉之丞・草野

善八郎、右何茂今日從和意谷帰ル

十一日

一 草野善兵衛左之通願申ニ付、其通申付ル

同上

私姉池田主殿様御家来田中孫兵衛と申者ニ縁組申合度奉存候、不苦思召

候者御奉行様江被仰上、願之通被仰付被下候様ニ奉頼候、已上

正徳三年巳三月十一日

草野善兵衛

古家喜右衛門殿

三月十五日

一本郷五郎作元服仕、入大生之列、改名孫右衛門

十六日

一波多野直之丞病死仕ニ付、除列座之礼

廿二日

一 古家喜右衛門妻之儀ニ付、去月左之通御郡奉行江申遣候処、今日返書来ル

以手紙得御意候、然者学校古家喜右衛門妻本在児嶋郡小串村与四兵衛家

内にて、同村人馬帳ニ付居申候、右之妻此後喜右衛門方江片付、小串村

人馬帳外シ申度旨願申候、向後宗門御改才喜右衛門同事従学校可申付候

間、小串村人馬帳外シ申様被仰付可被下候、為其如斯御座候、已上

二月廿七日

笹岡次郎七郎

水野小右衛門様

返書

御手紙致拜見候、然者児嶋郡小串村与四兵衛姪学校古家喜右衛門妻ニ引

請度願候由、右之女同村人馬帳ニ付居申、宗旨真言宗同郡阿津村持福院

旦那ニ而、自今以後宗門其許ニ而御改可被成候間、小串村人馬帳外シ候

様ニ可申付旨御紙面致承知候、則村方方茂願指出承届、人馬帳削シ候様

ニ申渡候、已上

巳三月廿二日

水野小右衛門

岡 助右衛門様

笹岡次郎七郎様

三月廿三日

一 市浦善蔵・小原宗介御廟学校御用被仰付

右兩人共前岡助右衛門・笹岡次郎七郎相勤申通相勤之、且宗介儀者窪田

道和及老年、講釈一人ニ而難勤可有之間、講釈ヲも可相勤旨、今日於御

評定所池田主殿殿被仰渡

同日

一 水野伝五郎儀父彦五郎老病ニ付、御役義御断申上候処、伝五郎ニ代役被仰

付候由、依之只今迄相勤候御留帳方先御免被成、且学校習字之師無之ニ付、

此旨岡助右衛門・笹岡次郎七郎方服部図書江相達候処、是又清書日其外伝

五郎手透之節ハ、参校日ニも出勤仕筈ニ成ル

四月朔日

一去冬文庫江預置申候上寺ノ佐々木之甲冑、今日神職業合豊後請取ニ參、辻本文平相渡之

九日

一市浦善藏・小原宗介參会輔仁軒、晩料理出ル

同日

一柳川敬中只今迄町宅ニ而居申ニ付、校内三宅仁右衛門跡御長屋御かし可有之旨、今日申渡

同日

一江文次郎・長崎才次郎内講習詩経自今可講之旨ニ付、今晚文次郎国風唐葛生初講之

四月十四日

一長崎才次郎初而講習詩経

同日

一内講習ノ後座自今日又小学句読序講初之

是只今迄ノ小学宝永三丙戌八月七日ニ横山清内・草野善七郎・同善八郎・福井龜之介講習初、今月九日依講終也

十八日

一自先年御城御納戸之御笈辻本文平奉預居申候内、卷籠之御筥大守对馬每度借用仕、御祭礼御時祭共音楽御用相勤候之処、此度衆人仲間於一宮并酒折宮為國家御繁榮之御祈祷音楽奉奏度旨願申処、右両社之外伊勢宮・八幡宮・春日宮以上於五社可相勤之旨被仰付、就夫右之五社奏樂之節も拝借奉願度旨对馬願申条、辻本文平両奉行江相達候之処、御用之儀ニ候間、御借可仕旨文平ニ申渡又

四月廿七日

一西村六之介子長太郎初而入学、十一歳、左座

同日

一中村治左衛門子兵太郎右同断、十歳、右座

五月六日

一市浦善藏子一郎右同断、八歳、左座

一柳川敬中校内江為引越候ニ付、左之通御町奉行江去月廿八日ニ申遣、今日返書来ル

以手紙得御意候、然者学校柳川敬中家内不残只今迄富田町兒玉又兵衛借屋ニ致住居候、則同町名歳帳奥ニ付居申候、此度家内不残学校御長屋へ引越せ申候、富田町名歳帳奥外シ申様被仰付可被下候、尤宗門御改之儀も前ニ申合候通、学校ニ而可申付候、為其如斯御座候、已上

四月廿八日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

松浦覚之丞様

返書

学校柳川敬中家内不残唯今迄富田町兒玉又兵衛借屋ニ致住居候之処、此度家内不残学校御長屋へ御引越せ候、同町名歳帳外シ申様ニ可申付旨、御紙面之通致承知、其通申付候、已上

巳五月二日

松浦覚之丞

岡 助右衛門様

笹岡次郎七郎様

五月五日

一次田忠兵衛差扣罷在

是養子長太郎実父丹波守様御家頼柏尾喜右衛門今三日御追放依被仰付候也

五月五日

一次之小子横山孫太郎除掛札

是父孫九郎右同時ニ依被仰付候也

九日

一木村休伯・白神見俊兩人共、唯今まで付飯料式人扶持ニ而有之処、自今外並吾人半ツ、ニ申渡又

十日

一柳川敬中校内御長屋江今日引越又

十四日
一 左之通今日御触有之

増上寺御普請御用ニ懸り居申土中末々迄、留守差合之儀共宿又ハ不通者
方も申遣間敷由、從江戸御下知候、此旨可申聞由、隼人殿被仰候旨、服
部図書被相触

五月十七日

一 御廟附新庄作大夫子与一右衛門諸生習字之方御雇ニ而、自今日相詰、朝於
学厨支度申付ル

十八日

一 杉舎和田弥兵衛・森本才右衛門学房仕切塀ヲ取、今日一部屋ニ成ル

廿一日

一 岩田町医師牧嶋祐仙子立閑次之小子並ニ初而入学、十四歳

廿二日

一 参校止、如例

是依御忌日也

廿四日

一 中室屋根繕自今日初ル

廿七日

一 校外南之塀上塗有之処、今日出来

廿八日

一 豊嶋喜左衛門当廿日ニ出、今日帰ル

是御勘定場門田八兵衛方江勘定ニ出候依御用也

五月廿八日

一 馬医高山用介講釈聴聞ニ初而出ル

閏五月六日

一 中室御繕今日成就

八日

一 中之町医師光田永三子立悦講釈聴聞ニ初而出ル

十一日

一 中嶋嘉七郎自今日学房ニ来居

廿六日

一 門田市郎兵衛・八田弥惣右衛門・岡助右衛門・笹岡次郎七郎御用ニ付、今
晩参会松舎、切麦吸物酒出之

廿七日

一 自今日内参校ニ成ル、如例

是自今日依土用也

六月三日

一 御書物虫干初ル、せんしちや并昼飯外方手伝ニ出ル諸生へハ朝晩支度、如
例

須加庄八郎

向井十蔵

笹岡平次郎

東条吉之丞

小原善大夫

山根又八郎

内藤万清

水野伝五郎

和田弥兵衛

不参

中嶋加七郎

平賀安益

長崎才次郎

江 文次郎

木村休伯

新庄与一右衛門

右者市浦善蔵被申談

横山清内

古家喜右衛門

柳川敬中

渋谷文蔵

和田紋七郎

古家吉之丞

加藤熊太郎

次田忠兵衛

野田七兵衛

草野善八郎

人足式人

辻本文平

江田甚三郎

森本才右衛門

六月三日

一 浅野忠左衛門去月廿五日ニ出、今日帰ル

同日

一 講堂之孟子講釈止、如例

六月四日

一内講習止
是依虫干也

同日
一虫干昨今兩日二而済

五日
一今日御書物改仕

同日
見届安井奎兵衛出座、改之節学房衆手伝有之

一閑谷御掃除之者六介御僉議之義有之三付、高取九大夫召連參ル

是六介儀去月十四日之夜益原村十右衛門方へ閑谷を參候処、歸候刻右十右衛門梓源介并同村百姓其外村方ノ若キ者共大勢組合、右六介ヲ棒ニ而

うち、依之浅野忠左衛門・日笠喜三郎相議候て、万波夫兵衛・中山長四郎兩人ヲ益原村江遣シ、六介并十右衛門其外ノ者共二口上書為致、先日

忠左衛門持參仕ル、依之益原村之者共も御郡方を呼ニ被遣、明六日於御郡会所右何茂口ヲ御聞被成候ニ付、如斯

六月七日
一今日之内參校五ツ半時ニ退出也

是松平出雲守様御卒去被遊候旨從江戸申来、今明日謡鳴物未御穩便之御触依有之也

九日
一内參校初ル

十二日
一閑谷御掃除之六介被遣暇、今日校内ヲ退出仕、高取九大夫も則今日閑谷へ歸ル

是右之益原村十右衛門梓源介并百姓武介外百姓三人以上五人、今日宰舎被仰付、且十右衛門名主彦右衛門此兩人ハ被追込置之旨、相定之由

六月十四日
一土用中内參校今日迄

一土用中近思録之内講習止

是依暑氣甚敷也

十七日
一自今日參校初ル

十八日
一講堂之講釈初ル

七月六日
一今明參校止、如例

九日
一參校初ル

十二日
一自今日十六日迄參校内講習共ニ止、如例

十七日
一參校初ル

廿一日
一校内鉄砲稽古初ル、如例

横山清内 古家吉之丞 次田忠兵衛
野田七兵衛 秋田弥四郎 草野善八郎

七月廿八日
一今朝參校講釈并内講習共止

是松平左門様今月廿一日御卒去被遊、依御穩便也
廿九日
一校内鉄砲搏上之儀無之

是依御穩便也

八月四日
一參校内講習并音楽稽古初ル

八日
一大鷹一斎子淳斎講釈聽聞ニ初而出ル

十一日
一音楽下吹有之

是明十二日依御時祭也

十二日

一今朝御廟江校厨方弁当遣入、如例

安弁左兵衛 次田忠兵衛 古家吉之丞

草野善兵衛 参

十五日

一中秋月之詩会有之、如例

十六日

一岡助右衛門・津田源六郎・山根又八郎・江文次郎・通洪谷文藏・和田紋七

郎閑谷江参

是来ル十八日依积菜也

八月十六日

一辻本文平閑谷江参

是閑谷并和意谷御番人鉄砲為致稽古候也、如例

廿日

一岡助右衛門・津田源六郎・江文次郎・通兩人今日從閑谷歸ル

廿二日

一山根又八郎・辻本文平今日從閑谷歸ル

是又八郎儀八足痛二付、如斯

同日

一仁科道竹自今日写物仕

廿八日

一校内宗門御改有之

同日

一丹木仁藏宗門判形二昨廿七日二出、今日歸ル

廿九日

一浅野忠左衛門右同断、当廿五日二出、今日歸ル

八月廿九日

一高取九大夫宗門判形二廿七日二出、今日歸ル

九月三日

一日笠喜三郎右同断、去月卅日二出、今日歸ル

五日

一豊嶋喜左衛門右同断、朔日二出、今日歸ル

同日

一加藤熊太郎忌中明、自今日出勤

八日

一今明講釈并参校止、如例

十二日

一丸山文之丞弟六之進初而入学、十二歳

十四日

一丹波守様御家頼雀部猪之介子右同断、万之介十一歳、右兩人共右座

十六日

一今日内参校止、如例

是明十七日依御祭礼也

廿三日

一観菊之詩会有之、如例

廿五日

一合衆今日有之

是当月者楽人中社用神用有之故、如斯

十月二日

一御家中三步通り被召上候条、今日学校下役人二岡助右衛門申渡入

八日

一主膳様御家頼清水長大夫講釈聴聞二初而出ル

同日

一若原監物家頼中嶋宅右衛門右同断

廿五日

一左之御用人中今日音楽聴聞二参、晚於松舎御料理出ル

門田市郎兵衛 藤岡勘右衛門 小堀彦左衛門

森 半右衛門 今井文左衛門 松浦覚之丞
安田孫七郎

見垣近江守 金谷石見 見垣權少輔

大守对馬 高原宇兵衛 佐々木主馬

今村和泉 武田太郎右衛門 見垣弥介

見習

杉村若狭 中山定之進

右音楽濟小原宗介講大字三綱領

十一月三日

一昨今講釈并参校止

是去十八日尾張五郎太様依御卒去也

十八日

一左之三人之老母ニ鴨被遣候旨、市浦善藏・小原宗介申渡又

辻本文平母 横山清内母 柳川敬中母

同日

一左之三人ニも被遣之候条、安井李兵衛申渡又

秋田五兵衛 次田忠兵衛母 草野善兵衛母

廿一日

一寒ニ入自今夜粥出ル、如例

廿六日

一内参校止

是少将様依被遊御帰城也

十二月三日

一講釈止

是今日御家中御礼依申上也

十二月六日

一自今毎月十五日茂三日廿八日之通殺生停止之御触有之

同日

一近思録之内講習自今日晚七時ニ有之筈ニ定ル

七日

一宍甘宗庵初而参校之列ニ入、十四歳、右座

是只今迄講習聴聞ニ出入仕候処ニ、宍甘宗仙養子ニ付、如斯

同日

一丹波守様去廿六日於江戸御卒去被成候ニ付、御穩便之御触有之、普請作事

ハ自今日三日相止、其外八十六日迄可為御穩便之旨、依之講習参校内講習

止

八日

一御人足与介・五介、御切米半俵ツ、御加増、都合三俵半被下之旨申付ル

十二月九日

一今日左之通樂人音楽稽古出勤日数御勘定場江書出ス

是例年来ル十三日之合樂切ニ仕廻書出シ候得共、右御穩便故、如斯

音楽稽古出勤日数

一四拾八日

見垣權少輔

一六拾六日

大守对馬

一四拾貳日

八木左衛門

一貳百九拾四日

武田太郎右衛門

一四拾七日

今村和泉

一貳百七拾七日

高原宇兵衛

一百四拾八日

佐々木主馬

一百拾八日

見垣弥介

右之日数相改申候、已上

正徳四年十二月九日

辻本文平

右之通相違無御座候、以上

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

十二月十七日

一諸生中へ廻状出、如例

各様来年も御参校可被成と思召候御方ハ、御名之下ニ御書付可被下候、若来年ハ御休可被成と思召候御方ハ、是又同前ニ御書付可被下候

一来年御参校可被成と思召候御方ハ、正月五日読初ニ而御座候、四ツ二始申候間、其前ニ御参校可被成候、尤毎之通孝経御持参可被成候

一服御座候御方ハ読初二ハ御遠慮可被成候、但槍遣初二ハ御勝手次第不苦候

一先日御穩便ニ付、読初拜之御檜古無御座候間、来ル廿三日朝飯後御参校御檜古可被成候、已上

十二月十七日

小原宗介

市浦善藏

諸生中

十二月十七日

一左之諸生五人来年廿歳ニ付、切紙遣

来年廿歳御成候ニ付、御法之通列座之札ヲ除申候、講釈御聴聞ニハ御勝手次第御参校可被成候、已上

十二月十七日

津田源之介 須加庄八郎 玉田勝之丞

富田仁三郎 梶浦伝吉

十八日

一煤掃今日有之如例、御足輕四人出ル

是例年十六日ニ有之処、右穩便ニ付如斯

十二月廿五日

一中室御煤掃、如例

同日

一晚奉行中寄合有之

同日

一古家喜右衛門ニ御米式俵被遣

同日

一左之通今度被仰出

一年々御物入多、御勝手御作廻難被成上、此度御手伝御用旁御作舞必至

と難被成ニ付、御家中御免相御借上被成候、御家中も可致迷惑と被思召候得共、外ニ可被成様無之故、右之通御免相御借上被成候ニ付、唯今迄人馬致所持候事ハ御奉公之義ニ候得共、人々勝手取続之ためニ候間、此

以後ハ常ニ召連候供之人數ヲ減シ可申候、四百九拾石以下之輩一僕或小身無足之輩ハ無僕にても不苦候、人ニより若党一人召連、又ハ槍為持申

度者ハ勝手次第、尤馬所持仕候義も可為勝手次第候、御用ニ而馬入用之節ハ、人馬御借可被成候、五百石ノ九百九拾石迄之輩ハ、若党一人、鎗

ハ可為勝手次第候、千石より式千九百石迄之輩ハ、小性若党二、三人勝手次第召連、挟箱ハ心次第三可為持、三千石以上之輩ハ、小性若党共

二、四人召連、挟箱ハ右同断

一年寄中ハ右ニ応シ供減シ召連可申候

一相組支配有之者ハ、其頭々常々勝手向内所之暮、尤召使之女可成程ハ減シ、儉約ニ仕、作法宜様ニ心ヲ付可申事

一自然寄合咄候共、只今迄よりハ猶々料理かるく可仕事

一音信贈答祝儀之取カハしたり共、親子兄弟舅舅之外ハ堅無用ニ可仕候、若心得違遣し候者有之候共、請申ましき事

一衣類之義御法之通弥堅相守可申事

一江戸御供御留守参候輩、召連候人之義も先年被仰出候通増シ不申様ニ可仕事、少々減シ候事ハ可為勝手次第候、御供立御留守番ニ参候輩も五百

石已下八道中騎馬牽せ候ニ不及候、尤江戸ニ而も所持不仕候而不苦候御用ニ而罷出候節ハ、人馬御借シ可被成候、并五百石以上之者茂御定之人

數之内少々不足之分ハ人御かし可被成候事

一只今迄不勝手之者拜借願候得ハ、其品ニより拜借被仰付候へ共、向後ハ拜借被仰付間敷候、併当年江戸ニ罷在候者、来年江戸江参候者ハ、急ニ

而作廻可致難儀候間、御借り銀にて百石ニ付七百目迄、御切米取ハ五百目迄拜借可被仰付候間、勝手作廻必至と迷惑仕候者共、銘々書付可差出

候、自今ハ不意ニ他所江被遣候者、勝手迷惑仕者、又ハ百石已下江戸御供御留守番ニ参候勝手迷惑仕者ハ、其品ニ随御借銀ニ而御借シ可被成候

事

十二月廿六日

一中室御鏡餅今日如例春之
(朱書)「両谷留帳如左

十二月廿七日

豊嶋喜左衛門・浅野忠左衛門・日笠喜三郎三人土鉄砲格被仰付之旨岡助
右衛門・笹岡次郎七郎申渡候、御礼之義者来正月三日年頭御礼之節申上
候旨二申聞候、此録恐是」

一当年参校之諸生凡九十四人

内入学七人

六之介子 西村長太郎 十一

善藏子 市浦一郎 八

宗仙子 六甘宗庵 十四

藤大夫子 冲 安次郎 十三

文之丞弟 丸山六之進 十二

丹波守様御家頼猪介子 雀部万之介 十一

治左衛門子 中村兵太郎 十

一当年坂口流弟子ニ成り竹舎江出候者如左

三月十七日 窪田藤十郎

四月七日 室 千次郎

右小生之内

二月十八日 服部与三右衛門

四月十三日 持田勝次郎

六月十八日 津川加左衛門

一次之小子凡十六人

内入学四人

御徒茂右衛門孫 那須吉太郎

同藤兵衛次男 和田三之丞

同 伊藤小八郎

同六郎大夫子

右之内退校

矢牧権蔵

岡村猪介

寺見菊次郎

市村八十郎

和田紋七郎

横山孫太郎

岡本玄意

片岡養益

十二月廿九日

一今晚校厨料理如例

正徳四甲午年

元旦

一中室御鏡餅卯之刻辻本文平開中室之扉、奉之 手伝 江田甚三郎

同日未之刻同人徹之

同日

一窪田藤十郎自今日学房ニ来居

一三ヶ日之間校厨料理如例

三日

一豊嶋喜左衛門・浅野忠左衛門・日笠喜三郎昨二日ニ出テ今朝登城仕、土鉄

砲之末座ニ而御礼申上ル

五日

一読初之儀如例

開戸捲簾褰帳

焚香 岡 助右衛門 俯伏

市浦善蔵 小原宗介

堂中再拜
唱贊
下座 奥
下座 奥
下座 奥
辻本文平

降帳垂簾闔戸
擊柝読出又
講孝経
授胙諸生

小原宗介
津田源六郎
和田弥兵衛
窪田道和
市浦善蔵
小原宗介

五人侍中室之左右、授之、堂中之諸生左右より一人宛詣中室、頂戴之、直ニ食堂飯台ニ着

五日
一於講堂諸生之間江出テ後見并胙頂戴指図共

江見仁兵衛 窪田友右衛門 須加庄八郎
東条吉之丞 山根又八 水野伝五郎
横山清内 江田甚三郎 柳川敬中
仁科道直

左之七人読初之節諸生之間江出読
内藤万清 渋谷文蔵 和田紋七郎
古家吉之丞 加藤熊太郎 草野善兵衛
同 善八郎 古家吉之丞
一見台ヲ出ス

五日
一四ツ前諸生群座
左座菊舎 後見 江見仁兵衛 須加庄八郎
山根又八 柳川敬中
仁科道直

右座竹舎 後見 窪田友右衛門 東条吉之丞
横山清内 江田甚三郎

一着座肝煎 左座 和田弥兵衛 右座 柳川敬中
一飲室 渋谷文蔵 和田紋七郎
一火廻り 加藤熊太郎 草野善八郎
一校門番 秋田弥四郎 御人足耆人
一玄関 御足輕耆人

五日
一参校諸生 左座ノ上 窪田道和

笹岡平次郎 大野三次郎 小原善大夫
渡辺十郎右衛門 向井十蔵 窪田藤十郎
伊藤忠五郎 坂野五郎吉 安藤助九郎
馬場小三郎 今中助太郎 角南太郎吉
広内権右衛門 杉山市之介 原 久之丞
駒田友省 芦屋五郎介 古沢助右衛門
笹岡善七郎 堀内源五兵衛 佐藤九三郎
安藤郷大夫 山田三四郎 伴 紋八郎
柴岡宗伯

五日
淵本八三郎 笹谷弥一郎 久保田門右衛門
荒木助五郎 安田源次郎 伊庭金之介
飯田幸之丞 船橋鉄之丞 野尻岩太郎
寺内円之丞 仙石文右衛門 鎌田友栄
六甘宗庵 上嶋吉次郎 沖 安次郎
村田加五郎 河崎又吉 丸山六之進
安部伝之介 沢 慶春
已上四十五人

一当年参校之諸生七十式人之内今日不参之諸生廿七人

田坂六十郎 門田松之丞 青地伝吉
杉山吉次郎 西尾是庵 渡辺小八郎

丹羽与一郎 岩野権之丞 坂井右衛門八

森嶋甚之介 西村長太郎 市浦一郎
内藤栄之介 大久保門三郎 尾関七次郎

本郷孫右衛門 先山権三郎 池田六之丞
室 千次郎 日置伴内 野々村辰之介

広田万次郎 千馬藤之丞 丹比平之介
雀部万之介 渡辺万三郎 中村兵太郎

五日
一槍遣初之儀如例

津田小源太 桜井八十郎 小崎彦市
小崎忠内 伊丹嘉平次 守田与介

上嶋浅右衛門 荒尾紋左衛門 大内藤蔵
瀧波与兵衛 梶川孫三郎 柴田定六郎

杉山市右衛門 伊丹久八郎 木崎九右衛門
淵本八三郎 佃 先五郎 笹谷弥一郎

山田藤蔵 笹岡平次郎 大野三次郎
窪田藤十郎 小原善大夫 須加庄八郎

伊藤忠五郎 初テ原 久之丞 長崎才次郎
和田弥兵衛

市浦善蔵 津田源六郎 森本才右衛門
坂口楨之介 大森勘次郎 江田甚三郎

古家吉之丞 加藤熊太郎 草野善八郎
五日
一左之五人当年廿歳ニ付、御法之通除列座

須加庄八郎 津田源之介 玉虫勝之丞
梶浦伝吉 富田仁三郎

同日

一左之小生十四人当年参校仕間敷旨断有之、除列座
岩田玄仲 石津次郎三郎 神野乙弥

岡 千介 藤岡六太郎 近藤七九郎
藤岡六次郎 水野半之丞 西浦清之丞

河原九平太 堀江庄七郎 大村平三郎
永田善次郎 井上藤次郎

同日
一左之小生三人御兒小性ニ被召出、除列座

森 門介 杉浦佐太郎 長谷川又八郎
正月五日

一次之小子

山本五郎七郎 難波吉之介 安井善五郎
那須吉太郎 矢牧権蔵 狩野佐次郎

町医友仙子
伊藤小八郎 狩野三之丞 牧嶋立閑

同日
一次之小子高尾正之介元服仕ニ付、退校

同日
一中之町医師兒玉玄賀子 [空白] 初テ入
是以後講釈聴聞ニ出ル筈也

同日
一晚学校領之名主礼ニ出、料理被下、如例

十日
一江文次郎退校、帰摂州

十二日
一勘定初有之、如例

十六日
一音楽稽古初、如例

十七日

一 參校初ル、如例

十八日

一 講釈初ル、如例

同日

一 槍稽古初ル、如例

正月十八日

一 合樂有之

十九日

一 詩經之内講習初ル、吸物酒出ル、如例

廿一日

一 梅舎之近思録内講習初ル、但申ノ刻

廿二日

一 室千次郎元服仕、入大生之列

廿三日

一 石丸平七郎子平兵衛講釈聴聞ニ初而出ル

且折々參校候て読書仕度由ニ付、此旨柳川敬中請込候様ニ申渡ス

同日

一 内匠頭様御家頼宮本六之介講釈聴聞ニ初而出ル

廿四日

一 笹岡次郎七郎・市浦善蔵・津田源六郎一昨廿四日閑谷江參、今日歸ル

是依読初執行仕也

同日

一 和田弥兵衛・窪田藤十郎・中嶋嘉七郎・通ノ加藤熊太郎、右同日ニ參、同

断ニ歸ル

正月廿七日

一 来五日積菜被仰出候ニ付、諸生中へ廻状出

来五日積菜ニ而御座候、麻上下御着シ、朝七ツ半ニ御揃被成候様御參校

可被成候、朝飯ハ於学校用意仕候、尤服御座候御方ハ御遠慮可被成候

一 積菜前又ハ奉公人出替りニ付、二日方七日迄内參校止申候、九日方内參

校可被成候、本參校ハ十七日方初申候、已上

正月廿七日

小原宗助
市浦善蔵

諸生中

同日

一 槍師匠中江廻状如左

来五日朝六時積菜ニ而御座候、被仰合麻上下御着シ、御勝手次第御出可

被成候、朝飯ハ於学校用意仕候、小生衆之外毎竹舎江御出之方江も御伝

可被下候、尤服御座候御方ハ御遠慮可被成候、已上

正月廿七日

小原宗助
市浦善蔵

荒尾紋左衛門

田中惣兵衛

糟谷源左衛門

守田与介

正月廿七日
一 小生衆寺内円之丞・野々村辰之介、十五歳ニ付、自今日坂口流槍稽古仕ル

廿八日

一 忍衆岸田小右衛門・瀬野佐左衛門講釈聴聞ニ初而出ル

正月廿九日

一 若原監物家来玉置平蔵内講習聴聞ニ初而出ル

二月三日

一 樂人金谷石見熨斗目損シ申ニ付、学校より申付、今日出来

同日

一 樂人装束積菜御用ニ付、御城御納戸より今日請取之

四日

一 奉行中參会有之

是積菜御用ニ付、如斯

同日

一晚内講習止、如例

五日

一上丁釈菜

二月上丁釈菜之儀

唱賛

辻本文平

開戸捲簾褰帳

市浦善蔵

啓櫓 御名代 池田七郎兵衛

小原宗介

コウハン

三方 キリノシ

長ノシ

献果

篠岡次郎七郎
岡 助右衛門

ヤキマンシウ

アリヘイトウ

三方 カヤ

キリノシ

長ノシ

参神再拝

七郎兵衛

酒注 次郎七郎

焚香再拝

七郎兵衛

捧盞 助右衛門

献酒

七郎兵衛

俯伏

告辞

七郎兵衛

市浦善蔵

辞神再拝

備前国主左少将源綱政朝臣使臣池田久隆謹修釈菜之礼敢告

市浦善蔵

徹酒果

小原宗介

津田源六郎

閉櫓

七郎兵衛

降帳垂簾闔戸

善蔵
宗介

礼畢

音楽雙調

開戸

捲簾

音取

啓櫓

武徳榮

但御果子ヲ献シ返ル時マテ

献酒

酒胡子

但御名代御告辞ニ御詣ノ時マテ

閉櫓

還城榮

但唐戸ヲ闔ル時マテ

胙頂戴

賀殿 急

笙

金谷石見

同

見垣権少輔

同

大守对馬

同

八木左衛門

同

佐々木主馬

同

今村和泉

同

武田太郎右衛門

同

見垣弥介

同

高原宇兵衛

同

杉村若狭

宇兵衛子

高原権三郎

二人ハ見習上下ニテ出座

講釈 論語 窪田道和

講釈終テ市浦善蔵・小原宗介侍中室之左右、胙ヲ授諸生、堂中之諸生左右

より一人宛詣中室、頂戴之、直ニ食堂飯台ニ着

一 参校之諸生

菅岡平次郎	大野三次郎	門田松之丞
小原善大夫	渡辺十郎右衛門	青地伝吉
向井十蔵	窪田藤十郎	西尾是庵
丹羽与一郎	岩野権之丞	安藤助九郎
今中助太郎	広内権右衛門	杉山市之介
原 久之丞	駒田友省	芦屋五郎介
古沢助右衛門	坂井右衛門八	菅岡善七郎
堀内源五兵衛	佐藤九三郎	山田三四郎
伴 紋八郎		
淵本八三郎	笹谷弥一郎	久保田門右衛門
荒木助五郎	大久保門三郎	尾関七次郎
安田源次郎	本郷孫右衛門	先山権三郎
伊庭金之介	池田六之丞	室 千次郎
船橋鉄之丞	野尻岩太郎	寺内円之丞
野々村辰之介	鎌田友栄	上嶋吉次郎
広田万次郎	沖 安次郎	村田加五郎
千馬藤之丞	河崎又吉	丸山六之進
安部伝之介	丹比平之介	雀部万之介
沢 慶春	已上五十三人	
不参之諸生十九人		
田坂六十郎	杉山吉次郎	伊藤忠五郎
坂野五郎吉	渡辺小八郎	馬場小三郎
角南太郎吉	安藤郷大夫	森嶋甚之介
西村長太郎	柴岡宗伯	市浦一郎
内藤栄之介	飯田幸之丞	日置伴内
仙石千右衛門	六甘宗庵	渡辺万三郎
中村兵太郎		
参拝衆		

池田 奎

加世藤三郎

富田甚之丞

桜井夫右衛門

須加庄八郎

和田孫三郎

正田孫左衛門

津田小源太

中村友達

大平権右衛門

安東半介

富田仁三郎

津田源之介

小崎彦市

伊丹久八郎

伊丹嘉平次

大鷹順古

土倉定六郎

桜井八十郎

杉山市右衛門

佃 浅右衛門

奥山三之進

守田与介

宮部源十郎

持田庄次郎

梶浦伝吉

薄田半六郎

南条七郎

中西幸直

宮本六之介

植村清九郎

浅海甚右衛門

永田清次郎

岡村佐次郎

芳賀甚右衛門

水野藤蔵

玉木平蔵

中嶋宅右衛門

龜山立閑

山口三降（三ツ降）

中尾（中ノ尾）

塩桶屋助六

一 積業役付

一六ツ前講堂着座より胙頂戴之時迄後見并胙頂戴ノ指図共

左 江見仁兵衛

右 窪田友右衛門

左 東条吉之丞

右 山根又八

一 菊舎左座之諸生

東条吉之丞

小原善之丞

後見 江見仁兵衛

窪田友右衛門

山根又八

一 松舎右座之諸生

須加庄八郎

窪田友右衛門

一 着座肝煎

右 柳川敬中

左 和田弥兵衛

一 見台ヲ出入

一 輔仁軒 安井奎兵衛

古家喜右衛門

同

同

同

則武丑之右衛門

加藤熊太郎

草野善八郎

御手水道具火鉢たはこ盆手燭硯料紙請込

古家吉之丞

古家吉之丞

同

同

同

同

同

同

一惣通料理方

御茶 丸山正悦
御料理方 町料理人助九郎

不参

秋田五兵衛

野田七兵衛

ときや町弥兵衛

御人足三人

一椀方 次田忠兵衛

秋田弥四郎

わん方七介

御廟ノ長大夫 六介

御門ノ関右衛門

一食次肝煎 土佐屋六郎兵衛

一飲室

仁科道直

一食堂内之通

食次菓子共 辻本文平

同断

同断 江田甚三郎

同断

同断 大森勘次郎

同断

同断 渋谷文蔵

同断

同断 岡本玄意

同断

同断 汁次湯次共 山本五郎七

同断

同断 難波吉之介

同断

同断 那須吉太郎

同断

同断 狩野三之丞

同断

同断 狩野佐次郎

同断

一食堂南縁側

草野善八郎

同断

食次湯次共

笹岡次郎七家来

同断

岡助右衛門家来

千原助七

牧野権兵衛

小松や 又一

茶屋 孫四郎

小倉屋 善四郎

一菓子方付配方肝煎

和田弥兵衛

森本才右衛門

中嶋嘉七郎

平賀安益

二月九日

惣人数貳百貳人

一内参校初ル

池田七郎兵衛家来小性分貳人

魚屋・八百屋三人

小堀彦左衛門預小頭壹人

須加庄八郎

長崎才次郎

筒井久米

一内外膳肝煎酌共

坂口楨之介

窪田友右衛門

山田藤蔵

東条吉之丞

山根又八

小原善之丞

水野伝五郎

内藤万清

明田佐次右衛門

今井伝三郎

新庄与一右衛門

草野善兵衛

渋谷文蔵

富山源太郎

草野善八郎

富山市右衛門

御人足壹人

次田忠兵衛

山本五郎七

一燭剪并徹燭共

難波吉之介

渋谷文蔵

若林猪兵衛

和田紋七郎

洪谷千右衛門

食堂 新庄作大夫

御足輕貳人

校門 丸山次郎助

同 貳人

校門 小橋夫兵衛

同 貳人

一火廻

同 貳人

一御門

同 貳人

一校門

同 貳人

一玄関

同 貳人

小堀彦左衛門預小頭壹人

池田七郎兵衛家来小性分貳人

魚屋・八百屋三人

小堀彦左衛門預小頭壹人

池田七郎兵衛家来小性分貳人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

魚屋・八百屋三人

十二日

一池田六之丞元服仕、入大生之列

十八日

一保野忠八郎講釈聴聞初而出ル

同日

一町医菅玄庵弟子川西玄正右同断

廿日

一山根又八銀七枚二式人扶持被下之旨申渡

是和田弥兵衛同事二相勤候様ニ申付ル

廿七日

一左之小生四人坂口流槍稽古仕

杉山市之介 船橋鉄之丞 馬場小三郎

伊庭金之介

是依十五歳也

三月二日

一参校止、如例

一晚門田市郎兵衛・岡助右衛門・笹岡次郎七郎令参会食堂、左之楽人九人并

見垣近江守ニ申渡、自今楽人中五人扶持宛被下之旨、今日年寄中被仰渡条

申渡

見垣権少輔 金谷石見 大守对馬

八木左衛門 高原宇兵衛 佐々木主馬

今村和泉 武田太郎右衛門 見垣弥介

但左衛門儀ハ遠方ニ付、呼遣今日ハ被仰渡未承候

四日

一参校初ル

但例年自今日小生衆并師匠役人中へ昼飯出候処、三步通上り之御簡略ニ

付、今日ハ先不出候

三月六日

一古家喜右衛門・同吉之丞・草野善八郎、今日和意谷江参

是近日依御墓祭有之也

同日

一河口多左衛門子仲右衛門初而入学、九歳、右座

七日

一岡助右衛門・小原宗介・津田源六郎、今日和意谷江参

是依御墓祭御用也

同日

一善太郎様御家頼野村庄兵衛子三次郎初テ入学、十歳、右座

十一日

一岡助右衛門・小原宗介・津田源六郎、從閑谷今日帰ル

是和意谷方和気郡学校領ヲ廻り直ニ閑谷江参、如斯

三月十一日

一古家喜右衛門・同吉之丞・草野善八郎右同断ニ帰ル

十二日

一左之通御触有之

御大名方御小身之御方ニ而茂御通之節、又ハ御止宿御昼休之節、無礼無

之様ニト之儀、度々御触ニ候得共、猶以此節御通之御衆多時分ニ而候間、

参懸り又ハ横町く、方出懸り候ハ、扨居申御供通り過候而見合罷通り、

弥無礼無之様ニ銘々家来末々迄も猶又念入申付候様ニ可申触旨、御年寄

中被仰渡候間、御支配有之御方へ、其面々へ茂移候様ニ御仲間可被仰伝

候、已上

三月十日 池田七郎兵衛

十二日

一江見仁兵衛子兵藏初而入学、八歳、左座

三月廿二日

一自今日諸生中江昼飯出ル

廿七日

一岩野権之丞自今日坂口流槍稽古仕ル

四月十九日

一若井林庵講釈聴聞二初而出ル、磯辺兵介同道

備後国品治郡服部永谷村之医師若井寿三子也、伊木将監殿家来佐野多吉

二寄宿仕、時々參校仕度願二付、任其意如斯、但読書ハ横山清内受込也

廿三日

一若殿様於江戸御煩被成、依御家中当廿日方於酒折宮御祈禱有之ニ付、校内

御徒格之者も御祈禱仕候儀可為勝手次第旨、奉行中被申渡、閑谷江も飛脚

差遣、左之人数今朝辰之中刻御祈禱仕

惣名代社参

御廟 丸山次郎介

学校 辻本文平

目録之次第

閑谷付 豊崎喜左衛門

浅野忠左衛門

日笠喜三郎

御廟付 新庄作大夫

若林猪兵衛

渋谷千右衛門

丸山次郎介

山本又兵衛

小橋夫兵衛

学校付 安井奎兵衛

辻本文平

横山清内

古家喜右衛門

江田甚三郎

柳川敬中

四月廿三日

一瓜生武左衛門再參校講釈聴聞

廿四日

一右御祈禱三ヶ所之御札三ツ、今晚御呉服蔵江左之三人持参仕、今中源介へ
渡又

日笠喜三郎

丸山次郎介

辻本文平

廿六日

一愛知文介次江初而入学、十一歳

五月朔日

一和意谷閑谷御廟学校付之者、近日御能拜見被仰付候旨、今日岡助右衛門・

笹岡次郎七郎申渡又

五月二日

一和田次郎大夫子伝次郎次之小子並二初而入学、十一歳

廿三日

一岡清左衛門子千介再參校講釈聴聞

六月三日

一酒折宮祠官岡越後子竹之介・同宮久山民部子定右衛門講釈聴聞初而出

是兼而柳川敬中引請、読書ニ參校、自今弥其通ニ願申ニ付、任其意、如

此

八日

一講堂之講釈止

是依土用入候也

九日

一内參校初、如例

右同断

同日

一居相吉太郎拜領家江今日移ル

十一日

一近思録之内講習止、如例

六月十六日

一 從京都直シ筥下ル

是學校筥式管閑谷筥老管以上三管損シ申ニ付、三宅誠庵江申遣シ、筥細
工人ニ申直出来ニ付、今日到着也、直料老管ニ付銀老枚宛

廿日

一 自今日御書物虫干初ル

山根又八

窪田藤十郎

内藤万清

須加庄八郎

向井十蔵

笹岡平次郎

東条吉之丞

小原善大夫

横山清内

柳川敬中

長崎才次郎

中嶋嘉七郎

森 伯休

廿三日

一 虫干昨日迄ニ而相濟、今日改仕ル、見届安井李兵衛出ル

廿七日

一 參校初ル

六月廿三日

一 講堂講釈初ル

七月二日

一 丸山六之進改大口六之進

是大口六之介名跡依被仰付候也

三日

一 左之両人御長屋御借被成

居相吉太郎跡へ 柳川敬中

敬中跡へ 和田弥兵衛

四日

一 門田松之丞除列座之札

是於江戸依病死仕也

一 柳川敬中妻願ニ付、如左

富田町米屋文右衛門借屋ニ居申権兵衛姉私妻ニ仕度候、此趣御奉行中様

江被仰達、願之通被仰付被下候様ニ奉頼候、已上

七月三日

古家喜右衛門殿

柳川敬中

七月七日

一 右敬中願当四日ニ勝手次第申渡、依之御町奉行へ左之通申遣又

以手紙得御意候、富田町米屋文右衛門借家ニ居申権兵衛姉、学校御扶持

人柳川敬中妻ニ呼取申度段、承届候、向後宗門御改敬中同事從学校可申

付候間、町並帳面外シ申様ニ被仰付可被下候、為其如斯御座候、已上

七月六日

岡 助右衛門

笹岡次郎七郎

松浦覺之丞様

返書

富田町米屋文右衛門借家権兵衛姉、学校御扶持人柳川敬中妻ニ呼取申度

段、御聞届候由、向後宗門御改才從学校被仰付候間、町方帳面差除候様

ニ可申付之旨、致承知候、其通申付候、已上

午七月七日

松浦覺之丞

岡 助右衛門様

笹岡次郎七郎様

七月十三日

一 自今夜校中夜行之制、如例

同日

一 昨今明參校講釈内講習共止、如例

十七日

一 參校初ル

同日

一 參校日昼飯自今日止

是今月中出候処、稍日短ニ成候間、此儀可然ニ付、如斯

十九日

一 今中助太郎元服仕、入大生之列

廿三日

一 柳川敬中居相吉太郎跡御長屋へ移ル

八月九日

一 笹岡次郎七郎東裏之菜園壹畝式歩、只今迄年貢地ニ而有之処、自今無年貢

二 相定候旨、今日於御評定所池田七郎兵衛右衛門ニ被仰渡

十三日

一 谷田弥三郎講釈聴聞ニ初而出ル

十五日

一 月見之詩会有之、如例

十六日

一 梅舎之内講習近思録今晚講終ル

十七日

一 音楽下稽古有之

是明十八日依御時祭也

十八日

一 菅玄庵弟子三宅玄仲講釈聴聞ニ初而出ル

廿一日

一 笹岡次郎七郎・市浦善蔵・津田源六郎・山根又八・古家喜右衛門・通加藤

熊太郎・富山源太郎、今日閑谷江参

是明後廿三日依積菜也

八月廿一日

一 辻本文平閑谷江参、如例

廿二日

一 山口三四郎改沢原三四郎

是沢原勘兵衛依養子参候也

同日

一 伴紋八郎自今参校仕間敷断有之ニ付、除列座之札

是主膳様江依被召出候也

廿五日

一 笹岡次郎七郎・市浦善蔵・山根又八・古家喜右衛門、今日自閑谷帰ル

廿六日

一 安井弁兵衛・古家喜右衛門、今日御能拜見、御祝儀之酒菓被下

同日

一 梅舎之内講習自今晚大学或問講初

廿七日

一 辻本文平今日從閑谷帰ル

是前々ハ人足壹人相渡り召連参、逗留中召使、帰候時又召連帰申候、右

何茂壹人ニ壹人宛相渡り申候、今度山根又八召連候人之儀願候処、彼ノ

地へ参候時、又ハ帰り候時、壹人ツ、召連、逗留中ハ又八・喜右衛門・

文平三人相ニ壹人足留置、残式人之人足ハ帰シ、罷歸候時ハ、閑谷者

を召連帰り候様ニ笹岡次郎七郎申渡、其通ニ成ル

廿八日

一 宗門御改判形有之

廿九日

一 高取九大夫昨廿八日ニ出、今日帰ル

是宗門判形ニ付、如斯

晦日

一 日笠喜三郎一昨廿八日出、今日帰ル

右同断

同日

一 辻本文平今日御能拜見御祝儀之御酒菓被下

九月三日

一 和田弥兵衛御かし候御長屋へ今日移ル

同日

一 横山清内・江田甚三郎・柳川敬中御能拜見御酒菓被下

同日

一 豊嶋喜左衛門去月廿九日ニ出、今日帰

是宗門判形ニ出、用事有之ニ付、如此

四日

一安井李兵衛勤番之儀、令免許之旨、奉行中今晚申渡又
七日

一浅野忠左衛門去月晦日二出、今日歸ル

是宗門判形二出、用事有之三付、逗留仕、如此

八日

一講釈止、如例

十四日

一参校内講習共止

是内匠頭様若君梶之介様御死去被成候二付、昨今依御穩便也

十五日

一江見仁兵衛年久学校へ出勤、諸生習礼之師仕候条、御年寄中被聞及、依之

自今御城御番并役御免被成候旨、今日於御番頭丹羽七郎左衛門宅七郎左衛

門被仰渡

十八日

一土方千吉再参校講釈聴聞

廿五日

一菊花之詩会有之、如例

廿八日

一浅野吉右衛門校厨下番人次田忠兵衛・草野善兵衛・秋田弥四郎・野田七兵

衛並ニ被召抱、切米七俵式人扶持被下之旨、岡助右衛門申付旨安井李兵衛

申渡又

是只今迄笹岡次郎七郎家来也

廿九日

一同人自今日校厨勤番太鼓番共勤ル

次田忠兵衛

草野善兵衛

秋田弥四郎

野田七兵衛

浅野吉右衛門

九月廿九日

一左之諸生四人坂口流槍稽古仕三付、追々竹舎江参会仕ル

七月廿八日方

高島藤藏

八月三日方 宮城庄介

九月十八日方 日置伴内

同 廿日方 今西勘介

十月朔日

一浅野吉左衛門校厨御賄野田七兵衛方請取、自今朝相勤ル

六日

一内参校止

是今日少将様依被遊御発駕也

七日

一少将様御発駕来ル十一日迄相延ル

是依御不快也

同日

一丸山九右衛門自今日小生衆槍打太刀二出ル

十月十四日

一参校并内講習共止

是於台宗寺依文昭院様御法事有之也

十五日

一学校下役人御廟付閑谷和意谷已上三ヶ所之者共、於円務院之山王今酉之刻

御祈禱仕ル

是少将様就御不快重、依御家中御祈禱仕也

同日

一校厨下番人仲間之者共今度八左之通於右同所御祈禱仕ル、但戌ノ刻

秋田五兵衛

次田忠兵衛

草野善兵衛

野田七兵衛

秋田弥四郎

浅野吉右衛門

同日

一豊嶋喜左衛門・丹木仁藏今晚出ル

是仁藏儀間違之事有之三付、先頃方追込候処、今度就令免許候、喜左衛

門召連出ル

十月十六日

一晚大学或問之内講習止

是依御不快重也

同日

一中嶋嘉七郎退校

是身上依落着有之由也

同日

一浅野忠左衛門今日出ル

是少将様為窺御機嫌如斯

十八日

一合樂止

是依御不快重也

同日

一丹木仁藏今日和意谷江帰ル

十九日

一今晚之内講習方不吹貝

廿三日

一講堂之無講釈

廿四日

一三宅誠庵并家来三人自今夕来居

是為窺少将様御機嫌如斯

十月廿七日

一今日之參校無読書、唯習字習礼而已ニテ、四ツ打、小生二、三人ツ、退出

有之

是依御様躰甚重也

廿八日

一講堂之講釈止

右同断

同日

一校中諸事物静ニ可仕旨番仲間相議

同日

一豊嶋喜左衛門・浅野忠左衛門出ル

是為窺御機嫌如斯

廿九日

一少将様今朝六ツ前ニ被遊御逝去

同日

一自今日校厨仕出シ精進ニ成ル

晦日

一豊嶋喜左衛門・浅野忠左衛門今日帰ル

十一月二日

一日笠喜三郎去晦日ニ出、今日帰ル

是為御悔如斯

十一月九日

一自今日石盤ニ而紙打

是町方諸職人依細工御免也

十八日

一今日辰之刻御出棺ニ付、左之五人行儀ニ出ル

円務院表門ノ下 安井李兵衛

御足輕式人

西之御丸之下

辻本文平

下方寛兵衛角

御足輕式人

周匝屋敷之前

古家喜右衛門

土肥右近前

御足輕式人

廿四日

一左之通之子共ニ麻上下沓具ツ、被遣

古家吉之丞 加藤熊太郎 秋田弥四郎
草野善八郎

右者他国方之名代焼香之使者到着之節、通ニ罷出候様ニ被申付、如斯

十一月廿六日

一古家吉之丞・秋田弥四郎自今晚大黒町三嶋屋へ参

是戸田采女殿方名代御焼香使者到着ニ付、通ニ相詰ル

廿七日

一加藤熊太郎・草野善八郎小橋町富屋へ参

是柳原式部大輔様方御名代焼香之御使者到着ニ付、右同断ニ相詰

廿八日

一古家吉之丞・秋田弥四郎西大寺町丸尾屋へ相詰

是因州御名代御焼香使者依池田弾正到着也

十二月十二日

一右通之子共四人ニ金子式步ツ、被遣之

同日

一木村休伯今日退校

是明春依上京仕候也

十三日

一白神見俊今日退校

右同断

十九日

一校厨料理自今日魚類出之

同日

一校中下役人并学房衆今日さかやき仕ル

是昨十八日迄ニ而曹源寺様五十日ニ付、今日御家中一統ニさかやき依被

仰付也

同日

一晚三宅誠庵江料理出之

三宅誠庵

笹岡次郎七郎

岡

助右衛門

窪田道和 於輔仁軒出之

廿一日

一煤掃有之、如例、御足輕四人出ル

十二月廿一日

一三宅誠庵今日帰京

廿五日

一中室御煤掃、如例

廿六日

一同所御鏡餅舂之、如例

同日

一江見仁兵衛江金子式百疋被遣之

是毎歳盆前ニ銀壹枚・歳暮ニ金子四百疋ツ、被遣之候処、学校習礼之師

相勤候之由ニ付、御城御番并役御免被成候条、当秋被仰渡候ニ付、如斯

同日

一諸生中江今日廻状出ス

是殿様御家督之御内意依有之由也

各様来年茂御参校可被成と思召候御方ハ、御名之下ニ御書付可被下候、

若来年ハ御休可被成と思召候御方ハ、是又同前ニ御書付可被下候

一来年御参校可被成と思召候御方ハ、正月五日読初ニ而御座候、四ツニ初

り申候間、其前ニ御参校可被成候、尤毎之通孝経御持参可被成候、已上

十二月廿六日

小原宗介

諸生中

同日

一槍師匠中江廻状如左、但坂口勘左衛門へハ書状如例

来正月五日学校例年之通読初ニ而、槍遣初是又例之通御座候、朝四ツ前

ニ被仰合御参校可被成候、小生衆之外毎御稽古ニ御出被成候御方へも御

伝可被下候、已上

十二月廿六日

小原宗介

市浦善蔵
荒尾紋左衛門 田中惣兵衛
上嶋浅右衛門
守田与介 伊丹久八郎
丸山九右衛門

但

糴谷源左衛門 平井安兵衛
梶川孫三郎

此三人ハ在江戸ニ付、除之

十二月廿六日

一來年廿歳ニ御成被成候間、御法之通除列座之札申候、講釈御聴聞ニハ御勝
手次第御參校可被成候、已上

月 日

兩人書判

同日

一晚奉行中寄合有之

是來読初之儀ニ付、如斯

廿八日

一從江戸村上又左衛門御差上シ被遊、左之通被仰渡有之

去ル十八日殿様御老中松平紀井守殿へ松平河内様御同道ニ而御出被遊、

御家督無御相違被為仰付、御満足ニ被思召候間、御家中末々迄此旨申聞、

安堵為仕候様ニと御意之由被仰渡有之ニ付、御家中末々迄も頭々へ御祝

参上仕ル

十二月廿八日

一室千次郎改松田千次郎

是善太郎様御家來依松田孫七郎養子ニ参候也

廿九日

一今朝校厨精進

一晚校厨料理、如例

うを

かき

膾 大こん

汁 おろし大こん

くりせう

やきたうふ

烹物 かつを めし

からし

かうの物

酒三献

一当年參校之諸生凡七十三人

内入学三人

善太郎様御家來庄兵衛子

多左衛門子

仁兵衛子

於江戸病死

野村三次郎

河口仲右衛門

江見兵蔵

門田松之丞

一次之小子十一人

内入学三人

城代組

御小人帳付次郎大夫子

愛知文介

和田伝次郎

正徳五乙未歳

元旦

一中室御鏡餅卯之刻辻本文平奉之

但殿様御喪中ニ付不開扉而籠外ニ奉之、此旨岡助右衛門・笹岡次郎七郎

文平ニ申渡ス

手伝 横山清内

同日未之刻同人徹之

一三ヶ日之間校厨料理、如例

元朝

田作 たれミそ 餅 いも

納豆 雑煮 大こん 牛房 やきたうふ

香物 するめ こんふ

引替
 膾 田作 汁 つみ入 牛房
 大こん 大こん しい茸 な
 やきたうふ
 烹物 大かつを めし
 からし
 香之物
 鯉 いろ酒
 引而さしミ せうか
 けん九年母
 吸物 ふな わりさん椒 酒三献
 同晩
 膾 田作 ミそ
 大こん 汁 かき ほしな からし
 烹物 糸こんふ
 はまくりぬき身 めし
 香之物
 引而
 焼物 ふり 酒三献

二日之朝
 雑烹右同断 但立ミそ
 すまし
 膾 た作 大こん 汁 白魚 な
 烹物 つくねいも こぼう めし
 香物
 引而
 焼物 せい せうか
 吸物 はまくり 酒三献

同晩
 膾 田作 大こん 汁 はまくり 大こん
 烹物 うを めし
 香之物
 引而
 焼物 ふり 酒三献
 三日之朝
 雑烹右同断
 膾 田作 しゆみせん
 大こん 汁 な 山のいも からし
 やきたうふ
 烹物 大牛房 めし
 平かつを
 香之物
 引而
 焼物 いな せうか
 吸物 塩鯛 酒三献
 同晩
 膾 田作 大こん 汁 雉子
 烹物 つみ入 しい茸 な
 やきたうふ 黒いも めし
 香之物
 引而
 焼物 ふり 酒三献
 正月四日

一 豊嶋喜左衛門・日笠喜三郎・高取九大夫今日出ル

是年頭之礼、且旧冬御悦旁如斯

五日

一 読初有之

但開戸・焚香再拜・堂中再拜・昨頂戴之儀無之、依御服中也

中室部ヲハ取之、障子如常、襖幕ヲ不張、左右縁側之白緋之幕張之、

講堂北之障子ヲハ取之、右之外諸事如例

擊柝読出ス

和田弥兵衛

講孝経

窪田道和

於講堂諸生之間江出テ後見

江見仁兵衛

須加庄八郎

東条吉之丞

笹岡平次郎

山根又八郎

水野彦五郎

横山清内

江田甚三郎

不参

柳川敬中

仁科道直

左之七人読初之節諸生之間江出読

渋谷文蔵

和田紋七郎

古家吉之丞

加藤熊太郎

草野善兵衛

同 善八郎

一見台ヲ出

古家吉之丞

一四ツ前諸生群座

左座菊舎後見

江見仁兵衛

須加庄八郎

山根又八

柳川敬中

仁科道直

右座竹舎後見

東条吉之丞

笹岡平次郎

横山清内

江田甚三郎

森本才右衛門

一 着座肝煎

左座

和田弥兵衛

右座

柳川敬中

一 飲室

渋谷文蔵

和田紋七郎

一 火廻り

加藤熊太郎

草野善八郎

一 校門番人

野田七兵衛

人足老人

玄閑

同 老人

正月五日

一 参校之諸生

左座之上

窪田道和

小原善大夫

青地伝吉

向井十蔵

窪田藤十郎

杉山吉次郎

伊藤忠五郎

今中助太郎

岩野権之丞

馬場小三郎

広内権右衛門

杉山市之介

原 久之丞

芦屋五郎介

古沢助右衛門

坂井右衛門八

笹岡善七郎

堀内源五兵衛

佐藤惣吉

安藤有吉

沢原三四郎

西村長太郎

柴岡宗伯

市浦市郎

江見兵蔵

右座

安田源次郎

本郷孫右衛門

池田六之丞

松田千次郎

先山権三郎

伊庭金之介

船橋鉄之丞

寺内円之丞

野々村辰之介

上嶋吉次郎

広田万次郎

沖 安次郎

村田加五郎

千馬藤之丞

河崎又吉

安部伝之介

丹比平之介

雀部万之介

沢 慶春

中村兵太郎

野村三次郎

以上四十五人

正月五日

一 当年参校之凡五十七人、内左之諸生十二人今日不参

渡辺十郎右衛門

西尾是庵

渡辺小八郎

又後二

初而

丹羽与一郎

安藤助九郎

駒田友省

江口甚三郎

柳川敬中

大久保門三郎

尾関七次郎

飯田幸之丞

以上四十四人

日置伴内

大口六之進

河口仲右衛門

正月五日

正月五日

一左之諸生八人当年廿歳二付、御法之通除列座之札

一 加世藤三郎

岡 猪兵衛

和田孫三郎

笹岡平次郎

大野三次郎

田坂与兵衛

中村友達

宮部源十郎

南条七郎

淵本八三郎

笹谷弥一郎

久保田門右衛門

富田仁三郎

土方千吉

岡 千介

荒木助五郎

内藤栄之介

宮本六之介

大森十左衛門

同 庄吉

同日

豊嶋喜左衛門

日笠喜三郎

永田清次郎

一左之小生七人当年参校仕間敷旨断有之、除列座之札

岡 竹之介

久山定右衛門

坂野五郎吉

森嶋甚之介

鎌田友栄

正月五日

渡辺万三郎

六甘宗庵

角南太郎吉

一槍遣初諸生如左

仙石文右衛門

服部与三右衛門

山口藤蔵

丸山九右衛門

正月五日

須加庄八郎

笹岡平次郎

笹谷弥一郎

一次之小子難波吉之介・山本五郎七郎、元服仕二付、除札

村上喜六郎

伊丹久八郎

荒尾紋左衛門

同日

上嶋浅右衛門

小崎右内

伊丹嘉平次

一次之小子九人

持田庄次郎

窪田藤十郎

杉山吉次郎

安井善五郎

那須吉太郎

矢牧権蔵

伊藤忠五郎

大内藤蔵

木崎九右衛門

狩野三之丞

伊藤小八郎

狩野佐太郎

佃 浅右衛門

桜井八十郎

津田源之介

愛知文介

牧嶋立閑

馬場小三郎

原 久之丞

伊庭金之介

同日

寺内円之丞

船橋鉄之丞

杉山市之介

一山脇源大夫子七郎初而入学、十三歳、右座

岩野権之丞

野々村辰之介

小原善大夫

同日

初而

一市浦善蔵次男二郎右同断、八歳 左座

山羽佐平次

浦上市三郎

瀧波与兵衛

一御鏡餅頂戴諸生凡百廿七人

中西幸直

大森勘次郎

和田弥兵衛

田作

小豆

坂口楨之介

森本才右衛門

坂口勘左衛門

納豆

雑煮 さとう

右相濟

香之物

岡 助右衛門

市浦善蔵

津田源六郎

ミソ

吸物 ふな わり山椒

酒三献

右之内

笹岡次郎七郎 岡 助右衛門

市浦善蔵 小原宗介

豊嶋喜左衛門 日笠喜三郎

下役人

安井李兵衛 辻本文平

古家喜右衛門 江口甚三郎

渋谷文蔵 和田紋七郎

富山市右衛門 古家吉之丞

次田忠兵衛 草野善兵衛

秋田弥四郎 浅野吉右衛門

富山源太郎 御門番関右衛門

学校人足五人 和意谷閑谷式人

和田弥兵衛家来壱人

正月五日

一晚学校領名主料理被下、如例

正月七日

一今朝校厨料理、如例

田作

納豆

香物

引替

焼物

酒三献

八日

一日笠喜三郎・高取九大夫今日帰ル

九日

一浅野忠左衛門為年始之礼今日出ル

十一日

一勘定初有之、如例

同日

一丹木仁蔵当八日ニ出テ今日帰ル

十二日

一豊嶋喜左衛門今日帰ル

十五日

一今朝校厨料理、如例

田作

納豆

香物

引替

焼物

煮物

大かつを

からし

引而香之物

酒三献

正月十五日

一殿様当三日年始之御礼首尾能被仰上候之旨被仰渡有之

同日

一浅野忠左衛門今日帰ル

十六日

一音楽稽古初

是音楽稽古初候而不苦哉之旨、御年寄中江相窺之候処、毎之通初候て可然旨被仰渡、依有之也

同日

- 一 笹岡次郎七郎・小原宗介・津田源六郎、閑谷江参ル
十七日
一 参校初ル
正月十八日
一 講堂孟子講釈初ル、講者窪田道和
但四ツ前吹貝
同日
一 大守肥後弟源之進講釈聴聞ニ初テ出
同日
一 檜稽古初ル
廿一日
一 笹岡次郎七郎・小原宗介・津田源六郎、今日從閑谷歸ル
廿二日
一 斎藤仁左衛門子兵之介初テ入学、十一歳、右座
廿三日
一 久山長介子平九郎講釈聴聞ニ初テ出ル
廿四日
一 内講習詩経初ル、吸物酒出ル、如例
廿五日
一 合衆有之、如例
是十八日式日ニ候之處、岡助右衛門病中、笹岡次郎七郎閑谷江参居申ニ付、
如斯
廿六日
一 内講習大学或問初ル
二月二日
一 参校止
但内参校有之、如例
四日
一 南条七郎内講習之詩経初テ講之
- 同日
一 今中助太郎参校日ニ出、小生読初之助ケ仕ル
六日
一 今日内参校止
是天樹院様五十年忌於養林寺御法事有之、今日依御忌日也
九日
一 今日内参校止
是曹源寺様百ケ日ニ付、御法事依有之也
十七日
一 岡助右衛門自今日出勤
是妻先日病死仕、忌明申ニ付、今日より出ル
二月十七日
一 井上庄介子藤次郎再参校、十五歳、右座
十八日
一 合衆有之
同日
一 草野善兵衛姉町医岡本宗庵妻ニ遣シ申ニ付、当十三日ニ御町奉行江遣状如
左、且又覺之丞返書ニハ勝手次第ニ可申付之旨申来ル
小原町医師岡本宗庵と申者之妻ニ、校内ニ居申草野善兵衛姉遣申度旨承
届、右善兵衛姉宗旨只今迄真言宗御野郡南方村歸命院檀那ニ而御座候、
向後宗門御改町並ニ被仰付可被下候、為其如斯御座候
未二月十三日
笹岡次郎七郎
松浦寛之丞様
二月十九日
一 野田七兵衛式俵御加増、已上九俵被下候旨申付ル
同日
一 御人足七介半俵御加増、已上四俵半被遣旨申付ル
廿一日
一 御衆人見垣権少輔・同弥介両人共、内証にて楽稽古差扣罷在候処、今日出

勤候様ニ岡助右衛門・笹岡次郎七郎・辻本文平ニ被申渡

是当十八日式日之合衆兄弟共忘却仕不参、迷惑至極ニ奉存候間、廿日之稽古ニハ差扣可罷在旨、十九日ニ文平迄申談候条、文平乃次郎七郎江申達候処、此節御日出事之時節ニ候へハ、遠慮ケ間敷事如何ニ有之候得共、先内証ニ而差扣居申候へ、相役助右衛門ニ致対談、追而文平迄可申聞旨今日不及差扣候由ニ付、如斯

二月廿二日

一富田弥左衛門初而入学、十五歳、右座

廿三日

一木梨宗貞講釈聴聞初而出ル

同日

一中尾貞順弟子尾坂貞円右同断

同日

一岡猪兵衛子松次郎初而入学、十歳

是非参校諸生之列、但小生ハ三八ニ出入不例候得共、猪兵衛儀数年出入

仕ニ付、右之旨就願有之、勝手次第ニ出入可有之旨申渡、如斯

廿八日

一衆人中稽古出勤日并壁書如左相改ル

音楽稽古之事

三日 八日 十三日 十六日 十八日 廿三日 二八日

但初り四ツ半時

右者社用日之外、無間断右之時刻ニ出座有之、各被相揃、衆数五ツ宛ニ反或ハ三反同管調子拍節委曲互ニ吟味候テ可有稽古候、尤出勤之有無ハ辻本文平帳ニ為記候、但近所若キ衆中ハ右稽古日之外たり共被申合出勤可有之事

一毎月十八日午之刻より合衆可令聴聞事

一毎月八日各蘭取ニ而衆一宛調子拍節之長短共吟味候テ、独吹可有之事

正徳五年二月 日

三月二日

一参校止、如例

四日

一自今日諸生中并不残昼飯出ル、如例

同日

一山口三隆自今日学房ニ来居、朝夕喰捨被下之旨申渡ス

六日

一安井弁兵衛・古家吉之丞・草野善八郎、今日和意谷参

是御墓祭依有之也

七日

一笹岡次郎七郎・市浦善蔵・津田源六郎、今日和意谷江参

右同断

八日

一栄光院様来ル十八日御屋敷江御入、其御次テ御観校可被成由ニ付、校中処

ニ掃除申付ル

十日

一笹岡次郎七郎・市浦善蔵・津田源六郎・安井弁兵衛・通之子共式人、今日

閑谷方歸ル

是御墓祭相済、夫方閑谷江参、如斯

三月十六日

一河瀬源兵衛来り校中処ニ見聞仕ル

是明後十八日御屋敷江栄光院様御越ニ付、依被成観校候也

十七日

一大内弥五兵衛三男権蔵初而入学、十歳、右座

十八日

一合衆有之

同日

一晚栄光院様就被成観校、如左申渡ス

御門 堅 江田甚三郎

泮橋 辻本文平

馬場口 横山清内

菊舎東 古家喜右衛門

校厨北 安井李兵衛

校厨 柳川敬中

松舎次之間ニ台子ヲ仕掛、煎茶入御たはこ盆設置、雨天ニ付御屋敷より

馬場柵門口迄延敷、柵門内へハ学校より敷之

但台子ハ町会所る借り用

三月廿六日

一從江戸御目附衆明廿七日御到着ニ付、如左御触有之

一此度御目附衆御家来迄万一分ケ間敷事仕候者、理非之無御僉儀、此方之者、急度可被仰付候

一御目附衆御越之義ニ候へ者、御内曲輪江末々迄用事有之者ハ格別、北御門内入、東御門へ出、又ハ西御門内入、南御門江出候、往来迄之者ハ男女共通り申間敷事

附五月中見物ニ男女共御内曲輪へ参候義可為無用候

一御目附衆御通之節ハ御先私之者有之候、火事之節ハ出火之様子次第、東八国清寺、西ハ養林寺、御退場ニ而候、甚旨可被心得候、已上

三月廿六日

一自今夜御人足志人宛御門江参、開閉仕候様ニ申付ル

是御門番関右衛門煩候ニ付、如斯

四月二日

一御徒那須助右衛門次男助太郎次江初而入学仕ル、十一歳

四日

一三谷小兵衛三男良伯初而入学、十一歳、左座

八日

一尾多見村ノ医師宗伯次男玄徳講釈聴聞ニ初而出ル

四月十五日

一今朝左之通被仰渡

殿様益御機嫌能、去ル五日御登城、於御前御一字御腰物御拝領、侍従ニ

御拝任、御名ヲ大炊頭様ニ被仰付候条、被仰渡有之

廿六日

一宮田文之丞初而入学、十一歳、右座

是岡助右衛門伯父岡義介縁者、庭瀬板倉右近殿家中宮田茂兵衛子ニ而

義介方江居住仕参校

五月四日

一参校并内講習止、如例

十三日

一東条吉之丞只今迄習字之師勤候処、今度御家中御奉公書出申ニ付、是又御

雇ニ而右之通相兼勤之候筈ニ成ル

五月十三日

一古家吉之丞右御奉公書方江御雇ニ而、東条吉之丞手伝ニ申渡入、改名喜兵

衛

十四日

一河田七介弟藤介初而入学、十一歳、左座

同日

一高畠亦兵衛子六三郎右同断、九歳、右座

同日

一自今夜又御門江人足志人宛参、開閉仕ル

是御門番関右衛門一旦快気仕り候処、再発仕ルニ付、如斯

廿二日

一参校止、如例

是依故羽林君御忌日也

廿六日

一国府兵左衛門初而入学、十四歳、左座

同日

一湯浅源左衛門三男惣吉右同断、九歳、左座

同日

一箕輪宗悦子宗有右同断、十二歳、右座

- 廿九日
 一 槐舎御留帳場西ニ竹連子之半窓明
 六月五日
 一 山根又八自今日学房ニ来居、杉舎ノ奥
 六月十一日
 一 御納戸方ノ御書物品々今日辻本文平ヲ差遣、為請取、文庫江納
 是從江戸来ル備前守様御書物学校江可納旨、日置隼人殿方申来ル之条、
 池田主殿殿被仰渡、如斯
 (挾紙)
 一 遊仙窟抄 五冊
 一 曼荼羅絵抄 五冊
 一 御即位庭上ル図 一冊
 一 十帖源氏 十冊
 一 聖徳太子伝記 二冊
 一 公事根元集積 三冊
 一 両大師縁起 五冊
 一 日本海山潮陸図 一枚
 一 女用訓蒙図彙 五冊
 一 諸芸小鑑 小本六冊
 一 家内重宝記 一冊
 一 広益書籍目録 三冊
 一 花押藪 同七冊
 一 中華百人一詩 一冊
 一 十訓抄 匣入九冊
 一 初学便蒙集 五冊
 一 日本事跡考 二冊
 一 和哥名所指南 二冊
 一 五経小本 匣入六冊
 一 公武栄枯物語 八冊
 一 一目玉鉾 四冊
 一 卜養狂哥集 二冊
 一 異形仙人絵本 三冊
 一 一休諸国物語 五冊
 一 大和西銘 一冊
 一 花伝抄 八冊
 一 和漢朗詠集 二冊
 一 孝経大義 一冊
 一 四書 五冊
 一 訓蒙図彙 箱入八冊
 一 画本宝鑑 匣入六冊
 一 三才図会拔書 匣入六冊
 一 太平武鑑 三冊
 一 帝王通記 一冊
 一 昼夜調宝記 一冊
 一 伊勢物語美典 匣入一冊
 一 江戸惣鹿子 七冊
 一 一万倍節用集 一冊
 一 華夷通商考 二冊
 一 続世継 十冊
 一 怪談録前集 五冊
 一 唐詩画譜 八冊
 一 一分間江戸図 一枚
 一 千字文 一冊
 一 保元平治参考 十五冊
 一 日本鹿子 匣入十二冊
 一 瀟湘八景 二冊
 一 日光山図 一枚
 一 錦繡枕 五冊
 一 帝王正統録 三冊
 一 外百番諷本 匣入二十冊
 一 新編鎌倉志 十二冊
 一 内百番謡 匣入二十冊
 一 祝言明真説 匣入一卷
 一 難波戦記 五冊匣入
 一 同統編 一冊
 一 明軍記 十七冊
 一 栄花物語 九冊
 一 説文談譜 十二冊
 一 日本百明伝抄 六冊
 一 合類節用集 五冊
 一 三代記 七冊 内 明徳記三冊
 一 徒然草諸抄大成 二十冊
 一 袖珍哥枕 八冊
 一 弁慶物語 二冊
 一 平家物語 十二冊
 一 和国名所鑑 三冊
 一 庭訓往来 四冊
 一 四姓哥合 二冊
 一 一分間江戸大絵図 一枚
 一 一分間江戸大絵図 一枚
 一 信長記 十二冊
 一 諸家系図 十四冊
 一 西行撰集抄 九冊
 一 万宝全書 同十三冊
 一 和漢合運 小本四冊
 一 仏像図彙 匣入四冊
 一 百人一首絵抄 一冊
 一 書籍目録 五冊
 一 料理指南抄 五冊
 一 本草綱目原始 十二冊
 一 古曆便覧備考 二冊
 一 慶長記 画本二冊
 一 東鑑 十三冊
 一 大系図 三十冊 目録一冊
 一 易経集注 十冊
 一 山海経 七冊
 一 哥仙金玉抄 三冊
 一 古今栄雅抄 十六冊
 一 倭漢歴代備考 十一冊
 一 応仁記二冊 承久記二冊
 一 北条五代記 十冊
 一 大和墨 三冊
 一 武用弁略 八冊
 一 和歌拾影 三冊
 一 和歌職原抄 八冊
 一 嶋原軍物語 四冊

- 一朝鮮和国馬上曲乘 二冊
- 一七十二候 五冊
- 一御伽婢子 十三冊
- 一七書 七冊
- 一西国太平記 十冊
- 一年代記絵抄 七冊
- 一人倫訓蒙図彙 八冊
- 一神代卷 二冊
- 一本朝孝子伝 六冊
- 一古今制作原始 二冊
- 一年中重宝記 六冊
- 一芳野拾遺 四冊
- 一本朝百詩伝 二冊
- 一京大絵図 壹枚
- 一二十四孝諺解 二冊
- 一唐朝年代記 六冊欠卷アリ
- 一本朝年代記 五冊
- 一古事風体抄 五冊
- 一東垣食物本草 八冊
- 一徒然草絵抄 四冊
- 一鳴羽搔 三冊
- 一婦人養草 十冊
- 一校正韻鏡 壹冊
- 一手鑑指南抄 壹冊
- 一名所和哥百人一首 壹冊
- 一古曆便覧 一冊
- 一装束図式 二冊
- 一大坂物語 四冊
- 一武家百人一首 壹冊
- 一保元物語 六冊
- 一物市 三冊
- 一武家節用集 三冊
- 一八幡御本地 三冊
- 一新古今和哥集 四冊
- 一系図百人一首 壹冊
- 一象戯作物 二冊
- 一平家物語許文卷 中下二冊
- 一諸家伝 壹冊
- 一和漢合運指掌図 四冊
- 一諸家巴系図 二帖
- 一百人一首像讚抄 三冊
- 一童訓集 壹冊
- 一觀音経和談抄 三冊
- 一大鑑 匣入二十一冊 内水鑑 三冊
- 大鑑 八冊 増鑑 十冊
- 一前太平記 匣入廿一冊
- 一甲陽軍鑑 同二十冊
- 一後太平記 同廿二冊
- 一廿二代集 廿一冊
- 右末六月十五日、瀧川弥右衛門・泉八右衛門・志水忠右衛門を送手形相添
- 一十八日
- 一申由二付、如斯
- 一自今日内参校初ル
- 是昨日土用二入、如例、小生中左之衆就望、如斯
- 野々村辰之介 安部伝之介 丹比平之介
- 沢 慶春 大内権蔵 斎藤兵之介
- 寺内円之丞 井上藤次郎 富田弥左衛門
- 国府兵左衛門 山脇七郎 柴岡宗伯
- 箕輪宗有 河田藤介 野村三次郎
- 湯浅惣吉
- 六月廿二日
- 一内講習大学或問土用中止、如例
- 廿三日
- 一講堂之講釈止、如例
- 廿九日
- 一諸生中江瓜出ル、如例
- 七月朔日
- 一自今夜今月中校内夜行之制、如例
- 五日
- 一諸生中廻状出ル、如例
- 来ル九日より虫干御座候二付、九日十一日之内参校止申候、来ル十七日

之本參校方御出可被成候、已上

七月五日

小原宗介
市浦善藏

諸生中

七月六日

一内參校止、如例

九日

一今日虫干有之筈之処、昨宵迄雨湿有之ニ付、相延ル

同日

一土用明候得共、參校止

是虫干之断依有之也

同日

一晚詩経内講習止

右同断

十日

一自今日御書物并諸道具虫干仕手伝衆、如左

笹岡忠八郎

松村弥五郎

今中助太郎

東条吉之丞

小原善大夫

窪田藤十郎

内藤万清

山根又八

和田弥兵衛

長崎才次郎

山口三隆

横山清内

柳川敬中

和田紋七郎

通之小子

七月十一日

一虫干右同断

同日

一長崎才次郎只今迄森本才右衛門預候武具・馬具、可有預之旨岡助右衛門申

渡又

十二日

一御書物改仕ル、安井李兵衛出座

同日

一自今日十六日迄參校内講習共ニ止、如例

十三日

一森本才右衛門方長崎才次郎江武具馬具引渡之、安井李兵衛出合

十六日

一森本才右衛門、内匠頭様御屋敷江自今日相詰ル、改名勘兵衛

是当夏内匠頭様江依被召出候也

十七日

一參校初ル

廿七日

一森本勘兵衛今日退校、布施平四郎方江參候由、且卷上下式具、此度被召出候為御祝儀被遣之

(朱書)

「七月十八日、岡助右衛門於江戸御留方御用被仰付、広沢喜之介同役兩人

として一人宛江戸へ相詰候様被仰付、助右衛門十月初江戸発足ノ筈」

七月廿九日

一中村忠次郎学房江来居之願有之、其通今日申渡又

八月三日

一二日市町医師山口宗運子育庵講釈聴聞ニ初而出ル

九日

一田中真吉孫吉太郎初而入学、十四歳、左座

十二日

一駒田延融子友省今日より来居、朝夕校厨喰捨被下、但学房並ニ付、除列座之札

是延融儀逼迫仕ニ付、簡略之儀願候処、友省義ハ学校江御入御養被成

次男ハ御郡会所之通之子並ニ依被仰付候也

八月十五日

一中秋月之詩会有之、如例

十六日

一中村忠次郎自今日学房ニ来居

但槐舎東方二間目柳川敬中用部屋ニ居ス、敬中用部屋ハ杉舎之東ノ端ニ
申付ル

十九日

一 広沢喜之介御廟学校奉行岡助右衛門・笹岡次郎七郎同事ニ被仰付、今日方
学校江出勤仕ル

廿五日

一晚左之御用人中参会松舎、料理出ル

小堀彦左衛門 今井文左衛門 安田孫七郎

岡 助右衛門 笹岡次郎七郎 広沢喜之介

廿六日

一 丹木仁蔵廿四日ニ出テ今日帰ル

是宗門判形ニ付、如斯

廿九日

一日笠喜三郎・高取九大夫一昨廿六日ニ出、今日帰ル

右同断

九月三日

一 豊嶋喜左衛門去月廿七日ニ出、今日帰ル

右同断

四日

一 浅野忠左衛門去月廿一日ニ出、今日帰ル

右同断

同日

一 淡川友古子典沢初而入学、十歳、左座

九日

一 昨今講釈并参校止、如例

十四日

一 音楽下吹有之

是依御祭礼也

十七日

一 昨今参校并内参校共ニ止、如例

廿日

一 岡助右衛門・津田源六郎一昨十八日ニ閑谷江参、今日帰ル

廿一日

一 御門番関右衛門病死仕ル、御門番ニハ御人足勤ル

廿四日

一 辻本文平当十八日ニ閑谷江参、今日帰ル

廿五日

一 御門ノ関右衛門後家今日笹岡次郎七郎長屋倅助七郎部屋江引取ル

同日

一 自今夜御門へ御人足式人宛勤番仕ル

廿八日

一 伊木将監殿家来村瀬覚之介講釈聴聞ニ初而出ル

廿九日

一 参校并内講習共ニ止

是於国清寺依御法事有之也

同日

一 和意谷百姓家ニ軒昨昼時焼失仕候条、注進ニ来ル

同日

一 浅野忠左衛門校厨御賄今日迄ニ而代ル

十月朔日

一 野口七兵衛校厨御賄今日方勤ル

同日

一 江田甚三郎御国絵図方江当五月十六日より出、今日迄相勤ル、但出勤日出

入有之

是御目附衆江上り候御国絵図之石郡村所之書付仕候儀、御郡代藤岡勘右

衛門ノ岡助右衛門・笹岡次郎七郎江御頼有之度旨申来候ニ付、如斯

十月五日

一 岡助右衛門今日江戸江発足仕ル

十五日

一 御門番ニ和氣郡稻坪村孫大夫被抱、今日妻子共引越參、自今宵相勤、切米
七俵老人半扶持被下候旨申渡ス

是只今迄大役ニ而御郡会所催合方簡略方小使相勤申候者也

十六日

一 内講習之大学或問今日講シ終ル

十九日

一 広田与五郎次男甚六郎初而入学、十二歳、右座

廿八日

一 講堂孟子今日講シ終ル、講者小原宗介

十月廿九日

一 參校并内講習共ニ止

是曹源寺様依御一周忌也

十一月二日

一 番所并梧舎之炬開

是只今迄依暖氣也

同日

一 御徒佐野紋右衛門子紋三郎次へ初而入学、十歳

三日

一 講堂之講釈自今日中庸講シ初、講者和田弥兵衛

七日

一 左之両人自今日槍打太刀ニ被出候筈ニ成ル

大内藤藏 笹岡忠八郎

十四日

一 自今日食堂并舎々江火鉢出ル

是只今迄依暖氣也

十五日

一 今晩御普請奉行杉山弥兵衛并手代ニ料理出ル

是馬場江沙入并校中道直、且又泮池石垣ニ馳石仕ニ付、如斯

十一月十八日

一 笹岡次郎七郎居宅内所屋根只今迄置瓦にて有之処、損シ候故、今度瓦屋根
ニ仕り、去月九日ニ取掛り、今日迄ニ出来

廿一日

一 松舎之南新長屋当八月十五日ニ普請初り、今日迄ニ出来

是閑谷之馬場脇ニ有之候宿家ヲ毀テ取寄立之也

十二月四日

一 山根又八・和田弥兵衛、右之御長屋御借シ候旨申渡ス、依之両人共右御長
屋江移候ハ、諸事入用ニ可有之由ニ付、銀七百目宛御借シ被成候条、是

又申渡ス

同日

一 東条吉之丞御奉公書方相勤候ニ付、習字之師ハ被差除之、習字方へハ江田
甚三郎ニ相添、柳川敬中可相勤之旨申渡ス

十二月四日

一 和田弥兵衛儀只今迄山根又八と読書場肝煎相勤之候処、右ハ又八一人ニ而
両舎可兼勤之、弥兵衛ハ食堂札割可勤之旨申渡ス

同日

一 但只今迄札割ハ柳川敬中相勤候

同日

一 椀方七介暇ヲ乞候ニ付、其通ニ申付ル

是小堀彦左衛門預御足輕ニ依出候也

同日

一 御人足尾上村之五介右同断ニ申付ル

同日

一 同高尾村之与介暇遣ス

是前与介義当春暇ヲ乞候而、若原監物預り御足輕ニ出候、其節代リニ立

ニ付、此度如斯申付ル

十二月六日

一 御人足三介七介代り椀方ニ申付ル、半俵御加増已上四俵被下

同日

一同御留帳方ノ仁介半俵御加増已上四俵被下

同日

一左之四人之者共代リノ御人足被抱、切米何茂三俵ツ、

但内志人ハ増シ人也

野殿村 九介

浜村 久介

東河原村 角介

万成村 八藏

八日

一近藤猪之介講釈聴聞ニ初而出ル

是近藤作之丞甥也

九日

一校厨方御門脇迄水拔之溝杉山弥兵衛手方広ク致候処、今日迄ニ成就

十二日

一和田弥兵衛新長屋江今日移ル

十二月十二日

一寒ニ入、自今宵粥出ル、如例

十三日

一塩見玄三弟子戸羽三沢講釈聴聞ニ初而出ル

同日

一講堂中庸之講釈今日迄ニ而止、如例

同日

一槍稽古右同断、竹舎江昼ほたもち出ル、如例

十四日

一参校右同断、昼ほたもち出ル、如例

同日

一合衆有之

同日

一詩経内講習今日迄ニ而止、吸物酒出ル、如例

十五日

一山根又八今日新長屋江移ル

十六日

一煤掃有之、如例、御足輕四人出ル

十七日

一参校諸生中江廻状出ル、如例

各様来年も御参校可成と思召候御方者、御名之下ニ御書付可被下候、若

来年ハ御休可被成と思召候御方ハ、是又同前ニ御書付可被下候

一来年御参校可被成と思召候御方ハ、正月五日読初にて御座候、四ツニ始

り申候間、其前ニ御参校可被成候、尤毎之通孝経御持参可被成候

一服御座候御方ハ、読初ニハ御遠慮可被成候、但槍遣初ニハ御勝手次第不

苦候、以上

十二月十七日

小原宗介
市浦善藏

諸生中

十二月十七日

一来年廿歳之諸生江切紙、如例

来年廿歳ニ御成被成候間、御法之通列座之札ヲ除申候、講釈御聴聞ニハ

御勝手次第御参校可被成候、以上

十二月十七日

十二月十七日

一槍師匠衆江廻状出ル

来年正月五日学校例年之通読初ニ而、槍遣初是又例之通御座候間、朝四

ツ前ニ被仰合御参校可被成候、小生衆之外毎稽古ニ御出被成候御方へも

御伝可被下候、以上

十二月十七日

小原宗介
市浦善藏

荒尾紋左衛門 田中惣兵衛

上嶋浅右衛門 糟谷源左衛門

守田与介 平井安兵衛

伊丹久八郎 梶川孫三郎
丸山九右衛門 大内藤蔵
笹岡忠八郎

十二月廿二日

一 奉行中寄合有之

同日

一次田忠兵衛為御褒美錢老貫文被遣之

是作事方精二入依相勤候也

同日

一 和田紋七郎只今迄片飯台計二而勤候之処、自今朝夕支度仕候様二申渡ス

廿五日

一 中室御煤掃有之、如例

同日

一同所鏡餅舂之

同日

一 江見仁兵衛江金子貳百疋被遣之、如例

晦日

一晚校厨料理、如例

一 当年参校之諸生凡七十四人

内入学十六人 山脇七郎 十三

再参校

井上藤次郎 十五

富田弥左衛門 十五

国府兵左衛門 十四

田中吉太郎 十四

三谷良伯 十一

河田藤介 十一

箕輪宗省 十二

広田甚六郎 十二

斎藤兵之介 十一

宮田又之丞 十一

大内権蔵 十

淡川奥沢 十

湯浅惣吉 九

市浦二郎 八

高島六三郎 九

左之両人学房同事二付、除列座

窪田藤十郎

駒田友省

一次之小子十人

内一人入学 佐野紋三郎

一 坂口勘左衛門弟子ニ成り檜檜占ニ出ル諸生如左

正月五日 浦上市三郎

同断 柳川敬中

同月十七日 小生 冲 安次郎

二月十七日 同 広田万次郎

同廿七日 上嶋吉次郎

同断 富田弥左衛門

三月十七日 井上藤次郎